枕草紙
源氏物語
選
釋

315-230
1200701771171
315
230

早稲田大學藏 永井一孝遺

枕草紙

源氏物語

選

釋

早稲田大學出版部藏版

30. 8. 26

早稲田大學教授　永井一孝述

枕草紙
源氏物語　選釋

早稲田大學出版部藏版

大正
6. 5. 17
製本

枕草紙 源氏物語 選釋目次

枕草紙

緒言……一
一　家は……五
二　すさまじきもの……三三
三　心ときめきするもの……四六
四　かたはらいたきもの……四八
五　くちをしきもの……五〇

源氏物語

緒言……八二
雨夜の品定……八八
夕がほ……一七四
若紫……二五九

枕草紙
源氏物語 選釋

早稲田大學教授 永井一孝述

枕草紙

緒言

枕草紙の作者は清少納言といふ婦人。清少納言の一族は祖宗以來學者の系統である。祖宗の舍人親王は『日本書紀』の撰者、中程の清原夏野は『令義解』の著者で共に有名の學者であるが、曾祖父の深養父は『古今集』時代の名高い歌人で、父の元輔は『後撰和歌集』の撰者の一人として梨壺の五人の中に數へられた人である。少納言は實に其の流を稟けて世に出でた。本名は今日傳はつてゐない、清少納言といふのは宮中での呼名である。三十歳前後の頃から一條帝の中宮定子に仕へて女房となつたが、それより絶えず朝紳宮女の間に交つて、雅を競ひ艶を爭うて、才名を平安城裡に恣にしたのである。然しそれも只僅に十年かそこいらの間で、長徳二年十二月十六日皇后定子(中宮これより先に皇后となる)の崩御の

後は、かれの消息は杳として少しも解らない。見るかげもなく落ぶれて、或は四國に落ち行きしとも、或に奥羽にさすらうたともいはれてゐる。

少納言は幼少の時から學問をして、能く詩文を暗誦し、長じて博識多聞の聞えがあつたが、その性質は非常に負けず嫌ひで人を人とも思はないところがあり、學問を衒ひ、才を誇つて、盛に議論と鬪はし、有髯男子をも瞠若たらしめたことがあつた。さばれ其の才華の溢るゝところ、興に乘じて爲すところの輕快にして機敏なのには、何人も驚嘆を禁じ得なかつたやうである。

少納言が此の草紙を書いた年代は詳かでないが、大方中宮に仕へてゐた折のものらしく、晩年になつてからも又多少筆を加へたものであらう。

この草紙は平安王朝文學の中でも白眉といはれるもので、隨筆心での雄篇である。すべて自己の目に觸れ、耳に聽いたことをば、或題目の中に筆に任せて書き集めた者で、それに自己の隨時の感想と經驗とを挿んでゐる。一たび此の草紙を繙く時は、華麗を爭うた平安王朝の昔、かれらが生活の中心であつた宮中に縉紳宮女の相戯れ相嘲つた有樣が躍如として眼前に髣髴するを覺える。その他四季をり〳〵の光景を始め、山川草木より鳥蟲の類に至るまで、興ありと認めらるゝものをば、細大漏さず之を捉へ來つて、細かに觀察し批評してゐる。そのきび〳〵として齒ぎれのよい事は、今讀んでも胸がすくやうである。殊に色彩の調和に意を用ひたるあたりは、實に嘆賞を値ひする。そして是等の事を叙したる其の筆づかひは、誠に縱横自在であつて、少しも澁滯したる所なく、全く當時の冗長柔弱なる弊より脱して、飽くまで簡潔に、飽くまで遒强である。尋常人が二三十語を費しても言ひ得ないところをも、僅に兩三語で言ひ盡してゐるなど、總て人の意表に出ることが多い。所謂寸鐵人を殺すとは、かくの如きを言ふのであらう。就中、觀察の極めて精緻にして警拔なのは、其の一大特長である。

かくの如く、少納言の文章は實に痛快警拔を極めてゐるが、其の代り溫情の流露してゐる箇所を認めることは殆ど出來ない。これ少納言が總ての物に對して觀察的批判的の態度を持してゐたからであらう。これを他の女性の情熱的なのに較べると、稍乾燥してゐる觀はあるが、醜美を識別し得る天禀の才が之を助けて、一脈の春風おのづから其の中に吹きわたり、趣味津々として盡くる所を知らない。

要するに、此の草紙は少納言を反映したものである。かれが一歩も人に讓る

ことの出來ない高慢の性と冷かなる情緒と淡き哀愁の影と、それが聽てこの草紙となつたものであらう。

枕草紙といふ題號については古來數說あるが、本書の卷末に「枕にこそはし侍らめ云々」とあるのに由つたのであらう。何れにしても枕草紙といふ題號は後世になつてから附けたもので、もとは『清少納言の記』又は『清少納言』などと呼んだものである。現に『禁秘御抄』『八雲御抄』『明月記』などには『清少納言が記』と書き、活字本には『清少納言』とばかり書いてある。何時頃より『枕草紙』といふ名を附けたかは能くは解らないが、清原賴元の『抄』には大炊殿本に初めて『枕草紙』とあるといつてゐる。

此の草紙の冊數は或は二冊であるといひ、三冊であるといひ、五冊であるといつてゐて、一定してゐない。

註釋書は古來北村季吟の『枕草子春曙抄』といふのが弘く行はれてゐる。加藤盤齋の『枕草紙抄』といふのも亦見るべきところがある。明治になつては松平靜といふ人の『枕草紙詳解』が東京の書肆誠之堂から出版されてゐる。なほ季吟の『春曙抄』は鈴木弘恭の訂正增補したものがよい。

一　家は

清涼殿のうしとらの隅の北の隔なる御障子には、荒海の繪、生きたるものどもの、怖しげなる手長足長をぞ書かれたる。うへの御局の戸押しあけたれば、常に目に見ゆるを、憎みなどして笑ふ程に、勾欄の下に青き瓶の大なる据ゑて、櫻の甚じく面白き枝の、五尺許なるをいと多くさしたれば、勾欄の下までこぼれ咲きたるに、晝つ方、大納言殿櫻の直衣の少しなよらかなるに、濃き紫の指貫、白き御衣ども、上に濃き綾のいと鮮明なるを出して參り給へり。

大意　清涼殿の事を書く序に、中宮定子の全盛の頃の事を書き出したのである。櫻

の花の亂れて咲いてゐるのを瓶に挿してあるに、大納言が櫻の直衣に紫の指貫を穿いて居られた趣のいかに美しかつたらうかゞ思ひ遣られる。

語釋　○清涼殿。天皇の常の御殿の名。○うしとらの隅。東北の隅。○北の隅。なる此障子。清涼殿の北の方を隔つる爲に立てゝある障子で、普通に荒海の障子といつてゐる。此の頃の障子は今の襖の類である。○荒海の繪。この繪は手の長い人が足の長い人に負はれて魚を捕へようとしてゐる樣を畫いたもの。○生きたるものゝ怖しげなる。これは荒海の繪の說明で、怖しげなるといふのは手長足長の樣をいつたのである。○上の御局の戸。上の御局は清涼殿の御座の傍の一間で、皇后、女御、更衣、などの參仕する所である。そこの戸を押しあけると常に荒海障子が見えるやうになつてゐる。○憎みなどして。常に目に見えるのであるが、怖しき樣に畫かられてあるので、常に見て憎みなどして笑ふのである。○勾欄。緣の欄干をいふ。○畫つ方。畫の頃。○大納言殿。中宮定子の兄の伊周公を指したのである。○櫻の直衣。櫻は襲色目の名で、表が白く裏が葡萄色。直衣は高貴の人の平服である。○なよらかなる。しんなりと柔なる。○濃き指貫。濃きは紫色の濃きこと。指貫は裾に括り紐があつて、足に括りつけるやうに出來ている袴。奴袴とも書く。もとは裾を高く括り上げて奴の走り歩くに用ひたもの、それが後には公卿の着用するものとなつたのである。○白き御衣ども。直衣の下に着たるもの。○上に濃き綾の。濃き綾は濃い紫の綾織物である。單に濃きといひ薄きといへば、普通紫色に限るのである。○鮮明なるを出して。美しく目の覺めるやうなのを、上衣の下より態と裾の見えるやうに着たので、即ち濃い紫の綾の出衣を着たのである。さて出衣とは上衣の下から下着の裾の美しいのを外に見えるやうに製したもので、儀式には用ひず、唯風流華奢の爲に製したものである。

通釋　清涼殿の東北の隅の北の處を隔てる爲に立てゝ置く御障子には荒海の繪があるが、其繪には生きたるものどもの怖しさうなる手長足長が畫かれてある。上の御局の戸を押しあけてあると、その繪が見えるので、いつも〳〵見て憎んだりして笑つて居る間に、勾欄のもとに、大い青磁の瓶を据ゑて、櫻の甚だ面白い枝の五尺位あるのを大層多く挿してあるから、其花は勾欄のもとまでも咲きこぼれて、それが頗る美しいのに、晝頃に、大納言殿が、櫻の直衣の少し柔

いのに、濃い紫の指貫を穿いて下には白の御衣を着、其下に濃き紫の綾織の大層はつきりと美しいのを出衣にして御出でになつた。

上の北方に御座しませば、戸口の前なる細き板敷に居給ひて、ものなど奏し給ふ。御簾の内に女房櫻の唐衣ども、くつろかにぬぎ垂れつゝ、藤、山吹などいろ〳〵に好もしく、あまた、小半蔀の御簾より押出でたる程、日の御座の方に御膳まゐる。足音高し。けはひなどをし〳〵といふ聲聞ゆ。うら〳〵と長閑なる日の景色いとをかしきに、終の御盤持たる藏人參りて、御膳奏すれば、中の戸より渡らせ給ふ。御供に大納言參らせ給ひて、ありつる花のもとに歸り居給へり。

大意 主上が上の御局に御出でになつてより、晝の御食事の爲に御歸りになる、その御供に大納言が參つて又歸つて來る迄の事を書いたものである。其間に暖かなる春の日の靜けさがよく寫し出されてゐる。

語釋 ○上。主上の事で一條天皇を指していふ。○北方に。中宮定子の居られる上の御局に。○戸口の前。上の御局の戸口の前。○細き板敷。緣の板敷○ものなど。四方八方の御物語をなさる。○女房。身分あるものゝ娘が宮中に仕へてゐて、房を與へられたるものゝ稱である。こゝは定子に仕へてゐた女を指す。○櫻の唐衣。櫻重ねの唐衣で、唐衣は唐の服裝を模して作つたものである。身丈と袖幅とは短く、身の前は袖の丈とおなじく、後は袖よりも短く製する。上蔕より下仕に至るまで女はこれを用ひたものである。○くつろかにぬぎ垂れつゝ。ゆつたりと寛かに着流すをいふ。○藤、山吹など。皆襲の色目の名で、何れも春の衣裝である。藤は表が紫、裏が薄紫。山吹は表が朽葉色で裏が黃。○いろ〳〵に好もしく。それ〴〵好に隨つて着なしたのである。○小半蔀。半蔀は、下は格子又は板などが打ちつけてあつて、上半分が蔀になつてゐて、外に釣上げるやうに出來てゐる。小半蔀は其小さいものである。○御簾より押出でたる程。女官達の衣の裾や袖が、簾より押出て表はれて見える有樣。程とは樣子有樣をいふ。○日御座。清涼殿の中にあつて、晝間天皇の御座なさる處。○御膳まゐる。晝の御膳をさし上げる。○

足音高し。御膳部を持ち運ぶ足音が高い。春の日の靜かなのでよくこれが聞えるのである。○けはひ。行き通ふやうす。○をし〳〵。藏人が御膳部を運ぶ時の警の語で「をし〳〵」といふのである。○うら〳〵と長閑なる日。春の日の麗に晴れて物靜かなる日。○終の御盤。一番終に臺盤を持つて來て、其上に品々の御食物を供へるのである。其臺盤をいふ。○藏人。藏人所の役人で五位或は六位である。其中六位の藏人が宮中の些細の公事を勤め、朝夕の御膳の給仕をする。○御膳奏すれば。御膳部の供の終りたる由を申あげる。○中の戸。上の御局の中の戸。○ありつる花のもと。前に青磁の花瓶に挿したる櫻の花のもとである。

通釋 主上が此方の御局に御座なさるから、大納言殿は御局の戸口の前なる緣側に居られて、物語などを申上げなさる。御簾の內には女房が櫻重ねの唐衣などを寬に着流してゐて、尙其外に女房達の藤色、山吹色の唐衣どもを夫々自分の好み〳〵に隨つて着てゐるものが許多居て、其等の衣裝の端などが小半蔀の御簾より食み出でゝ見える樣の、それが面白いと思つてゐる中に、日御座の方では御膳部の御供をする。足音が高く聞える。又藏人などの行き通ふやうすや、「をし〳〵」といふ聲が聞える。うら〳〵と晴れて物靜なる春日の景色の大層面白いのに、をはりの御臺盤を持つて行つた藏人が來て、主上に、お供の濟んだ由を申上げると、主上は御局の中の戸から日御座の方へ御渡りなされる。御供に大納言が參らせられたが、すぐ立かへつて、また元の櫻の花の處へ御ゐでなされた。

宮の御前の御几帳押し遣りて、長押のもとに出でさせ給へるなど、唯何事もなく萬にめでたきを、侍ふ人も思ふことなき心地するに、「月も日も變り行けども久に經る御室の山の」といふ故ことを、ゆるらかにうち詠み出して居給へる、いとをかしと覺ゆる。實にぞ千歲もあらまほしげなる御有樣なるや。

大意 萬に不足なき中宮定子のいともめでたき御有樣を書いたのである。

語釋 ○宮の御前。中宮定子をいふ。御前は敬稱。○御几帳。臺に柱を立て、上に橫木を渡して帳を掛けたもので、高貴の人は常に此帳の內にゐたものである。○長押。殿中、上段と下段とあるうち其上段の敷居の下に長押はつけて

ある。長押の下といへば下段をいふのである。○唯何事もなく萬にめでたきを。これと取立てゝいふ事もなく唯總て譯もなく結構である。○侍ふ人。中宮の御側に伺候してゐる人。清少納言を初め、他の女房どもを指したのであらう。○思ふことなき心地。何一つとして不足に思ふことのない心持。○月も日も變りゆけども……御室の山の。新勅撰集に出てゐる歌で、月も日も變りゆけども久に經る御室の山のとこ宮所」とあるをいひ、久に經るは久しく年を經ること、とこ宮所は永久に變りのない宮所といふ意である。此歌は萬葉集の卷の十三に出てゐるが、とこ宮所がとつ宮所となつてゐる。これ伊周公が天氣麗に晴れ渡りて櫻の咲きこぼれたるなど、唯おもしろく長閑なる御殿の上に、中宮が數多の人にかしづかれて時めき給ふを見て、嬉しさのあまりに古歌を思ひ出でゝ主上中宮の御上を祝ひ奉りて詠じたのである。○ゆるらか。歌を詠む調子の寛かなること。○實にぞ……御有樣なるや。いかにも此歌の如く、主上と中宮との御上は千歳もかくて見奉りたき御有樣であるよ。や、感動詞。

通釋 中宮の御前が御几帳を彼方へ押遣つて、長押のもとへ御出なされた樣子などは、唯もう何といふこともなく總て立派に結構な有樣であるを、そこに伺候してゐる人々も見奉りて、何一つ不足に思ふこともない心持のするに、大納言殿の、月も日も變りゆけども久に經るみ室の山の」といふ古い歌を寛かに詠み出してゐなさるが、大層面白いことゝ思はれる。いかにも主上と中宮との御上は、かくして千歳もありたい樣な御有樣であるよ。

陪膳仕る人の、男どもなど召す程もなく、渡らせ給ひぬ。御硯の墨磨れと仰せらるゝに、目は空にのみにて、唯御座しますをのみ見奉れば、程遠き目も放ちつべし。白き色紙おし畳みて、これに只今覺えんふること、一つづゝ書けと仰せらるゝ、外に居給へるに、これは如何にと申せば、疾く書きて參らせ給へ、男は言加へ侍ふべきにもあらずとて、御硯取りおろして、疾く〳〵唯思ひめぐらさで、難波津も、何も、ふと覺えん事をと、責めさせ給ふに、などさは臆せしにか、すべて面さへ赤みてぞ思ひ亂るゝや。

大意　主上再び中宮の御局に渡らせられて、女房等に古歌一つづゝ書けと仰せられたことを記す。

語釋　○陪膳仕る人。主上の御食事の時、御側につき隨つて仕へる女房などである。○男どもなど……渡らせ給ひぬ。御膳を片附ける爲に女房が藏人を呼ぶ程もなく、主上は中宮の御局に渡らせられたのである。○目は、空にのみにて。主上の御有樣のめでたさに自ら心を失うて、茫然と空の方をばかり睜られるといふのである。○程遠き月も放ちつべし。今迄は大納言伊周公を立派であると見ておつたが、主上の御座でになつてからは、伊周公の方を見る目も放たれてしまつて、主上の方へ目が移つてしまうであらうとの意。程遠きとは、伊周公は緣側に居たので、清少納言よりは遠ざかつてゐたからである。○白き色紙。只の白き紙。○只今覺えんふるごと。今覺えてゐるであらう古歌。○これは如何に。清少納言が外の緣側にゐる大納言に相談したる詞。○男は言加へ侍ふべきにあらず。清少納言から相談されたけれども、主上が女房達に仰せられたのであるから、男はこれに口を入れて助言すべきでない。○硯取りおろして。主上の御前より大納言が硯を取りおろしたのである。

○難波津も何も。難波津の歌と淺香山の歌の二つは、手習をするものゝ先づ最初に習ふものであるから誰でも知つてゐたのである。難波津とは「難波津に咲くや此の花冬ごもり、今を春べと咲くや此の花」にて應神天皇の朝三韓から來た王仁といふものゝ作といはれてゐる。何もは其外の歌何んでもよいといふ意である。○ふと覺えん事。ふとはチョット。直ぐに胸に浮んで來たらう事。○などさは臆せしにか。如何にして左樣に氣後れのしたのかと、清少納言自らが、自分を疑つたのである。

通釋　主上の御飯の給仕を勤められた女房が、藏人を呼ぶ間もなく、直ぐに主上は此方に御ゐでなされた。御硯の墨を磨れと仰せられるので胸がどきぐしして、目は空の方にばかりなつて、唯主上の御座ある御樣子をよく見ますれば、其御美しさには、彼方に居る大納言を見る目も放たれてしまうであらう。主上は白き紙を疊んで「この紙に今記憶してゐる古歌を一つづ書け」と女房らに仰せられるに、緣側にゐまする大納言に「これは如何したらよからう」と相談をすると、「早く書いて差上げなさい、男は助言すべきでない」と言うて、御硯を取りおろして「早く〳〵、別に思案せず、難波津の歌でも、何でも、つひチョット思ひ出した

ことを書け」と責めなさるに、如何してさやうに氣後れのしたのか、吾れながら不思議の位だが、みんなも面まで赤くして思ひ亂れてゐるよ。

春の歌、花の心など、さいふ〳〵も上臈一つ三つ書きて、これにとあるに、

年經れば齡は老いぬ、しかはあれど
花をし見れば物思もなし

といふことを、君をし見ればと書きなしたるを御覽じて、たゞこの心ばへどものゆかしかりつるぞと仰せらる。

大意 清少納言が歌を詠んで主上の御譽に預つたことを書いたもので、自ら即興の誇を示してゐる。

語釋 ○春の歌、花の心。時は春、櫻の花は咲き亂れてゐるので、女房達はこれらの歌を考へたのである。○さいふ〳〵も。左樣に如何しやうかうしやうといひながらも。○上臈。上臈の女房で、清少納言などよりは地位の上なるもの。○これにとあるに。二三人書いてから、清少納言の處へ紙を廻して來て、之れにお書きなさいといはれるに。○年經ればの歌。古今集にある歌で、染殿の后のお前で、瓶に挿したる櫻の花を見て、太政大臣良房公の詠んだもの。幾年となく年が立つたから齡も更けてしまつたが、然しながらこの櫻の花を見ると、別にこの世に思ひ殘すこともない、といふのである。これは表面の意で、其裏には、娘染殿の后が、時を得て盛なるを見ては、自分は年は寄つたが、最早心殘りもない、と悅んで歌つたものである。花をしのしは動詞。○君をし見ればと書きなしたるを。前の歌の花をし見ればの花を君と書き直したのである。これが即ち清少納言の即興であつて、緣には櫻の花があり、中宮定子は染殿の后の榮えたのにも似て、如何にも場合が良房公の歌を詠んだ時の如くであるから、直ぐ彼の歌を取つて來たのである。清少納言の才の機敏なのを示した一端である。○心ばへ。心ざま或は心がけ。○ゆかしかりつるぞ。ゆかしは心に嬉しく慕はしく感ずること、ぞはそれと指し定める助辭。

通釋 さやうに如何しやう、かうしやうなどと云ひつゝも、春の歌や花の心を歌うた歌などを、上臈の女房が二つ三つ書いて後、これに御書きなさいといはれるので、

年經れば齡は老いぬしかはあれど花をし見れば物思もなし

といふ歌を、君をし見ればと書き直して差上げたのを、主上が御覽になつて、「この心ざまのゆかしく覺えた事であるぞ」と仰せられる。

ついでに「圓融院の御時、御前にて『草紙に歌一つ書け』と、殿上人に仰せられけるを、いみじう書きにくゝ、すまひ申す人々ありける、『更に手の惡さ善さ、歌の折に合はざらんをも知らじ』と仰せられければ、佗びて皆書きける中に、只今の關白殿の三位の中將と聞えける時、

汐の滿つ出雲の浦のいつもく

君をば深く思ふはやわが

といふ歌の末を、賴むはやわがと書き給へりけるをなんいみじく愛でさせ給ひける」と仰せらるゝも、すゞろに汗あゆる心地ぞしける。若からん人はさもえ書くまじき事のさまにやとぞ覺ゆる。例はいとよく書く人も、あいなく皆つゝまれて、書き汚しなどしたるもあり。

大意 圓融院の御時、父關白殿が歌の末を書き直して譽められたことの、中宮定子の御物語を書いたものである。

語釋 ○ついでに。清少納言の譽められた次手にといふ意で、以下愛でさせ給ひける迄が、中宮の御物語である。○殿上人。四位五位の中の昇殿を許されたもの、並に六位の藏人をいふ。○すまひ申す人々ありける。すまひは爭ふことで、今日の角力はこれを名詞にしたのである。こゝでは辭退するといふ意。ありけるのけると前に係語もないのに連體法で止めたのは、下の文に續くべき語勢で、けるの下にがの字が省かれたものである。○手の惡さ善さ。書の下手、上手を言うたのである。今日でも字を下手に書くのを手が惡いといふ。○歌の折に合はざらんをも知らじ。春ならば春、花があらば花、歌は其折々を歌ふのをよいとするが、今は其折に合はなからう歌でも構ふまい。そんなことをばかれこれいふまい。○佗びて。何とも仕樣がなく困つて。○只今

の關白殿。中宮の御父藤原道隆公をいふ。○汐の滿つの歌。汐の滿つ出雲の浦は、いつもいつもと言はんが爲の序で、ば、や、は共に感動詞。わがは君といふ字の前に在るべきを轉倒したのである。即ちいつも〳〵吾れは深く君を思つてゐるよといふのが一首の意である。これは萬葉集に「川上のいづもの花のいつも〳〵、きませわがせこ時しけめやも」とあるのを、いつか、此の時代に右の樣に改めて歌つてゐたものであらう。○頼むはやわが。道隆公が思ふはやわがをかう書き直したのである。もとは戀の歌であつたが、即興にかう直してみると、天皇の事を頼み奉るといふ意味になつて、大變面白くなる。○すゞろ。別に何といふ譯もないこと。すゞろ歩きなどのすゞろもそれである。○汗あゆる心地。汗がにじんで出る心地。中宮の御物語を聞くにつけても、自分が一條院からあまりに譽められたことの恥かしさに、汗が出る心地のするのである。○え書くまじき。書き得まじきといふのと同じで、書くことの出來まい。○あいなく。面白くもなく。○つゝまれて。恥づかしさに心が臆して控目になること。

通釋 次手に、中宮が、「圓融院の御時、そのお前で、圓融院が『草紙に歌一つ書け』と殿上人に仰せられたのを、殿上人は非常に書きにくゝ思うて、御辭退申す人々がありましたが、圓融院の更に『手の惡いのや、善いのや又は歌の時節に合はなからうのをも構ふまい』と仰せられたから、皆が困つて書いた中に、只今の關白殿が三位の中將と云ひました時分に、

汐の滿つ出雲の浦のいつも〳〵君をば深く思ふはやわが

といふ歌の末の句を、頼むはやわがと書きましたのをば、圓融院が大層譽めさせられました」と仰せられるにつけても、何となく汗のにじみ出る心地がした。自分より若からう人は、左樣にも書くことが出來まい事の樣であらうかと思はれる。常には大層よく書く人も、面白くもなく皆氣後れがして、書き汚しなどしたのもある。

古今の草紙を御前に置かせ給ひて、歌どもの本を仰せられて、これが末はいかにと仰せらるゝに、すべて夜晝心に懸りて覺ゆるもあり。實に能く覺えず、申し出でられぬことは如何なることぞ。宰相の君ぞ十ばかり、それも覺ゆるかは。まいて五つ六

つなどは、唯覺えぬよしをぞ啓すべけれど、さやはけにくゝ仰事を榮なくもてなすべきといひ、口惜しがるもをかし。知ると申す人なきをば、やがて詠み續けさせ給ふを「さてこれは皆知りたる事ぞかし。などかく拙くはあるぞ」といひ歎く。「中にも古今あまた書寫しなどする人は、皆覺えぬべき事ぞかゝ。

大意　中宮が古今集をとり出されて、その歌の上の句を仰せられて、下の句を問はせられるに、女房達の更に答へ得ぬことをのぶ。

語釋　○古今の草紙。古今和歌集のことで、草紙といふは綴本といふ意。○御前に置かせ給ひて。中宮の御前に置かれて。○歌どもの本。歌どもの上の句即ち短歌の初の三句をいふ。○これが末はいかに云々。中宮が上の句をいはれて此の歌の下の句は何といふかと尋ねなされるに。○すべて夜晝心にかゝりて。すべて晝夜念頭にかゝつて。○げによく覺えず云々。いかにもよくは覺えず、即答申すことの出來ぬは、さてまあ何としたる事であるか。○宰相の君ぞ十ばかり。宰相といふ女官が十首ばかり覺えてゐる。○それも覺ゆるかは。十首ばかり覺えてゐるというて、それ位の者が古今を暗誦せるといふ仲間に入るべき事か、決して入るべきではない。○まいて五つ六つなどはたゞ覺えぬ由を啓すべけれど。況んや五首六首位覺えてゐる者に至つては、實に物の數にも入らぬものなれば、只何事も覺えぬ趣を申上げた方が然るべき事と思はれるけれど。○さやは……口をしがるもをかし。左樣に憎氣に、中宮の仰事をば、無愛想に言ひ榮もなく爲すべきか、さう出來ぬというて殘念がるのもおもしろい。○などかく拙くはあるぞといひなげく。なぜにかう覺がわろいのかと歎息する。○中にも……覺えぬべき事ぞかし。その中にも古今集を度々書寫した人々は、皆よく覺えてをりさうな物であるぞよ。この句以下中宮のいはれる事で、次に宣耀殿の女御の古今を暗誦せし事をいひ出さうとするのである。

通釋　中宮が古今集を御前に置かせられて、その歌どもの上の句を仰せられて、この下の句はと尋ね仰せられるに、すべて晝夜念頭を去らないで、覺えてゐる歌もあり、又いかにも覺えないで、即答の出來ないのは何とした事か、不思議千萬な事である。宰相といふ女官が十首ばかり覺えてゐるが、それ位では覺えて

ゐるといはれることか、左様にはいへない。況や五首六首ぐらゐのものなどは、たゞ全く覺えてゐない趣を申上げるのが然るべくは思はれるけれど、折角中宮の仰出される事をば、左様に憎氣に、言ひ榮もなく致される事でもないというて、殘念がるのもおもしろい。下の句を知ると申す人のなき歌をば、直に中宮の讀みつゞけさせられるを「さて之は皆知つてゐる事であつたぞよ。どうしてかう覺が惡いのか」というて歎息する。そこで中宮が「その中にも古今集を度々書寫した人々は、皆よく覺えてゐさうな事であるぞ。

「村上の御時、宣耀殿の女御と聞えけるは、小一條の左大臣殿の御女におはしましければ、誰かは知り聞えざらん。まだ姫君におはしましける時、父大臣の聞えさせ給ひけるは、『一には御手を習ひ給へ。次にはきんの御琴を、いかで人に彈きまさらんとおぼせ。さて古今の歌二十卷を皆浮べさせ給はんを、御學問にはせさせ給へ』となん聞えさせ給ひけると聞召しおかせ給ひて、御物忌なりける日、古今を隱して持て渡らせ給ひて、例ならず御几帳をひき立てさせ給ひければ、女御怪しとおぼしけるに、御草紙をひろげさせ給ひて、其年その月、なにの折、その人のよみたる歌はいかに問ひきこえさせ給ふに、かうなりと心得させ給ふもをかしきものゝ、ひがおぼえもし、忘れたるなどもあらば、いみじかるべき事と、わりなくおぼし亂れぬべし。その方おぼめかしからぬ人二人三人ばかり召出でゝ、碁石して數を置かせ給はんとて、聞えさせ給ひけん程、いかにめでたくをかしかりけん。御前に候ひけん人さへこそ羨しけれ。

大意 宣耀殿の女御の古今集の全部を暗誦せられたことを叙ぶ。以下、中宮定子の御物語。

語釋 ○宣耀殿の女御。芳子といはれた方のこと。女御は中宮につぐ女官の稱。○小一條の左大臣。藤原師尹公のこと。○きんの御琴。琴の御琴にて、七絃の琴をいふ。當時琴と稱するものに三種あつて、和琴と稱する六絃のもの、箏

というて今日普通に行はれる十三絃のもの、及び七絃の琴とである。○浮べさせ給はんを。暗誦なさらう事をの意。○となん聞えさせ給ひけると聞召し置かせ給ひて。以上の事を小一條殿が常に教へおかれたと村上天皇が聞召しおかれて。○御物忌。禁中にて御慎事があるをいふ。この日は御政務もなく、御外出もないのである。○例ならず御几帳をひき立てさせ。いつもとは異なつて、女御の方へ御几帳を引立てゝ隔を置かせられの意。几帳は臺に柱を立て、冠木に帷を垂れて、屏風衝立の如く、隔をおく料として用ゐるもの。○其年その月、何の折、その人。某の年某の月、何々の時に、某の人。○かうなりと心得させ給ふもをかしきものゝ。主上の問はせ給ふまゝに、其歌はかくくであると合點させ給ふも面白くはあるけれど。○ひがおぼえもし。覺えまちがひをも致し。○いみじかるべきこと。甚だ耻かしき事。いみじかるは單に甚しきといふ意なれど、前文の關係から、耻かしきといふ事の明瞭なるので省略せられたのである。○わりなく。理なくにて、俗語のやたらになどいふにおなじ。○その方おぼめかしからぬ人。その方の事即ち古今集の事の覺束なくはあらぬ人といふことで、古今の歌に精しく通じてゐる人の意。

通釋　「昔村上天皇の御時、宣耀殿の女御と申した方は、小一條の左大臣殿の御女であらせられたから、誰一人知らぬ事があらう。その女御が未だ姫君であらせられた時に、父の大臣が申させられるには、『第一には、習字をなさい。次には琴の御ことを、どうぞ人よりも上手に彈かうに思召せ。さて後には、古今集二十卷の歌を皆暗誦しようといふ事を御學問になさい』と常に教訓せられた事を天皇がお聞きおきになつて、御物忌で引籠つてゐられた日に、古今集をかくして持つて參られて、常に引きかへて御几帳を引立てられて女御との間に隔をおかれたから、女御は不思議な事とお思ひになつたに、天皇はやがて古今集をひろげられて、某年某月、何々の場合に、某の讀んだ歌は何といふかとお尋ねなさるに、それはかう〳〵であるとお答するのも面白くはあるものゝ、萬一覺えちがひでも致し、又は忘れたものなどがあらば、どんなに耻かしからうかと、むしやうに御心が亂れることであらう。天皇は古今の方の事をよく心得てゐる人を二三人召出されて、碁石で、女御の覺えちがひをば、數とりさせようと申されたらう時は、いかに晴々しく面白くあつたらうか。その時天皇の御前に侍つた人々までも、羨しく感ぜられる。

「せめて申させ給ひければ、さかしうやがて末までなどはあらねど、すべて露違ふこと無かりけり。いかでなほ少しおぼめかしく、僻事見附けてを止まんと、ねたきまでおぼしける。十卷にも成りぬ。『更に不用なりけり』とて、御草紙に夾算して、おほとのごもりぬるもいとめでたしかし。いと久しうありて起きさせ給へるに、『なほ此事左右なくて止まん、いと惡かるべし』とて、『下の十卷を、明日にもならば、異をもぞ見給ひ合はする』とて、今宵定めんと、おほとなぶら近くまゐりて、夜更くるまでなん讀ませ給ひける。されど遂に負け聞えさせ給はずなりにけり。

大意　天皇は强ひて女御にお尋ねになつたが、少しも間違はない。やがて十卷にも成り、二十卷にも成つたが、到頭女御は負けなかつた。

語釋　○さかしう、やがて末までなどは、あらねど。天皇の問はれるまゝに、女御は、賢ぶつて歌の終までなどは答へねど。○僻事見附けてを止まん。間違つた事を見附けてまあ止めよう。○ねたきまでは感動詞。○更に不用なりけり。更に尋ねる甲斐がなかつた。○夾算。檜のよい部分をとりて作つたもので、幅は四五分、長さは四五寸、至極薄手にし、上方一寸ばかりを殘し折かへして、下方を結ぶ。その用は今日の栞とおなじく、經卷書物などの讀んだ所までの目印に挾みおくのである。○おほとのごもりぬるもいとめでたし。天皇の御寢に成つたのもめでたい。○この事左右なくて止まん、いとわろし。この事即ち歌の暗誦の試驗を勝負をつけなくてはわろい。○異をもぞ見給ひ合はする。他の本を見合せなさるかも知れぬ。すべてもぞとかもこそとある時は、何々するかも知れぬといふ意と成る。○おほとなぶら近くまゐりて。御燈火を近く召寄せられて。おほとなぶらは大殿油の義で、殿中に用ゐる燈臺のこと。

通釋　「强ひて御尋ねなされたれば、女御は賢しらげに直に歌の下の句を皆までは答へなさらぬけれど、聊も間違ふことが無かつた。天皇はどうぞして今すこし不確な覺えちがひ又は忘れたところなどを見附けて止めようと、妬ましきまでに思召した。さうかうする中に、はや十卷にも成つた。天皇は『更に尋ね甲斐がなかつた』と仰せられて、古今の草紙に目印の夾算を挾んで、御寢になつ

たのもいとめでたいことよ。暫く過ぎて、天皇は起きさせられたが、『なほ此の事を勝負を附けずして止めよう事は甚だよろしくない』と仰せられて、『下の十卷を、明日にも成るならば、女御が他の本を見合せなされるかも知れぬ』と仰せられて、『今夜決定しよう』と、御燈火を近く取寄せられて、夜更けるまで讀ませられた。されど遂に女御はお負けなさらなかつた。

「うへ渡らせ給ひて後、かゝる事なんと人々殿に申し奉りければ、いみじくおぼしさわぎて、御誦經など數多せさせ給ひて、其方に向ひてなん念じ暮らせ給ひけるも、すき〳〵しく哀なる事なり。」など語り出でさせ給ふ。うへも聞召して、めでさせ給ひ、「いかでさ多く讀ませ給ひけん。われは三卷四卷だにもえ讀みはてじ」と仰せらる。「昔は似而非者も皆數寄をかしうこそありけれ。此頃かやうなる事やは聞ゆる」など、御前に侍ふ人々、うへの女房の此方許されたるなどまゐりて、口々にいひ出でなどしたるほど、まことに思ふ事なく覺ゆれ。

大意 女御の父おとゞが、女御の過失なきやうにと、諸佛に祈つた事を話されると、主上も村上天皇の根氣を感心せられ、女房も昔の人の風流を賞するなど、何の物思もないめでたい樣である。

語釋 ○うへ渡らせ給ひて後。村上天皇が御入御に成つて後、即ち翌朝。○かゝる事なん。かく〳〵の事、古今の暗誦の試問をいふ。○殿。女御の父おとゞ師尹公。○御誦經など數多せさせ給ひて。停りなく御答へ申す事を待たのは全く諸佛の御加護による事と思つて、諸寺に使などを遣つて、御經を讀ませて御報賽をせられて。○其方に向ひてなん念じ暮らさせ給ひける。宣耀殿の方に向つて終日拜み暮しなされた。○すき〳〵しく哀なる事なり。風流に天晴なる事である。あはれは喜怒哀樂何れでも深く心の底に感ずる事をいふ。○うへも聞召して。一條帝もお聞きなされて。○めでさせ給ひ。宣耀殿の女御の記憶のよい事を譽められ。○いかでさ多く讀ませ給ひけん。女御の記憶のよいのも感心だが、村上帝もどうして左樣に多く讀ませられた事であらうか、御根氣の程が感心である。○昔は似而非者も……ありけれ。

昔はつまらぬものどもゝ皆風流であつて面白うあつた。これは女房達の語。○御前に候ふ人々。中宮の御前に伺候する女房。○うへの女房の此方許されたるなど。主上に仕へる女房の中宮の御前に出でる事を許されたるものどもなど。○まことに思ふ事なくこそ覺ゆれ。誠に面白くて、世の中の心配なる事などは更に忘れ果てゝ、何の氣にかゝる事もなく思はれる。

通釋 「村上天皇が御入御なされて後、かく〳〵の事があつたと、人々が父の殿に申上げたれば、父の殿は大層驚き騷いで、女御のそのやうに滯りなく御答の出來たのも全く佛の御陰ぞと思つて、御禮の爲の御誦經などを數多の寺々にさせられて、宣耀殿の方に向つて一日拜み暮されなさつたのも、風流に天晴なる事である」などゝ物語なされる。一條帝も此物語をきかれて、女御の物覺のよい事をおほめになり、さて又村上天皇の御根氣の程をも感心なさつて、「どうして左樣に多く讀まれたらう。われは三四卷すらも讀み得られまい」と仰せられる。「昔は女御のやうな御方ばかりではない、下々のつまらぬものどもでも皆風流で面白くあつたわい。今日此頃はかやうに風流なる事が聞えるか、そのやうな事は更にない」と、中宮の御前に伺候する女房、さては主上に仕へる女房達の此方へ伺候する事を許されてゐるものどもの參りて、各口々にいひ出した時の有樣は、誠に面白くて、世の中の心配事なども皆忘れ果てゝ、何の氣にかゝる事もない心持がする。

二 すさまじきもの

晝吠ゆる犬。春の網代。三四月の紅梅の衣。兒のなくなりたる產屋。火おこさぬ炭櫃。牛惡みたる牛飼。博士の打續き女子生ませたる。方違に行きたるに饗應せぬ所。まして節分はすさまじ。人の國よりおこせたる文の物なき。京のをもさこそは思ふらめども、されどそれはゆかしき事をも書き集め、世にある事をきけばよし。人の許に態と淸げに書きたてゝ遣りつる文の返事見ん、今は來ぬらんかしと、怪しく遲きと待つ程に、ありつる文の結びたるも、立文も、いときたなげに持ちなしふくだめて、うへに引きたりつる墨さへ消えたるをおこせたり。「お

はしまさゞりけり」とも、もしは「物忌とて取入れず」など、もて歸り

たる、いとわびしくすさまじ。

大意　すさまじき物の數々を叙ぶ。名詞止連體段止の文章には、すべて此すさまじといふ語を補うて解すべきである。例の簡潔なる筆遣を翫味すると趣の多きが認められるであらう。

語釋　○晝吠ゆる犬。犬は夜を守るもの故、夜吠えるのは何ともないが、晝吠えるのは何となく異樣に思はれて面白くない。○春の網代。網代は冬の頃氷魚を捕る爲のものであるのに、それが季節ちがひの春に成つてあるのは面白くないといふ意。網代は網の代りに布の袋にて製り魚を捕るに用ゐるもの。○三四月の紅梅の衣。紅梅の衣は一二月頃に著るもの。これまた季節おくれの面白からぬをいふのである。紅梅の衣といふに染色と織色との二種がある。染色は紅梅染といひ、織色は經紅に緯紫なるをいふ。○方違に……響應せぬ所。方違とは陰陽家にて天一神といふ神の居る方角を避けて他出すること、即ち吾家から他へ行かうとするに、生憎先方の家が天一神の居る方角に當れる時は、一旦他の家に行きて、それから更に志す方へ行くをいふ。方違に行きて宿泊を依頼したのに、その家に響應して呉れぬのは面白くない。蓋し當時は方違に行きて宿泊を依頼すると、響應するのが普通の作法であつたのである。○まして節分はすさまじ。節分とは冬の季節の既に盡きて明日から春になる時をいふ。かゝる日に方違に行つたのに響應せぬは一層面白くない。○人の國よりおこせたる文の物なき。地方から送り來りたる手紙の、何か珍らしい品物でも添へてあらうかと思つて、披き見たるに何物もないのは面白くない。○それはゆかしき事をも……聞けばよし。京の文は面白く奥ゆかしき事をも書き集め、又は差當り世にある事共を書きつけてあるから格別品物を副へぬとて、地方から來た文ほどに無興には思はずといふ意。○今は來ぬらんかし……待つ程に。文の返事も今は來るであらう、不思議に遲いと思つて待つ時に。○ありつる文の結びたるも、立文も。こちらから遣つた文の結び文も、立文も。結び文とは、手紙を細長く折りたゝみて、上の方を結びたるもの。立文とは、おなじく手紙を細長く折りたゝみて、上下の兩端をひねりたるもの。○いときたなげに持ちなし。甚だ粗末に取扱ひ。○ふくだめて。皺などをつけてブク〳〵にして。○うへに引きたりつる墨さへ消え

たるをおこせたり。封の上に引いた墨まで消え失せたるのを返した。爾に返事の無いのみならず、態と清げに書いて遣つた文を穢くして持ちかへつたのを見た時の不愉快さが思ひやられる。○おはしまさゞりけり。先方の人が御不在であつた。○物忌とて取入れずなど。先方では今日は物忌で文を受取られませぬから其儘に持ちかへりましたなどと使者のいひて。○いとわびしうすさまじ。甚だ氣に喰はなくて面白くない。

また必ず來べき人の許に車を遣りて待つに、入りたる音すれば、さなりと人々出て見るに、車宿に入りて、轅ほうと打ちおろすを、如何なるぞと問へば「今日はおはしまさず、渡り給はず」とて、牛の限ひき出でぬる。また家ゆすりて取りたる婿の來ずなりぬる、いとすさまじ。さるべき人の宮仕するがり遣りて、いつしかと思ふもいとあいなし。乳兒の乳母の唯白地とて往ぬるを、求むれば、とかく遊ばし慰めて「とく來」といひ遣りたるに、「今宵はえまゐるまじ」とて、かへしおこせたる、すさまじきのみにもあらずにくさわりなし。女など迎ふる男、ましていかならん。待つ人ある所に、夜少し更けて忍びやかに門を叩けば、胸すこしつぶれて人出して問はするに、あらぬよしなき者の名乘して來たるこそ、すさまじといふ中にも、かへす〳〵すさまじけれ。驗者の物怪調ずとて、いみじうしたり顔に獨鈷や珠數など持たせて、せみ聲に絞りいだし誦み居たれど、いさゝか去りげもなく、護法もつかねば、聚めて念じ居たるに、男も女も怪しと思ふに、時の替るまで誦み困じて、「更につかず、立ちね」とて數珠とり返して、あれと「驗なしや」とうち言ひて、額より上方に頭さぐり上げて、欠伸をおのれうちして倚り臥しぬる。

語釋　○車を遣りて待つに。車を迎に遣つて其の人の來るを待つに。○入りたる音すれば。車の入り來る音がするから。○さなりと。それである、その待つ人であるというて。○車宿に入りて、轅ほうと打ちおろす。その車は、車を

納め置く處に入りて、轅をほうと打下す音がする。○如何なるぞ。客人は如何したぞ。○渡り給はずとて、牛の限ひき出でぬる。その人は今日は此方へ渡らせ給はぬといふて、車宿から牛ばかりを引出でゝ來るのを見ると、誠に拍子ぬけがして面白くない。○家ゆすりて取りたる婿の來ず成りぬる。家中大騒をして迎へた婿の、その後通つて來なくなつたのはすさまじい。當時婿たるものは毎夜女の許に通ひ來るのが習慣であつた。○さるべき人の宮仕する……いとあいなし。女をば然るべき人の宮仕するものゝ許に預けて、婿のその中には心直りて通ひ來る時があらうと待ち居るのも、甚だ心元なくて面白くない。○乳兒の乳母の……往ぬるを。乳兒の乳母が唯かりそめに一寸というて他出したのを。○求むれば。乳兒が乳母を尋ねるから。○とかく遊ばし慰めて。あれやこれやといろ〳〵慰め遊ばして。○今宵はえまゐるまじとてかへしおこせたる。今晩は參ることは出來ますまいというて返事をよこしたるのはの意。○わりなし。事をわけて言ふぐらゐでない。○あらぬよしなき者の……來たる。吾が待つ人ならぬとんでもない者が、その名を名乘つて訪ね來たのは。○驗者の物怪調ずとて。修驗者の物怪を調伏

するというて。物怪とは死靈生靈などの祟るゝ事。○いみじうしたり顔に。甚だ得意さうに。○獨鈷や數珠など持たせて。獨鈷や數珠などを、憑子として物怪のうつる樣になしたるものに持たせて。獨鈷は眞言宗の僧侶の持つ行道具で、銅又は鐵にて造り兩端の尖りたるもの。○せみ聲に絞りいだして。聲を絞り出して責めかけ〳〵經を誦むに。○いさゝか去りげもなく、護法もつかねば。物怪は少しも去る樣子なく、調伏の法も効驗を顯はさぬから。○聚めて念じ居たるに。家族のものを殘らず聚めて早く物怪の憑子につくやうに佛神を祈念し居たるに。○時の替るまで誦み困じて。時のうつるまで盛に經を誦みても、少しも効驗の見えざるより、今は早よみ疲れて。○更につかず、立ちぬ。更に護法もつかぬ、最早無益である、汝は立ち去れ。修驗者が憑子に向つていふ語。○あれと驗なしや。自分自身効驗がないよというて。○額より上方に……倚り臥しぬる。額から上の方へかけて頭を搔き上げて面目ないといふ樣で、自分から欠伸をして物に倚りかゝつて寢てしまつたのはすさまじい。

除目に官得ぬ人の家、今年は必ずと聞きて、早うありし者ども

の外々なりつる、片田舎に住む者どもなど、皆集り來て、出入る車の轅も隙なく見え、物詣する供にも、われも〳〵と參り仕う奉り物食ひ酒飲みの〻しりあへるに、果つる曉まで、門叩く音もせず、「怪し」など耳たて〻聞けば、先追ふ聲々して上達部など皆出で給ふ。ものき〻に宵より寒がりわな〻き居りつる下衆男など、いと物憂げに歩み來るを、居るものどもは問ひだにもえ問はず、外より來たる者どもなどぞ、「殿は何にかならせ給へる」など問ふ。いらへには「何の前司にこそは」と必ずいらふる。誠に賴みけるものはいみじう歎かしと思ひたり。つとめてになりて、隙なく居りつる者も漸う一人二人づゝすべり出でぬ。ふるき者のさもえ行き離るまじきは、來年の國々を手を折りて數へなどして、ゆるぎありきたるも、いみじういとほしう、すさまじげなり。

語釋 ○除目に官得ぬ人の家。叙任の際に官職を得ざる人の家。これは縣召の除目とて、國守を任命する儀式に際して國守に任せられなかつたものゝことをいふ。縣召の除目は毎年正月十一日から十三日までに行はれる儀式である。○早うありし者どもの……みな集り來て。以前その家に使はれて居たものどもの他處〳〵しくなつて平生親しくも寄近づかなつたものや、又は片田舎に引込んで都を去つて居た家人ともが皆集り來つて。○物詣する供にも……仕う奉り。主人が何處かへ參詣するにも、その供にとて我も〳〵と爭ひ仕へ奉り。○物食ひ酒飲みの〻しりあへるに。物を食ひ酒を飲みなどして大聲に話などしてゐるに。このあたり、人々の追從する樣や、前祝をして騷ぎ居る樣など見るごとく、昔も今に變らず人情の輕薄なるを思はしむ。○果つる曉まで。除目の儀式の果てる曉まで。除目は大抵夜中に行はれたのである。○門叩く音もせず。任命あれば、喜び勇みて、早速馳せ歸つて家人にも知らするのに、更に誰れ告げ知らするものなく、門叩く音もせぬ。○怪しなど耳立て〻聞けば。必ず任命あるべしと思ふに、何の音沙汰もないのは不思議な事であると思つて、ふと耳を立て〻聞くと。○先追ふ聲々。前驅の聲々。○上達部など皆出で給ふ。除目の式も終つたと見えて、公卿達も皆退廷なさ

れる。○物きゝに宵より……下衆男。様子を聞くために太政官の近邊に宵の内から寒がつて顫へて居つた下衆男。○居るものどもは問ひだにもえせず。消息を待つて居たものどもは下男のもの憂げに歩み來る様子に失望して問ふ事をすら爲し得ぬ。○外より來る者ども。今朝になつて外から來た者ども。○何の前司にこそは必ずいらふる。下男も體裁惡さに、何々の前司と前官をこそは必ず言うて答へる。○つとめてになりて。翌朝になつて。○すべり出でぬ。そつと拔けて出てしまう。○ふるき者の……數へなどして。老人などの最早他に賴るところ無きものどもは、來年の除目の國々を指折り數へて。○ゆるぎありきたるも。のつそり〳〵と歩みたるのも。ゆるぐは老人の事とて急いで歩む事の出來ず、覺束なげに歩むさまをいふ。○いみじういとほしう。甚だ氣の毒に。

よろしう讀みたりと思ふ歌を人の許に遣りたるにかへしせぬ。懸想文はいかゞせん。それだに折をかしうなどある、かへり事せぬは心おとりす。またさわがしう時めかしき處に、うちふるめきたる人のおのが徒然と暇あるまゝに、昔覺えて異なる事なき歌よみておこせたる。物のおりの扇いみじと思ひて、心ありと知りたる人にいひつけたるに、その日になりて思はずなる畫など書きて得たる。産養餞別などの使に祿など取らせぬ。はかなき藥玉卯槌などもてありく者などにも猶必ず取らすべし。思ひがけぬ事に得たるをばいと興ありと思ふべし。これはさるべき使ぞと、心ときめきして來たるに、たゞなるは誠にすさまじきぞかし。

語釋 ○懸想文はいかゞせん。艶書などは返事なくともいかゞしよう、據ない。○それだに折をかしうなどある。懸想文ですら折につけて面白くなどある歌の返事をせぬのは、先方の人の何となく無情に見えて、見下げられる。○さわがしう時めかしき處に。人の出入も繁く今を盛りと榮えてゐるあたりに。○うちふるめきたる人の。世と合はず古めかしい人の。○おのが徒然と暇

あるまいに。自分の物さびしく暇であるに任せて。○昔覺えて異なる事なき歌。古風で何等とりどころのない歌。○物の折の扇いみじと思ひて。何とか儀式とかの晴の場合の扇を大事と思つて。○心ありと知りたる人にひつけたるに。この人ならば必ずそれ相應のものを書いて呉れるほどの人に得があると思つた人に誂へたのに。○その日に成りて思はずなる書など書きて得たる　當日に成つて思ひも寄らぬ變な書を書いて呉れたのは。○產養。子を產んでから三日目五日目七日目の晩などに祝をすることをいふ。昔はその晩には必ず親族のものから、祝うて、食物を贈る例であつた。○祿。引出物。○はかなき藥玉・卯槌。一寸した藥玉・卯槌。藥玉は五月五日の節供に邪氣を拂ふものだというて互に贈答したもので、古くは五色の糸で菖蒲艾などを貫きつらねて造つたが、後は撫子・紫陽花・その外色々の花などにて飾るやうになつた。卯槌は正月卯の日の祝に用ひる小き槌で、桃の木にて造る。○思ひがけぬ事に得たるをば。こんな一寸した使では引出物などは呉れまいと、思ひかけないのに、貰つたのは。○これはさるべき使ぞと、心ときめきして來たるに。これは必ず引出物などを貰へる使ぞ思ひ設けて、さて心の中にどんなものを呉れるだらうかと、胸をどきつかせて來たのに。

婿とりて四五年まで產屋のさわきせぬ所。おとななる子供あまた、ようせずば孫なども這ひありきぬべき人の親どもの晝寢したる。傍なる子どもの心地にも、親の晝寢したるは、より所なくすさまじくぞありし。寢起きてあふる湯は腹だゝしくさへこそ覺ゆれ。師走のつごもりの長雨。「一日ばかりの精進の懈怠とやいふべからん。」八月の白がさね。乳あへず成りぬる乳母。

語釋　○おとなる子供……晝寢したる。大人になる子供を大勢持つて、わるくすると孫でも這ひ出すほどの親夫婦が晝寢したのは、年にも耻ぢず不都合に見苦しいから、すさまじい。○傍なる子ども……すさまじくぞありし。傍にゐる子供の心の中でも、我親達の晝寢したのは、わけもなくすさまじくあつた。こゝに「すさまじくぞある」といはずして「ありし」と過去の時を以てしたのは、事實此の事のあつたを思ひ出て書いたものと見える。或は清少納言の親などが晝寢をした事のあつたのを、はや大人になつた清少納言が見て、心に面

白くもないと感じた事のあつたを、今思ひでゝ書いたものでもあらうか。とにかくをかしな事を書いたものだ。普通の女が心に思つても一寸言へさうもない事を臆面もなく平氣にする所に、清少納言の磊落な性質が見えるやうな心持がする。○一日ばかりの……いふべからん。この一句は次の段に「たゆまるゝもの」とある中の一節「さうじの日の行」とある下にあるべきが、まぎれ込みたるものと思はる。○乳あへず成りぬる乳母。乳をあはせられず成りぬる乳母にて、乳の止つて間に合はざる乳母の意。

三　心ときめきするもの

雀の子飼。乳兒遊ばする所の前渡りたる。よきたきものを焚きて獨り臥したる。唐の鏡の少しくらき見出でたる。よき男の車とゞめて物いひ案内せさせたる。頭洗ひ化粧じて香にしみたる衣着たる。ことに見る人なき所にても心の中はなほをかし。待つ人ある夜、雨の脚、風の吹き搖すも、ふとぞ驚かるゝ。

大意　心ときめきするものゝ數々をのぶ。各章句の次には心ときめきするといふ意を添へて解くべく、何れも省略の法を用ひてあること例の如し。

語釋　○心ときめきする。物に感じて胸のどき〳〵すること。○よきたきものを焚きて獨り臥したる。品の良い香の焚きものを著物に焚きしめて、その著物を着て人を待つほど、獨り臥してゐるのは心のどき〳〵するものである。○唐の鏡の少しくらき見出でたる。唐の鏡は舶來の鏡にて貴重なる品であるのに、それに少し曇が出て來たのを見出した時は心ときするものである。○車とゞめて……案内せさせたる。吾家の前に車を留めて、その下部をして案内をさせたのは、何用あつて來たのかと心ときする。○香にしみたる衣。たき物の香にしみたる著物。○ことに見る人なき所にても……をかし。格別見る人もなく獨り居る所でも、自分の心の中ではなほをかしい。○待つ人ある夜、……ふとぞ驚かるゝ。人を待つてゐる夜に、雨の脚の音、風の物を吹きう

ごかす音を聞いても、これが爲に待つ人の來られぬ樣になりはせぬかと、計らずもハット思ひて驚かれる。

四　かたはらいたきもの

客人などに逢ひて物いふに、奥の方にうちとけて人のいふを、制せで聞く心地。思ふ人のいたく醉ひておなじ事したる。聞き居たるをも知らで人のうへ言ひたる。それは何ばかりならぬつかひ人なれど、かたはらいたし。旅だちたる所、ちかき所などにて、下衆どものざれかはしたる。にくげなる乳兒を、おのが心地にかなしと思ふまゝに、うつくしみあそばし、これが聲の眞似にて言ひける事など語りたる。ざえある人の前にて、ざえなき人の物おぼえ顔に人の名などいひたる。ことによしともおぼえぬ我歌を人に語りきかせて、人の譽めし事などいふもかたはらいたし。人の起きて物語などする傍に、あさましう打とけて寢たる人。また音も彈き調へぬ琴を、心一つやりて、さやうの方知りたる人の前にて彈く。いと疾う住まぬ婿の、さるべき所にて舅に逢ひたる。

語釋　うち解けて人のいふを……心地。うち解けて心おきなく話をするのを制する事も出來ないで聞きゐる心もちは、誠にかたはらいたい事である。かたはらいたきは傍に居るも心痛きことにて、所謂そば耻かしいこと。この段の各章句も、かたはらいたしといふ語を添へて解すべきこと、例の如し。○それは……かたはらいたし。人の身の上を噂する事は齒牙にかけるにも足らぬ召使の事をいうたのでも、そば耻かしい心地がする。○にくげなる乳兒を……いひける事など語りたる。にくらしい顔つきしてゐる乳兒を、我心地に可愛いと思ふまゝに、いつくしみ遊ばし、またこの乳兒の聲の眞似で、そのいうた事などを人に語つたのは。○ざえある人の前にて。才學ある人の面

前で。○あさましう打とけて寢たる人。案外にも打解けて寢そべつてゐる人。○音も彈き調へぬ琴を……人の前にて彈く。調子も合はぬ琴をば、自分の心一つは滿足して、未熟の手で、その道に堪能なるものゝ前にて彈いたのは。○いと疾う……鼻に逢びたる。ずつと早くから通はなくなつた婿がさるべき晴の場處で、去りたる家の鼻に出逢うたのは、かたはらいたい心地がする。

五　くちをしきもの

節會佛名に雪降らで、雨のかきくらし降りたる。節會さるべき折の御物忌に當りたる。いとなみいつしかと思ひたる事の、さはる事出で來て、俄に止りたる。いみじうする人の、子生まで年比具したる。遊をもし、見すべき事もあるに、必ず來なんと思ひて呼びに遣りつる人の、さはる事ありてなどいひて來ぬ、くちをし。男も女も、宮仕所などに、おなじやうなる人もろともに、寺へ詣うで、物へ行くに、好ましう溢れ出て、よういい烈しからず、あまり見苦しとも見つべくあらぬに、さるべき人の、馬にても車にても行きあひ、見ずなりぬる、いと口をし。わびては、すきぐしからん下衆などにても、人に語りつべからんにてもがなと思ふも、けしからぬなめりかし。

語釋　○くちをしきもの。言ふかひなく殘念なもの。○節會。節日の集會といふことで、朝廷に行はれる節日の儀式をいふ。こゝは元日の節會、白馬の節會、踏歌の節會など、雪の降るべき頃のをいふのであらう。○佛名。十二月十九日二十二十一日の三日間、宮中に於いて、佛名經を讀んで懺悔する儀式をいふ。○節會さるべき折の御物忌に當りたる。節會又は其外然るべき儀式の折の、宮中の御物忌に當つたのは口をしい。○いとなみ……止りたる。兼てより支度して、いつ其日になるであらうと思ひ設けた事の、俄に差支が出來て、中止になつたのは口をしい。○いみじうする人……具したる。ひどく寵愛する女が、子を生まないで、幾年も連れ添うて居るのは口をしい。○遊をもし。

音樂の遊をも爲し。○男も女も……見ずなりぬるいと口をし。男でも女でも、宮中などに奉公してゐる程に、自分等と同等位の人と共に、寺參をしたり又は物見遊山などに行くに、衣裳の好もしく車の外に溢れ出でゝ、ひどく用意した樣でもなく、さればとて見苦しい程でもなく、所謂意氣で高等なともいふべき風體をして行くに、然るべき身分の人の馬にても又は車にても來たのに行逢うたに、此方の樣子をば見もせないで過ぎたのは口をしい。○わびては……

……けしからぬなめりかし。折角見せようと思ふのに、見もせで過ぎたのが不滿足に思つて、せめては物好らしい下衆男でもよい、此方の風體を人に語るべきやうなものでもあれかし、逢ひたいと思ふのも、格別不思議な事でもあるまいよ。

五月の御精進の程、職におはしますに、塗籠の前二間なる所を殊にしつらひたれば、例ざまならぬもをかし。朔日より雨がちにて曇りくらす、徒然なるを「郭公の聲尋ねありかばや」といふを聞きて、我も〳〵と出立つ。賀茂の奥に、某とかや、七夕の渡る橋

にはあらで、にくき名ぞ聞えし。そのわたりになん日毎に啼くと人のいへば、それは茅蜩なりといらふる人もあり。そこへとて、五日の朝、宮司車の事いひて、此の陣より「五月雨は咎なきものぞ」とて、差寄せて、四人ばかりぞ乘りて行く。羨ましがりて「いま一つして、おなじくは」などいへば「否」と仰せらるれば、聞きも入れず情なき樣にて行くに、馬場といふ處にて、人多く騷ぐ。「何事するぞ」と問へば「てつがひにて、眞弓射るなり。しばし御覽じておはしませ」とて、車とどめたり。右近の中將みなつき給へるといへど、さる人も見えず、六位などの立ちさまよへば「ゆかしからぬ事ぞ。早く過ぎよ」とて行きもて行けば、道も祭の頃思ひ出でられてをかし。

大意　物見の裝束を人に見せたいといふにつきて、五月雨の頃、賀茂の社の奥に、郭公を聞きに行きたる事を記す。

語釋　○五月の御精進の程。中宮が五月の御精進をなされる時分。年三の齋戒として、正五九月に精進をなす。○職におはしますに。職の御曹司に御座遊ばされるに。職の御曹司は外記廳の北、左近衛府の西、梨本の南に在り、中宮定子は、母屋に鬼があるとて、南の廂に住はれた。○塗籠の前二間なる所。塗籠は大切の物を置く爲に家の内に造りてある今の土藏の如きもの。こゝは塗籠を置いてある前の二間なる部屋をいふ、常には佛などを安置せる所なるを、假に繕うて中宮の御座所とし、こゝにて御精進をなされたものと見える。○例ざまならぬもをかし。常の御座所と事かはつてゐるのも面白い。○賀茂の奥に……にくき名ぞ聞えし。賀茂の社の奥に何とかいへる橋がある、その橋の名は七夕の渡るといふ鵲の橋などいふ優美な名ではなくて、いと聞きにくい名の橋がある。○それは日ぐらしなり。それは郭公ではない、茅蜩といふ蟬の啼くのである。○宮司車の事いひて。宮司は中宮職大夫をいふ。中宮大夫が、今日乘るべき車の事を仰附けて。○北の陣。朔平門なる縫殿陣のこと。○五月雨は咎なきものぞ。通常ならば縫殿陣から乘車することを得ないのであるが、女官は裝束の濡れる恐ある故に、五月雨の降るには、こゝから乘車しても差支がないというて乘つたのである。○さし寄せて。車を差寄せて。○羨ましがりて……などいへば。他の女官達が羨ましがつて、「今一臺車を仕立てゝ、同じ事には共に行かう」といふと。○否と仰せらるれば……行くに。否、他の女官達は行つてはならぬと中宮が仰せられるから、清少納言達も聞き入れず情をも知らぬ氣强い樣子で行くと。○てつがひにて眞弓射るなり。てつがひとは、五月五日馬場に於いて、二人づゝ結ひて弓を射ること。これは車副の男のいふ語。○道も祭の頃思出でられてをかし。行く道すがらも賀茂の祭の頃の事が思出されて面白い。

通釋　五月の御精進の間、中宮が職の御曹司に御座あるに、塗籠の前に二間なる部屋をば特に中宮の御座所に仕立てゝあるから、常の御居間とは事かはつてゐるのも面白い。一日から雨降りがちで、日毎に曇り暮らすのが退屈なるによつて、「郭公の聲を聞きに行かう」といふと、それを聞いて他の女官達が我も我もというて共に出發する。賀茂の社の奥の方に何とかいふ橋がある、七夕の渡るといふ鵲の橋の如き優美な名ではなくて、いやな聞きにくい名であつた。その橋の近傍に日毎に郭公が啼くと、或人がいふと、それは郭公ではない、茅蜩

であると答へる人もある。その橋の邊へというて、五日の朝、中宮司から乘るべき車の事を仰附けて、北の陣から「五月雨の降る時には差支ない」というて、車を差寄せて、四人ばかりが乘つて出て行く。他の女官達が羨ましがつて「いま一臺車を仕立てゝ、同じくは共に行かう」などいふと、「否、他の女官達は行つてはならぬ」と中宮が仰せられるから、耳にも留めず、情なく氣強い樣で出て行くと、馬場といふ處で人々が大勢立騷ぐ。「何事をするか」と尋ねると、車副の男が、今日は眞手結の日で、眞弓を射るのでございます。暫く御覽なさいませ」というて車を止めた。右近の中將達も皆御著座であるといふけれど、そのやうな人も見えず、六位などの賤しい官人どもが徘徊するから、「面白くもない事ぞ。早く通り過ぎよ」というて急ぎ行くと、道すがら賀茂の祭の頃の事が思出されて面白い。

かういふ所には明順の朝臣の家あり。そこもやがて見んといひて、車寄せて下りぬ。田舍だち、事そぎて、馬の繪書きたる障子・網代屏風・みくりのすだれなど、殊更に昔の事をうつし出でたり。屋のさまもはかなだちて、端近くあさはかなれど、をかしきに、げにぞかしがましと思ふばかりに、啼きあひたる郭公の聲を、口をしう御前に聞召さず、さばかり慕ひつる人々にもなど思ふ。所につけてはかゝる事をなん見るべきとて、稻といふもの多く取出でゝ、若き女どものきたなげならぬ、そのわたりの家のむすめ女など率ゐ來て、五六人してこかせ、見もしらぬくるべきもの二人してひかせて、歌うたはせなどするを、珍らしくて笑ふに、郭公の歌よまんなどしつる、忘れぬべし。唐繪にある懸盤などして物くはせたるを、見入るゝ人なければ、家あるじ「いとわろく鄙びたり。かゝる所に來ぬる人は、ようせずば、なほもなど責め出してこそまゐるべけれ。むげにかくてはその人ならず」などいひてとりはやし、「この下蕨は手づから摘みつる」などいへば、「いかで女官などのやうにつき並みてはあらん」などいへば、とり下し

て「例のはひぶしに習はせ給へる御前達なれば」とて、とり下して響ひ騒ぐ程に、「雨降りぬべし」といへば、急ぎて車に乗るに、「さてこの歌は此處にてこそ讀まめ」といへば「さばれ道にても」などいひて、卯の花いみじく咲きたるを折りつゝ、車のすだれ・そば・などに長き枝を葺き差したれば、唯卯の花がさねを、こゝに懸けたるやうにぞ見えける。供なる男どもゝいみじう笑ひつゝ、網代をさへつき穿ちつゝ、「こゝにまだし〳〵」と差しあつむなり。人も逢はなんと思ふに、更に怪しき法師怪しの言甲斐なき者のみ、たまさかに見ゆる、いと口をし。

大意　明順といふ者の家を訪ねて、田舎びた昔風の飾附や農夫の營や手輕の馳走などをうけて、郭公を聞きに行つても郭公の歌をも讀まず卯の花を車の周圍などにとり附けて家路についた事を記す。

語釋　○かういふ所には。かゝる所には。○田舎だち事そぎて。田舎らしく質素で。○網代屏風。竹を網代に編んで造つた屏風。○みくりのすだれ。菱といふ水草の蔓を編んで造つた簾。○屋のさまもはかなだちて。家の作り方も果敢なく粗造で。○口をしう御前にも聞召さず……など思ふ。この郭公の聲を中宮の御前にもお聞きなさらず、あれ程に跡を慕うた人々にも聞かせぬのが殘念に思ふ。○所につけては。かやうな田舎らしい處では。○くるべきもの二人して引かせて。くるべきといふ器物で、二人して絲を繰らせて。くるべきは絲を絡り經る料の器物で、漢字には鏄を充てる。○唐繪にある懸盤などして。唐土の繪で見るやうな異樣な懸盤などで。懸盤の懸は實は兼の意にて、盤と臺とを兼ね用ひる樣に製したるもの。○見入る人なければ。食はうとするものは勿論、見向く人もないから。○いとわろく鄙びたり。かゝる食物は田舎びてわろく鄙しげなものである。○かゝる所に來ぬる人は……まゐるべけれ。かゝる片田舎に來た人は、わろくすると、差上げた上にも猶何かあるなら出せと、責め出しても食しあがる筈のものである。○むげにかくてはその人ならず。無下に見入れもせず食しあがらせては、いかにも都人とも見えまい。○とりはやし。催促する意。○下蕨。萌え立ての小

き蕨、草の下に生ずる意よりかくいふ。○いかで女官などのやうにつき並みてはあらん。どうして女官たちの樣に行儀よく著き並んで頂戴出來ようぞ。自分等も女官なれど、今は遊びに來たのであるから、宮中に居る時の女官等の如く、行儀ぶつては食ふ事が出來にくいと、うちとけていふのである。○とり下して。下蕨を懸盤からとり下して。○例のはびぶしに習はせ給へる御前たちなれば。いつもの如く這臥になつて食ふことに慣れて居られる御身たちであるから。○さてこの歌は。さてこの郭公の歌は。○さばれ道にても。さはあれ此の館には限らぬ、途中で詠んでもよい。○卯の花がさね。表白く裏の青い夏の衣服。○網代をさへ……さしあつむなり。網代車の事とて、網代をさへ突き被つて「こゝにまだ足らぬ〳〵」というて一面隙間もなく挿む。○人も逢はなんと思ふに。あまりに面白い車の樣であるから、途中で誰か然るべき人に行き逢ひたいものだと思ふのに。○あやしき。賤しい。

通釋 かゝる處に明順といふ朝臣の家がある。されば其處へも立寄つて、やがて見ようというて、車を引寄せて一同車を下りた。田舍らしく質素で、馬の繪を書いた障子・網代の屏風・みくりの簾など、殊に昔風をうつし出してある。家の

作り方も果敢なく粗造で、端近くて奥行なく淺はかな家ではあるが、何となく面白いのに、いかにも喧しいと思ふほどに啼き合うた郭公の聲をば、中宮もお聞きなされず、あれほど跡を慕うた女官たちにも聞かせないのが殘念の事だと思ふ。かゝる田舍らしい處では、かやうな事を見るべきであるというて、稻といふ物を取出して、年若の女どもの醜からぬ、その近邊の百姓の娘や妻などをつれて來て、五六人ばかりて、その稻をこかせ、または今まで見たこともない鑄といふ器物で二人して絲を絡らせて見せなどするを、珍らしくて笑ふので、郭公の歌を讀まうなどいふ事も忘れてしまうであらう。唐繪で見るやうな異樣な懸盤などを出して物をくはせたのを、見向く人もないから、家の主人が「こんな食物は、田舍びて甚だ粗末に鄙しげなものでございます。されどかやうな田舍へ來られた人は、わろくすると、差上げた上にも猶何か出せと責め出して食しあがるものである。身たちのやうに、一向見向きもなさらないでは都の人とも見えません」などゝいうて勸めそゝのかし、「この蕨は私自身の摘んだのでございます」などいふから、「どうして女官たちのやうに行儀正しく著坐して頂戴する事が出來ましよう」といふと、その下蕨をば懸盤からとり下し

て、「例の如く這ひぶしになつて食しあがり慣れた御身たちであるから、左様にして食しあがれ」というて、とり下して饗ひ騒ぐ程に、「雨が降つて來るでしよう」と車副の男がいふから、急いで車に乗るに、「さてその郭公の歌は此の館でこそ讀むべきである」といふから、「さはあれ此の館とも限らぬ、途中でもよい」などいうて、折から卯の花の立派に咲いてゐるのを折つて、車の簾やら側面やらに長い枝を葺きさしたれば、たゞ卯の花がさねの夏衣裝をこゝに懸けたやうに見えた。供の男共も大層笑つて、絹代を突破つて「こゝにもまだ足らない〳〵」というて一面にさす。その樣の面白さに、何人か然るべき人に行き逢つて見せたいと思ふのに、更に誰にも逢はず、賤しい法師や言甲斐のない下賤の者のみが、たまさかに見えるのが口をしい。

近う來ぬれば「さりともいとかうて止まんやは。この車のさまをだに人に語らせてこそ止まめ」とて、一條院のもとに停めて、「侍從殿やおはします。郭公の聲聞きて、今なん歸り侍る」といはせたる、使「只今參る。あが君〳〵」となんのたまへる。さぶらひに間ひろげて、奴袴奉りつ」といふに、「待つべきにもあらず」とて、走らせて土御門さまへ遣らするに、いつの間にか裝束しつらん、帶は道のまゝに結ひて、しば〳〵と追來る。供に侍雜色ものはかで、走るめる。とく遣れど、いといそがしくて、土御門に來つきぬるにぞ、喘ぎ惑ひておはして、まづこの車の樣を甚じく笑ひ給ふ。「現の人の乘りたるとなん更に見えぬ。なほ下りて見よ」など笑ひ給へば、供なりつる人どもゝ興じて笑ふ。「歌はいかにか。それ聞かん」との給へば、「今御前に御覽ぜさせてこそは」などいふ程に、雨まことに降りぬ。「などかこと御門のやうにあらで、この土御門しも上もなく作りそめけんと今日こそいとにくけれ」などいひて、「いかで歸らんずらん。此方ざまは唯おくれじと思ひつるに、人めも知らず走られつるを、あういかんこそいとすさまじけれ」との給へば、「いざ給へかし、内へ」などいふ。「それも烏帽子に

てはいかでか」「とりに遣り給へ」などいふに、まめやかに降れば、笠なき男ども、たゞ引きに引き入れつ。一條より笠もて來たるをさゝせて、うち見かへり、うち見かへり、この度は緩々と物憂げにて、卯の花ばかりを取りおはするもをかし。

大意 誰一人然るべきものも逢はないので、責めては人の話の種にでもさせようとて、侍從といふものゝ家を訪れ、案内を申入れたるまゝにて、車を馳せ歸つた事を記す。侍從が袴の紐をも結びあへず、あたふたと追ひ行くさまや、雨に降られてしよぼ〳〵と歸り行くさまなど眼に見るが如し。

語釋 ○近う來ぬれば。かくする程に、職の御曹司近く來たから。○さりともいとかうて止まんやは。誰一人然るべき人に逢はぬからというて、斯く人に見せる事なく止まうか、止められない。○一條院のもとに停めて。その車を一條院の處に停めて。これは侍從を音づれようが爲である。一條院は拾芥抄に一條南大宮東二町、爲法往寺大臣爲光家とあり、即ち恒德公の邸である。○侍從殿。恒德公の六男公信公のこと、長德元年九月十九日侍從となる。○あ

が君。清少納言をさして呼ぶ。○さぶらひに……奴袴奉りつ。侍所の間を片附けさせて、其處へ請ぜようとて、只今奴袴を着てゐられる。○しば〳〵と追來る。頻に追つかけて來る。○雜色。雜役に供する下郎。○現の人の乘りたるとなん更に見えぬ。正氣の人の乘つてゐる車とは迚も見えぬ。○などかこと御門のやうにあらで。何故に外の御門の如くでなくて。○うへもなく作りそめけん。屋根もなく作り始めたらう。○こなたざまは唯おくれじと思ひつるに。この土御門の方へ來る時は唯御身等に後れまいと思つたので。○あういかんとするこそすさまじけれ。あゝ歸つて行かうことが氣が進まない。○いざ給へかし、內へ。さあ共に來り給へ、宮中へ。○とりに遣り給へ。御裝束を取りに人を遣し給へ。○まめやかに降れば。雨が實にひどく降るから。○笠なき男でも唯引きに引き入れつ。笠を持たぬ清少納言の供の男どもは車をばずん〳〵土御門より內の方へ引き入れてしまつた。

通釋 とかくする程に職の御曹司近くに來たから、それでも斯う誰ひとり見せないで終はうか、終へない。責めては此の車の有樣なりとも人に語り傳へさせるやうにして終はう」というて、一條院の處に車を停めて、侍從殿は入らしやる

か。妾達は郭公の聲を聞いて唯今歸ります」といはせたるに、使の者が、「侍從殿の仰には、唯今そこへ參ります。吾君々々というてお呼びなされる。そして客間を片附けさせて、そこへ請待しようというて、唯今奴袴を召されてゐます」といふに、「侍從殿の出で來るのを待ち居るべきでもない」というて、車を走らせて土御門の方へ遣らせるに、侍從殿は何時の間に裝束を著けたのであらうか。帶をば道々結んで、頻に追つかけて來る。その供に、侍や雜色が履物をも穿かないで走るやうである。疾く車を走らせるけれど、侍從殿は急しく走り來て、車が土御門へ著いた時分に、喘ぎ惑ひて息をもつきあへずいらせられて、まづ車の樣子をひどくお笑ひなさる。「正氣の人の乘つてゐる車とは迚も見えない。なほ御身も下りて見なさい」などゝいうて笑ひなさると、供の人々も面白がつて笑ふ。「郭公の歌はどうござるか。それを承はらう」といはれるから、「今中宮の御前に御目にかけて、その後に」などいふうちに、雨が實際に降つた。侍從がいふには、「どうして外の御門の如くでなくて、この土御門は屋根もなく作り始めた事だらうか、平生は何とも思はなかつたが今日こそまことに憎く思ふは」などいうて、更に「どうして歸らう。此方へ來るには唯御身達に後れまいと思つたので、人目も憚らず走られたが、あゝ歸り行かうのは氣が進まぬ」といはれるから、「さあ一所にいらつしやい、宮中へ」などいふ。「それも烏帽子ではどうして參内も出來ようぞ。」「それなら御裝束をとりにおやりなさい」などいふに、雨は眞實烈しく降るから、笠を持たぬ車副の男どもはずん〳〵車をば御門内へ引き入れてしまつた。かくて侍從殿は、笠を持つて來たのをさゝせて、見かへり〳〵、今度はゆる〳〵と物憂い樣子で、かの車にさしてある卯の花だけを取りて、車の傍に立たれてゐるのも面白い。

さて參りたれば、有樣など問はせ給ふ。うらみつる人々怨じ心憂がりながら、藤侍從一條の大路走りつる程語るにぞ、皆笑ひぬる。さて「いづら歌は」と問はせ給ふ。かう〳〵啓すれば、「口をしの事や。うへ人などの聞かんに、いかでかをかしきなくてあらん。その聞きつらん處にて、ふとこそ詠まゝしか。あまり儀式に、事さめつらんぞ怪しきや。こゝにても詠め。言甲斐なし」などの給はすれば、げにと思ふにいと佗びしきを、いひ合せなど

する程に、藤侍從の、ありつる卯の花につけて、卯の花の薄樣に。

郭公、鳴く音尋ねに君行くと、

きかば心を副へもしてまし。

「返し待つらん」など局へ硯とりに遣れば、「たゞこれにして疾くいへ」とて、御硯の蓋に紙など入れて賜はせたれば、「宰相の君書き給へ」といふを、「なほ其許に」などいふ程に、かきくらし雨降りて、神もおどろ〳〵しう鳴りたれば、物も覺えず、たゞおろしにおろす。職の御曹司は、蔀をぞ御格子にまゐり渡しまどひし程に、歌のかへり事も忘れぬ。いと久しく鳴りて、少し止む程は暗くなりぬ。「只今なほその御返事奉らん」とてとりかゝる程に、人々上達部など神の事申しに參り給ひつれば、西面に出でゝ物など聞ゆる程に紛れぬ。人はた「さして得たらん人こそ知らめ」とてやみぬ。大方此の事に宿世なき日なりとうじて、「今はいかでさなん行きたりしとだに人に聞かせじ」などぞ笑ふを、「今もなどそれ行きたりし人どものいはざらん。されども、させじと思ふにこそあらめ」と、物しげに思召しためるもいとをかし。「されど今はすまじくなりにて侍るなり」と申す。「すさまじかるべき事かは」などの給はせしかばやみにき。

大意　清少等が參内すると、中宮は清少等の郭公を聞きに行つた有樣や其時の歌などを問はせられ、清少等の歌を詠まなかたことを難せられる。その中に藤侍從から歌を贈つて來る。返歌をば誰れ詠め彼れ詠めといふ程に、雷鳴の騷に紛れて返事をせずにしまつたことなどを書いてある。

語釋　○さて參りたれば。さて歸つて後に參內すると。○うらみつる人々……皆笑ひぬ。先に同行を許されなかつて殘念がつた人々は、清少等の歸つたのを見て、更に怨言をいひなどして心憂がりながらも、藤侍從が一條の大路を走つた時の有樣を語るので、皆笑つた。○いづら、歌は。郭公の歌は何處に。○かう〳〵と啓すれば。かく〳〵の次第で歌をば詠まなかつたと申上げると。

○あまり儀式に事さめつらんぞ怪しきや。あまりに儀式だつて立派に詠まうとして、却て詠まれなくなつて、その事の興味が醒めたのであらうが、怪しからぬ事である。○げにと思ふにいと佗びしきを。中宮の仰のいかにも御尤と思ふにつけて、自分等の歌を詠まなかつたことを至極面白からぬ心持のするに。○ありつる卯の花につけて。さきに取つて歸つた卯の花の枝につけて。○卯の花の薄様に。卯の花色の薄様の紙に。○返し待つらん。返歌を待つであらう。○なほそこに。矢張り其の許が書き給へ。○かきくらし雨降りて、……鳴りたれば。空も暗うなる程に雨が降つて、雷も恐ろしう鳴つたから。○物もおぼえず、たゞおろしにおろす。何事も覺えず、職の御曹司の格子を直下しに下す。○蔀をぞ御格子にまゐり渡じ。御格子を下した上に更に蔀をも下し渡す。○物など聞ゆる程に。應對などを申上げる程に。○人はた「さして得たらん人こそ知らめ」とて止みぬ。他の女房も亦「名指て歌を贈られた人こそ關り知りもしよう、自分等の知つたことでは無い」というて返歌をしようともせぬ。○大方此事に宿世なき日なりとうじて。多分今日は歌を詠むといふことに緣の無い日であると氣が屈して。○今もなど……いはざらん。今となつてもどうして賀茂へ行つた人々の歌を詠まぬといふ法があらうか。○させじと思ふにこそあらめ。歌を詠むまいと思ふのであらう。○物しげに思召しためるも。無興氣に思召してゐられるやうなのも。○今はすさまじくなりにて待るなり。唯今は時機を失つて面白くなくなつて御座います。○の給はせしかば、やみにき。しかばとあるはしかどの誤かと思はる。

通釋 そして參內すると、中宮は郭公を聞きに行つた時の樣子などをお尋ねなさる。さきに同行を許されないのを殘念がつた人々も、怨言をいうて心憂がりながらも、藤待從の一條の大路を走つた時の樣子を語るので皆笑つた。そして中宮が「何處にあるか、郭公の歌は」とお尋ねなさる。かう〳〵と有體に申上げると、「殘念の事よ、殿上人などの聞かう時に、どうして面白い歌が無くて善からう。その郭公を聞いたらう處でこそ直に詠むべきである。あまり儀式だつて、立派に詠まうとして、却て詠まれなくなつて、興味の醒めたであらうが、怪しからぬ事である。こゝでもよいから詠め。歌なしでは面白くない」などと仰せられるから、いかにも御尤の事と思ふにつけても、歌の詠まれなかつたこ

とが至極面白からぬ心持のするに、何とか詠まうものをと同行の人たちと相談などするうちに、藤侍從が以前取つて歸つた卯の花の枝につけて、卯の花色の薄様に、

郭公の聲を尋ねに君が行くと聞いたならば、たとひ此身は行かれずとも、心ばかりは君に添へても遣つたものを、左様の事を前以て知らなかつた爲に殘念な事をいたしたわい

といふ意味の歌を詠んでよこした。「返歌を待つことであらう」などいうて、部屋へ硯を取りに遣ると、中宮が「たゞこの硯で早く返歌をせよ」といはれて、御硯の蓋に紙などを入れて賜はせられたから、「宰相の君書き給へ」といふを、矢張其許書き給へ」などいふうちに、空暗うなる程雨降つて、雷も恐しう鳴つたから、何事もおぼえず唯格子などをずん〳〵としめる。職の御曹司は、蔀をも格子をしめた上に下し騒いだうちに、返歌のことをも忘れた。いと久しく鳴つて、少し鳴りやむ時分には日暮になつた。「唯今なほその返事を奉らう」というて、とりかゝるうちに、殿上人上達部など、雷の事を申しに參つたから、西面の間に出て應對などする程に、とり紛れてしまつた。外の女房も亦「名ざしで歌を貰ら

つたらう人こそ關り知らう」とて知らぬ顔で止んだ。「大方今日は歌に緣の無い日であらう」と氣が屈して「今はいかにもして左様に郭公聞きに行つたといふ事だに人に聞かせまい」などいうて笑ふに、中宮の「今でもどうして郭公聞きに行つた人々の歌を詠まぬといふ法があらうぞ。されど御身たちは歌を詠むまいと思ふのであらう」と、無興氣に思召してゐられるやうなのも面白い。「それでも今となつては時機が後れて面白くなくなつてございます」と、中上げる。「おもしろくないなどいふ事があるか」など仰せられるけれど、詠まないでしまつた。

二日ばかりありて、その日の事などいひ出づるに、宰相の君「いかにぞ手づから折りたるといひし下蕨は」との給ふを聞かせ給うて、「思ひ出づる事の様よ」と笑はせ給ひて、紙の散りたるに、

したわらびこそ戀ひしかりけれ

と書かせ給ひて「もといへ」と仰せらるゝもをかし。

郭公たづねて聞きし聲よりも

と書きて參らせたれば、「いみじううけばりたりや。かうまでだにいかで郭公の事をかけつらん」と笑はせ給ふも耻かしながら、「何か。この歌すべて詠み侍らじとなん思ひ侍るものを。物の折など人の詠み侍るにも、詠めなど仰せらるれば、えさぶらふまじき心地なんし侍る。いかでかは文字の數知らず、春は冬の歌を詠み、秋は春のを詠み、梅の折は菊などを詠むこと侍らん。されど歌よむといはれ侍りし末々は、少し人に勝りて、その折の歌はこれこそありけれ。さはいへどそれが子なればなどいはれたらんこそ、かひある心地し侍らめ。露とり分きたる方もなくて、さすがに歌がましく我はと思へるさまに、最初に詠み出で侍らんなん、なき人の爲にいとほしく侍る」などまめやかに啓すれば、笑はせ給ひて「さらばたゞ心に任す。我は詠めともいはじ」との給はすれば、いと心やすくなり侍りぬ。

大意　賀茂に行きて後二日ばかり經て、かの日の事ども語り出でたる序に、清少が先考の名を汚すまい爲に、歌をば常に詠むまいと心懸けてゐる由を叙ぶ。

語釋　○その日の事など。賀茂へ行つた日の出來事など。○聞かせ給ひて。中宮がお聞きになつて。○思ひ出づる事の樣よ。その下蕨を食つた事を戀しく思ひ出される樣子であるよ。○もといへ。本の句をいへ。○いみじううけばりたりや。ひどく憚なくあつたよ。○何か、……思ひ侍る物を。何とまあ此歌といふものをば一切詠みますまいと思ひますものを、强ひての仰事に已むを得ず詠みました。○物の折など。何かの場合など。○えさぶらふまじき心地なんし侍る。その席には伺候いたすまじ、外へでも逃げ出さうと思ふやうな心持がする。○いかでかは……詠む事侍らん。どうして歌の文字の數を心得ず又は季節を辨へで、春は冬の歌を詠み、秋は春のを詠み、梅咲く折に菊の花の折を詠むなどといふ事をば致さうぞ、そんな事は決して致さない、參少は歌の道をも心得ては居る。○さはいへどそれが子なればなど。その歌はうまいとはいへ、某の子であるから當然であるなど。○なき人の爲にいとほしく侍る。故人の爲に甚だ痛はしくございます。故人は清少の父元輔

をいふ。○まめやかに啓すれば。眞面目に申上げると。

通釋 賀茂へ行つて二日ばかり經て、賀茂へ行つた日の事などをいひ出すに、宰相の君が「どうでございました、あの自分で折つたと言ひました下蕨は」といはれるのを、中宮がお聞及びになつて「思ひ出す事のある樣子であるよ」と笑はせられて、紙の落ち散りたる切れに、

したわらびこそ戀ひしかりけれ

と書かせられて「これが上の句をいへ」と仰せられるのも面白い。

郭公尋ねて聞きし聲よりも

と書いて差上げると「大層遠慮もなく下蕨を慕うた事よ。かくまでにどうして郭公の事を淺く心にかけた事であらうか」といはれて笑はせられるのも耻かしながら「何とまあ、この歌といふものをば一切詠みますまいと思ひますものを、强ひての仰事であるから詠みました。何かの場合などに人の歌を詠みます折にも、歌などを詠めと仰せられると、私はその席にも堪へない心持が致します。さればというて、何んでまあ歌の文字の數を心得ず、季節をも辨へないで、春に冬の歌を詠み、秋に春の歌を詠み、梅の花の咲く折に菊の花などを詠

む事をば致しましようぞ。そんなぶまな事は致しませんけれど、あれは歌を詠むといはれたもの子孫では、少し人よりは勝れて、あの場合に詠んだ歌はこれであつたと人にも吹聽し、又人からもうまい歌であるとはいへ、元輔の子であるから當然の事だなどといはれてこそ詠み甲斐のある心持もしよう。少しも人と異つて勝れたる點もなく平々凡々たるもので、流石に碌でもない歌を歌がましく、我こそは歌よみと思つてゐる樣子で、最初に詠み出さう事は、故人の元輔の爲にも甚だ痛はしくございます」など眞面目になつて申上げると、中宮は笑はせられて「それならばたゞ其許の隨意にせよ。私は最早詠めともいふまい」と仰せられるから、大層安心致しました。

「今は歌の事思ひかけ侍らじ」などいひてあるころ、庚申せさせ給ひて、內大臣殿いみじう心まうけせさせ給へり。夜うち更くる程に、題出して、女房に歌詠ませ給へば、皆けしきだちゆるがし出すに、宮の御前に近く侍ひて、物啓しなど異事をのみいふを、おとゞ御覽じて「などか歌は詠まで離れ居たる。題とれ」との給ふ

を「さる事承りて、歌詠むまじくなりて侍れば、思ひかけ侍らず。」異様なる事、まことにさる事やは侍る。などかは許させ給ふ。いとあるまじき事なり。よし、こと時は知らず、今夜は詠め」など責め給へど、けぎよう聞きも入れでさぶろふに、こと人ども詠み出して、よしあしなど定めらるゝ程に、いさゝかなる御文を書きて賜はせたり。あけて見れば、

もとすけが後といはるゝ君しもや、
こよひの歌にはづれてはをる。

とあるを見るに、をかしき事ぞ類なきや。いみじく笑へば、「何事ぞ〳〵」とおとゞもの給ふ。

その人の後といはれぬ身なりせば、
こよひの歌はまづぞ詠ままし。

つゝむ事さぶらはずば、千歌なりとも是よりぞ出でまうでこまし」と啓しつ。

大意 歌を詠むまいというてゐる程に、ある夜の事つひに歌を詠まなければならぬ場合に立至つた事を記す。

語釋 ○庚申せさせ給ひて。庚申待をせられて。古昔、庚申の夜に寢る時は、三尸といふあしき蟲が人の體内に入つて癆瘵の病を爲すといふ説があつて、其夜は寢ずして明かすのである。○心まうけせさせ給へり。庚申待の用意をせられた。○皆けしきだちゆるがし出すに。皆歌を詠まうと色めき立つて動ぎ出すに。○物啓しなど異事をのみいふ。物を申上げなどして、歌の事をばいはず他事をばかりいふ。○さる事ありて……思ひかけ侍らず。さる仔細あつて御許を蒙り、歌をば詠むまいといふ事になつてをりますから、歌を詠む事は心にかけて居りません。○異様なる事。變な事である。○けぎよう聞きも入れでさぶらふに。心清うさつぱりと聞きも入れないで居るに。○いさゝかなる御文を書きて賜はせたり。中宮が一寸した御文を書いて下されたる。○もとすけの……はづれてはをる。あの歌よみなる元輔の後繼といはれる御身がまあ、どうして今夜の歌にはづれて詠まないで居るぞ、詠んだがよ

いではないか。○その人の……まづぞ詠まましし。その歌よみの後といはれぬ我身であつたならば、今夜の歌をば眞先がけて詠むであらう。○つゝむ事さぶらはずば。故人の名に對して愼み憚ることないならば。○是よりぞ出でまうでこまし。自分から進んで詠み出でまゐらせよう。

通釋　「今は歌を詠むといふ事をば心にかけまい」などいうて居るころ、ある夜庚申待をせられて、內大臣伊周公は大層庚申待の用意をせられた。夜の更ける時分に、題を出して、女房に歌を詠ませなさると、皆歌を詠まうとして色めき立つて動ぎ出すに、私は中宮の御前に近く伺候して、物を申上げなどして歌の事をばいはず他事をのみいふを、大臣が御覽なされて、「どうして淸少は歌を詠まないで離れてゐるか。題をとれ」と仰せられるを、「私は仔細あつて御許を蒙り、歌をば詠むまいといふ事になつて居りますから、歌を詠まうなどは思ひもかけませぬ」といふと、大臣が「變な事をいふ。誠にさういふ事がございますか。どうしてまあそんな事を御許なされた。いとあるまじい事である。よし、他の時は知らぬこと、今晩だけは詠みなさい」などというてお責めなさるけれど、さつぱりと耳にも入れでゐますに、他の女房たちが皆詠み出して、歌のよしあしを定められる時に、中宮が一寸とした御文を書いて私に下された。あけて見ると、

もとすけの後といはるゝ君しもや
こよひの歌にはづれてはをる

と書かれてあるに、面白い事は比類がないよ。ひどく笑ふと「何事か〳〵」と大臣も仰せられる。私は、

その人の後といはれぬ身なりせば
こよひの歌はまづぞ詠まましし

故人元輔の名譽に對して愼み憚る事がないならば、たとひ千首の歌なりとも自ら進んで詠んでまゐらせようと御返事を申上げた。

源氏物語

緒言

『源氏物語』は平安朝時代の女流文豪紫式部の作。紫式部は藤原爲時といふものの女で、閲歴は詳かでない。一旦は同族の宣孝といふものに緣付いたが、二人の娘があつて夫に死にわかれ、後に一條天皇の中宮彰子に仕へた。『源氏物語』はいつごろ書いたものか分らない、或は寡居の時かといはれてゐる。

此の物語は勿論小説で、全篇五十四帖から成つて、各帖「きり壺」「帚木」「空蟬」とかいふやうな題名をつけてゐるが、その結構からいふと、大體二段に分れる。即ち正篇とも見るべき前の四十四帖は專ら光源氏と紫の上とを男女の主人公とし、續篇とも見るべき後の十帖は源氏の子の薫の大將を主人公としてゐる。そこで、昔からこの十帖をば、かの四十四帖から引離して『宇治十帖』とも呼んでゐる。『宇治十帖』は紫式部の女の大貳三位の作だといふ説もあるが、無論採るに足らぬ。

正篇なる四十四帖に見えたる人物は、その性情おほむね中庸を得て、善惡共に極端なるものはない。稀に多少の缺點を持つてゐるものがあつても、大なる破綻を

生ぜしむるに至らない。主人公なる光源氏は才學容貌ともにすぐれた皇子で、當時からいへば、理想の男子であらう。母は天皇の殊寵を受けた更衣（かうい）であつたが、他の女御更衣に嫉まれて、遂に源氏の幼少の折に死んでしまつた。父の天皇は、その後に藤壺といふ女御を納れた。源氏は、この女御のおのれの母に酷似せると聞いて、なつかしく思つて親しむのあまりに、いつしか道ならぬ契をかさねた。その間に生れた子を、父の天皇は自分の子と思つて春宮に立たせ、源氏はその後見となり、春宮が帝位に上るに及んで源氏は更に六條院といはれて、太上天皇に准ぜられるやうになつた。源氏が藤壺の女御と道ならぬ契を結んだのは、かれの缺點であるが、その缺點はやがてその身の上に酬い來て、自分の寵愛する女三の宮が、いつしか柏木權大納言と通じて、薫の大將を生んだ。源氏には最初葵の上といふ本妻があつた。これは源氏よりは年上であつたので喜ばなかつたが、一男子（夕霧）を生んで後、程なく六條宮の御息所の嫉妬から、生靈にとりつかれて、早く亡くなつた。その後源氏は本妻をば持たなかつたが、紫の上といふを本妻同樣に寵愛した。これは藤壺の姪で、藤壺に能く似てゐるところから、藤壺を慕ふのあまりに愛するやうになつたのである。紫の上は才色すぐれてゐるうへに、溫良貞淑なる人で、源氏とよくつ

りあうた理想の婦人であつた。然るに、この人は源氏に先だつて世を去つた。その後、源氏は快々として樂まず、程なくその跡を追うて亡くなつてしまつた。正篇四十四帖見來れば、かくの如くである。光源氏てふ理想の好男子が、十二分の同情と仰慕とを一身に集め、數多の婦人の愛を享け、帝位にこそ上らぬものゝ、太上天皇にまで准せられたといふ極めて花やかな幸福な生涯をうつしたに過ぎない。至極平坦な描寫である。時に多少の懊惱苦悶はあれど、それは叶はぬ戀をなげき、見ぬ戀にあくがれるくらゐなもの、社會の制裁、道義の衝突などから來る悲慘なるものではない。その外の人物事件でも皆そのとほりである。天地は壯麗なる平安城裡、人は多情多感なる王孫公子、歌舞管絃の洋々たる裡に、華奢風流を盡し、遊惰放逸を事として、幸福圓滿なる一生を送るのであつた。

『宇治十帖』はこれと異なつて、最初から沈鬱なるもの。宇治の里に八の宮という零落した勢力のない古宮があつた。その宮に大君・中の君・浮舟と呼ぶ三人の女がある。薫の大將は元來幽鬱なる性質の人で、俗塵を厭ふところから、八の宮の境遇に同情し、をり〳〵かの君の許を訪ねる。その中に、薫は大君を見初めて、言ひよるが應じない。そこで中の君をと思ふが、それさへ既に匂の宮のものとなつた。

薫はやう〳〵その妹の浮舟の君を得た。然るに、匂の宮の好色なる、浮舟のうるはしい姿を見ては捨ておきがたくて、つひに又欺いて不義の契を結んだ。浮舟の君は一時の情にひかれて、雙方に身を任せはしたものゝ、心一つに身のふり方を定めかねて、つひに宇治川に入水して死なうとしたが救はれて尼となつた。全篇いかにもあはれな事ばかりである。かの四十四帖の花やかな幸福の生涯は、この十帖には痛はしい生活、失戀の境遇と變つてゐる。『宇治十帖』は實に懊惱苦悶憂愁悲歎が交、充滿してゐる。人物の性質とてもかの光源氏は稍、圓滿なる美性を具へた理想的人物として描かれたのに、これは偏僻なるものばかりで、薫の大將は沈みがちであはれつぽく、匂の宮はあだ〳〵しくて好色の癖がある。大君・中の君・浮舟の君とても、かの紫の上とは異つて、幾多の缺點を持つて居る。これを前の四十四帖にくらべると、餘程の相違である。

そも〳〵紫式部は如何なる抱負を以てかゝる物語を書いたのか。これについては昔からいろ〳〵の說がある。あるものは訓戒の爲だといひ、あるものは、誨淫の書だといひ、あるものは佛理を談ずるのだといひ、あるものはさま〴〵の戀を描かうとするのだともいふ。吾人は、前の四十四帖に於いて今を盛りの花に憂の色

あるを見、後の十帖に於いて木枯吹き荒ぶ冬の野に一道の春光を認めるが如き趣あるを見て、式部が身につまされて觀じ得たる人生の發展を寫したのではなからうかと思ふ。何は兎もあれ、昔からさま〴〵の異說をいれて今に至つたのは此の物語のあらはす天地の大なるからではあるまいか。吾人は此の物語を繙いて、花やかで丸みもあり溫みもあり樂天的な情操偏重的な中に、どこともなく寂しみの潛在してゐた時代の俤を見、人物を送迎し、而して銑錬推敲せられたる文章の優婉溫潤なる氣味にふれて、そゞろに古文學の趣味に引きつけられる心持を禁じ得ぬのである。

吾人は今之を講述するに當つては、省略せる語句又は接續の朧げなるところなどには、補綴の語句を括弧の中に挿入して置く。原文の妙趣を味はうとするものは、須らく括弧内の語句を省いて讀み給へ。なほ此の物語全部を繙かうとするものゝ爲に參考となるべき註釋書は、

『源氏物語湖月抄』　刊本　北村季吟著　六十卷

これは德川時代の初期に出來たもので、古說を集成し代表した作であるが、幾多の缺點あるを免れぬが、本文全部揃つてゐて重寶なもの。後に出來た

源註拾遺　元祿九年成刊本　契沖著　八卷

源氏物語玉の小櫛　刊本　本居宣長著　九卷

玉の小櫛補遺　文化十三年刊　鈴木朗著　二卷

源氏餘滴　活版本　石川雅望著　二十卷

は何れも湖月抄を本として訂正增補したるもの。

源氏物語評釋　嘉永七年成　安政元年刊　萩原廣道著　十三卷

これは前數書を大成したるものとも見らるべきが、「花の宴」までにて未完である。尤も「花の宴」まで精讀すれば、その餘は『湖月抄』でも大體通ずることは出來よう。これは木版本も活版本もある。

帚木　雨夜の品定

吾人はまづこゝに「帚木」の卷の一節雨夜の品定を講述しよう。此の一節は『源氏物語』の中では重要なる部分で、全篇にあらはれたる女性の抽象的縮寫とも見るべく、式部の婦人觀がほの見え、文章も對話に富み、議論がゝつて一段と力强く引締つてゐる。されば昔の學者も此の一節のみについて特別の研究解釋を試みた程である。宗祇法師の『雨夜讀抄』加藤宇萬伎の『雨夜物語だみことば』は、それである。

つれ〴〵と降りくらしてしめやかなる宵の雨に、殿上にもをさ〳〵人ずくなに、〔源氏の〕御宿直所も例よりはのどやかなる心地するに、おほとなぶら近くて書どもなど見給ふついでに、近き御厨子なるいろ〳〵の紙なる艶書どもをひき出でゝ、〔頭の〕中將わりなくゆかしがれば、〔源氏は〕「さりぬべき〔をば〕少しは見せん、かたはなるべきもこそ〔あれ〕」と〔いひて〕許し給はねば、〔頭の中將の〕「そのうちとけてかたはらいたしとおぼされんこそゆかしけれ、おしなべたるおほかたの〔ふみ〕は、數ならねど程々につけて〔われも女と〕書きかはしつゝも見侍りなん、おのがじゝ恨めしきをり〳〵、待ちがほならん夕暮などの〔ふみ〕こそ見どころはあらめ」と怨ずればやんごとなく切に隱し給ふべきなどは、かやうにおほざうなる御厨子などに打置き散らし給ふべくもあらず、深くとり置き給ふべかめれは、これは二の町の心やすき〔ふみ〕なるべし。〔源氏の

見給ふを頭中將〕かたはしづゝ見るに〔つけて、中將〕「かくさま〴〵なるものどもこそ侍りけれ」とて、心あてに、それか彼れかなど問ふ中に、いひ當つるもあり、もて離れたる事をも〔その人かと〕思ひよせて疑ふ〔を〕も、〔源氏の心には〕をかしとおぼせど、言ずくなにて、とかく紛はしつゝとり隱し給ひつ。

語釋 ○つれ〴〵と降りくらして。たいくつさうに終日雨が降つて。○例よりは。いつもよりは。○おほとなぶら。御殿油にて、燈火のこと。○御厨子。茶筥笥などの如く、棚や戸などがあつて、調度を入れおくもの。○わりなくゆかしがれば。譯もなく見たがるから。ゆかしは心がその物の方へ行く意にて、見るものなら見たい、聞くものなら聞きたいと思ふこと。○さりぬべき少しは見せん。さしつかへのないのをば少しは見せよう。○かたはなるべきもこそ。見苦しいものもあらう。○そのうちとけてかたはらいたしとおぼされんこそ。そのうちとけたる艶書の人に見られて迷惑と思はれるであらうのこそ。○おしなべたるおほかたのは。なみ〳〵なるたいていのは。○

數ならねど程々につけて。人數ならぬつまらぬものなれど身分相應に。○おのがじゝ。めい〳〵それ〴〵に。○待ちがほならん夕暮などのこそ。夕暮などに來た待ちがほならんふみこそといふ意にて、待ちがほならんは夕暮にかゝるにあらで、ふみにつゞける。○やんごとなく切に隱し給ふべきなどは。並大抵のものではなくて大切に隱しなさるべきものは。○おほざうなる。なほざりなる。○これは二の町の心やすきなるべし。これは二番目のにて誰に見られても差支のないふみであらう。○とかく紛はしつゝ。とやかくとごまかしつゝ。

〔源氏の君の〕「其許にこそ多く集へ給ふらめ、すこし見ばや、さてなんこの厨子も快く開くべき」とのたまへば、〔中將「君の」〕御覽じどころあらんこそ難く侍らめ」などきこえ給ふついでに、「女のこれはしも難つくまじきは難くもあるかなと漸うなん見給へ知る。だと難つくまじきは難くもあるかなと漸うなん見給へ知る。だうはべばかりのなさけに、手走りがき、折節のいらへ心得てうちしなどばかりは、隨分によろしきも多かりと見給ふれど、そも誠にその方をとり出でんえらびに必ず漏るまじきはいと難しや。〔すなはち〕わが心得たる事ばかりをおのがじゝ心をやりて、人をばおとしめ、かたはらいたきを多かり。親など立添ひ、もてあがめて、生ひさき籠れる窓の内なる程は、たゞかたかどを聞き傳へて、〔聞く人の〕心を動かす事もあり。貌をかしくうちおほどき若やかにて、〔外の所作に〕紛るゝとなき程、はかなき〔琴、歌などの〕すさびをも、人まねに心をいるゝ事もあるに、おのづから一つゆゑづけてし出づることもあり。〔それを〕見る人〔その女の〕後れたる方をば言ひかくし、さてありぬべき方をば繕ひてまねび出すに、〔之を聞く人〕それしかあらじと空にはいかゞは推しはかり思ひくたさん、まことかと見もて行くに、見劣りせぬやうはなくなんあるべき」と〔言ひて〕うめきたる〔中將の〕けしきも耻かしげなれば、いとなべてはあらねど、〔源氏の心には〕われもおぼし合はする事やあらん、うちほゝ

ゑみて「そのかたかどなき人はあらんや」とのたまへば、

語釋　○女のこれはしもと……難くもあるかな。これはととり出て難のつけられぬ程のよい女は世にあることの難いものであるわい。しもは共に意を強める感動詞。○見給へ知る。見知りましてございます。給へは下二段の動詞の助動詞に轉じたるもので、我が動作を表はす動詞の下に連りて言葉を鄭重にする敬語。○折節のいらへ……などばかりは。をりふしにつけたるふみの返事又は歌のかへしなどをば心得てするだけは。○隨分によろしきも多かり。その人の分に應じて可なりにするものも多くある。○その方。手走書、折節の應答などを心得てするたぐひ。○必ず漏るまじきは。必ず其選に漏るまじきものは。○わが心得たる事ばかりを……かたはらいたきこと多かり。自分の習ひ得たる藝能だけを銘々に自贊して、人を侮り貶してそばはづかしいことが多くある。○親など立添ひもてあがめて。父母などが附添ひゐて大事に養ひ育てゝ。○生ひさき籠れる窓の内なる程は。行くさきの長い若い女が親の家にある時分はの意。窓の内とあるは、長恨歌に、楊家有女、初長成、養在深窓、人未識とある如く、人の女が親の家に在る程をいふ、生ひさ

き籠れるといひ窓の内と續けたるは文のあや。○たゞかたかど。たゞ才藝の一端。○貌をかしくうちおほどき。容貌よくしておほやうなる意。○紛るゝことなき程。親の家に在る程は爲すとも單純なので、他の所作に紛ぎれることのなきうちは。○はかなきすさび……あるに。一寸とした琴とか歌とかの慰みごとをも、人のするのを見まね聞きまねに、ふと心を入れて習ふともあるに。○一つゆゑづけて。一藝をば大抵に。○さてありぬべき方をば……まねび出すに。さてあつてよい方面の事すなはちその女の長所をばとりつくろうて語り出すに。まねぶとはその有樣を言葉にうつし出すこと。○空にいかゞは推しはかり思ひくたさん。その實際を知らないで空に當推量をして何んで思ひけなさうぞ。○見劣りせぬやうはなくなんあるべき。見初めたる時よりは見馴れるにつれて次第に劣らぬといふやうな事はないであらう。○うめきたるけしきも耻かしげなれば。歎息したる中將の體の耻かしく見えるから。○なべてはあらねど。ことゞくおもひ合はするにはあらねど。○そのかたかどもなき人はあらんや。その一藝もない女が世にあらうかゞさやうなものはあるまい。

〔中將の〕「いとさばかりならんあたりには、誰かはすかされより侍らん。とる方なく口をしきと優なりとおぼゆるばかり勝れたるとは、數ひとしくこそ侍らめ。人の種姓高く生れぬれば、人にもてかしづかれて〔わろき事の〕かくるゝ事多く、自然にその形容此上なかるべし。中の品になん、人の心々おのかじゝの立てたる〔志の〕趣も見えて、分かるべきこと、かたゞ〳〵多かるべき。下の段といふ際になれば、殊に耳たゝずかし」とて〔語れるさまの〕いと隈なげなるけしきなるもゆかしくて、〔源氏の君の〕「その品々や如何に、いづれを三つの品に置きてか分くべき。〔例へば〕もとの種姓高く生れながら身は沈み位短くて人げなき〔と〕、また直人の上達部などまで成り上りたる〔が〕われはがほにて家の内を飾り人に劣らじと思へる〔と〕、その差別をば如何分くべき」と問ひ給ふほどに、左馬頭藤式部丞〔源氏の君の〕御忌に籠らんとて參れり。〔三人共に〕世の

すきものにて、物よくいひ通れるを〔以て〕、中將待ちとりて、この品品を辨へ定め爭ふ。〔世の女のよしあしをいふなれば〕いと聞きにくき事多かり。

大意 以上三節を第一段とす。はじめに一見才藝の勝れてゐると見える女も實際には甚だ稀なる由をいひ、次に家系によりて又その品位に差等のあるべきことをいふ。

語釋 ○さばかりならんあたり……すかされより侍らん。それほど無藝であらう女の許へは何人か誘はれ近づかうぞ、近づくものはあるまい。○とる方なく口をしきと。何等のとりえなくつまらぬものと。○數ひとしくこそ侍らめ。數同樣に少くありましよう。上中下の三段の中で、上の上と下の下とは同樣に少數であらうとて、それらの階級をば省いて專ら中の品について論じようとするのである。○人にもてかしづかれて。人にあがめられて。○そのけはひこよなかるべし。その樣子が甚だ結構に見えることであらう。○人々の心々……見えて。人々の各自に立てたる志の振合も見えて。○分かるべきことのかたゞ〳〵多かるべき。よしあしの見えわかれる事が、あれやこ

れやと多くあるであらう。○下の段といふ際になれば。下等社會といふ身分のものになると。○殊に耳立たずかし。格別耳にとまらぬ。○いと隈なげなるけしきなくもゆかしくて。中將が至極明かに知つてゐるらしい樣子であるのもなつかしく聞きたい心持がして。隈なげは隱れたる所なく通じてゐる樣子。○直人の上達部まで成りのぼりたる。尋常なる家柄のものが公卿まで立身したる。直人はこゝでは諸大夫などの地下人をいひ上達部は三位以上のもの及び參議の官にあるものをいふ。○世のすきもの。今の世の風流男。○物よくいひとほれるを。深く細かなる所までもよく行きわたつてゐるを。○いと聞きにくきこと多かり。いと聞きぐるしい事が多い。世の女の上を批評するに依て聞きぐるしいのである。

〔馬頭〕「なりのぼれども、元來さるべきすぢならぬは、世の人の思へる事も、さはいへどなほことなり。またもとはやんごとなきすぢなれど、世に經るたつき少く、時世うつろひて〔世の〕おぼえ衰へぬれば、心は心として事足らず、わろびたる事ども出で來るわざなめれば、とりぐにことわりて、中の品にぞ置くべき。

大意 源氏が頭中將に問はれたる二つの品の差別を、馬頭が引きとりて評するのである。馬頭の意では、成り上りたると元の身分の貴きとをば中の品におくべきものとし、以下にその例をあぐ。

語釋 ○さるべきすぢ。然るべき家系。○さはいへどなほことなり。成りのぼつたとはいふものゝ、矢張り世人の思はくは元來の公卿とは異なる。○世に經るたつき少く。世渡りの手がゝり少く。○心は心として。我が心はなほ昔よかつた時の心であるとして。○とりぐにことわりて。それぐに判斷して。

〔たとへば〕受領といひて、人の國の事にかゝづらひ營みて、品定まりたる中にも、また段々ありて、中の品のけしうはあらぬ〔中へは〕選出づべきころほひなり。なまぐの上達部よりも、非參議の三四位どもの、世のおぼえ口をしからず、もとのねざし賤しからぬが、やすらかに身をもてなし振舞ひたる〔は〕いとかはらかなり

や。家の内に足らぬ事などはた無かめるまゝに、省かずまばゆきまでもてかしづける娘などの貶しめがたく生ひいづるも數多あるべし。宮仕に出立ちて、思ひかけぬ幸とり出づる例ども多かりかし」などいへば、〔源氏の君の「さらば」すべて〔女の品の定まるは〕賑はしきに由るべきなめり」とて笑ひ給ふを〔心なき〕こと人のいはんやうに心得ず仰せらるゝ」とて、中將にくむ。

大意 以上馬頭のいへる全體を第二段とす。この段中の品におくべき女の種類をいふ。

語釋 ○受領とて人の國の事にかゝつらひ。受領とは諸國の守をいひ、人の國とは京都ならぬ他の國をいふ。○品定まりたる中にも。受領といへる品に定りてゐるが中にも。○けしうはあらぬ選出づべきころほひなり。わるうはない中へ選出すべき程合である。○なまゝの上達部。なまじけの公卿。公卿といふ名はあるが勢力も無いものをいふ。○非參議の三四位ども。未

だ參議とならざる三四位など。○世のおぼえ……いとかはらかなりや。世間の人の所思もあしからず、元來の素性も賤しからぬものが、心やすげに身を振舞つてゐるのがずつとさつぱりとしてゐるよ。○家の内に足らぬ事……數多あるべし。これらの人は我が家の内に不足な事もまた無いに任せて、手をぬかず光るほどに大事にして育てる娘などの貶しめがたく生ひ出づるのも、數多あるであらう。○思ひかけぬ幸とり出づる。主上の御あたりに近づき奉つて御子を生み奉るごとき事をいふ。○すべて賑はゝしきに依るべきなめり。さらばすべて女の品は富みたるに由て定まるやうである。賑はゝしきは家の富みて賑はしきこと。○にくむ。こゝではかりに憎むさまをするをいふ。

〔馬頭〕「元の種姓時世のおぼえうち合ひ、やんごとなきあたりの、うち〳〵のもてなしけはひ、おくれたらんは更にもいはず、何をして斯く〔後れて〕生ひ出でけんと、言ふかひなく覺ゆべし。〔またその身の程に〕うち合ひて勝れたらんもことわり、これこそはさるべ

き事とおぼえて、珍らかなる事と〔見る人の〕心も驚くまじ。某が及ぶべき程ならねば、上が上は打置き侍りぬ。さて世にありと人に知られず、さびしくあばれたらん葎の門に、思の外にらうたげならん人の閉ぢられたらんこそ、かぎりなく珍らしくは覺えめ。いかではたかゝりけんと、〔かねて〕思ふより違へることなん、怪しく心とまるわざなるべき。

大意 これまでは主として女の家系について品の差別あることをいひ、こゝからは更に一轉してその性格行爲について品の高下あるべき由をいはうとするのである。されど上品上の評は省いていはず、下の品の中に却て珍らしく可憐なる女のあるべきをいふ。

語釋 ○もとの種姓時世の……言ふかひなく覺ゆべし。元來の家系のよきに加へて時世のおもはく權勢もそれ相應にあつて格別に貴い家のあたりに育つた娘の、内々の振舞ぶりの人に劣つてをらうものはいふに及ばず、何んでこの樣に口をしく生ひ出でたらうかと思はれて、つまらない心持がするであらう。

○うち合ひて勝れたらん……心も驚くまじ。その娘の振舞ぶりが身分の程に應じて勝れてをらうのも、勿論、これはさうあるべき筈の事と思はれて、珍らしい事かなと驚くことはあるまい。○某。拙者。○あばれたらん葎の門に。葎の閉ぢて荒れてをらう貧乏家に。○らうたげ。かはゆらしげ。○いかではたかゝりけんと、……心とまるわざなるべき。どうしてまたかやうに可憐に生ひ出でたらうかと、案外な事で、不思議に注意を引くことであらう。

父の年老い物むづかしげに太りすぎ、兄人の顔にくげに、思ひやり異なる事なき閨の内に〔その女の〕いといたく〔その身を氣高く〕思ひあがり、はかなくしいでたることわざも故なからず見えたらん〔は〕かたかどにても、いかが思の外にをかしからざらん。すぐれて瑕なき方の選にこそ及ばざらめ、さる方にて捨てがたきものを〔ば〕」とて、式部を見やれば、〔式部が心に〕わが妹どものよろしきこえあるを思ひての給ふにや〔あらん〕と心得らん、物もいはず。「い

でや上の品と思ふだにかたげなる世を」と君はおぼすべし。〔その様〕白き御衣どものなよゝかなるに、直衣ばかりをしどけなく著なし給ひて、紐なども打捨てゝ、添ひ臥し給へる御ほかげいとめでたく、女にて見奉らまほし。此の〔君の〕御爲には上が上を選り出でても、なほ飽くまじく見え給ふ。

大意　馬頭なほ語をついで、何事もわろびて見える家の中に、一かどある女を見付けたる時の意外に珍らしく捨てがたきをいふにつけて、式部や源氏の思ふ心の中を記し、併せて源氏の容貌風采のめでたくて、上品上の女もなほ之が配偶者として十分ならぬ由を叙ぶ。以上を第三段とす。

語釋　○物むづかしげに。偏窟らしく。○思ひやり異なる事なき閨の内に。外から想像して見るに格別ゆかしげなる事のない深窓の内こ。○思ひあがり。吾身を重んじて上品ぶつてゐること。○はかなくしいでたる……見えたらん。一寸なした所業も仔細ありげに見えたのは。○かたかどにても。たとひわづかに一二の藝能でも。○さる方にて……ものをば。それ相應にその品にとつては捨てがたいものであるよ。をばの「ば」は「や」の誤であらう。「ば」にては意味通せず。○いでや……かたげなる世を。さあ上の品に屬すると思ふ女ですら一生つれ添ふ妻と定めんはむづかしげである世の中なるものを。これ源氏の心に葵の上の事を思ひあはせて、妻の選定の難儀なる事を思ふのである。○なよゝか。やはらか。○添ひ臥し給へる御ほかげ。物に寄り添ひ臥してゐられる御ほかげ。ほかげは燈の光にて見える御貌をいふ。○女にて見奉らまほし。自分が女であつて源氏を見奉りたい。男の眼で見てすらかくまで美しいから、女の眼で見たなら如何に立派であらうかと思ふのである。○この御ためには……ゆくまじく見え給ふ。かく美しい源氏の御爲には、上品上の女を選定して配するとも、なほ飽き足るまいとお見えなさる。

さまゞの人の上どもを語りあはせつゝ、〔馬頭〕「おほかたの世につけて見るには咎なきも、我物とうちたのむべき〔女〕を選ばんに、多かる〔女の〕中にも、えなん思ひ定むまじかりける。男子のおほやけにつかうまつり、はかゞしき世の固となるべきも、まこ

とのうつわものとなるべきをとり出でんには、難かるべしかし。されど〔國政を執るものは〕賢しとても一人二人〔して〕世の中を政りごち知るべきならねば、上は下に助けられ、下は上に靡きて、事ひろきに譲合ふらん。狹き家の内の主婦とすべき人ひとりを思ひめぐらすに、足らはで悪しかるべき大事どもなん、かたぐ〳〵多かる。『とあればかゝり、あふさきるさ』にて、なのめにさてもありぬべき人の少きを、すきぐ〳〵しき心のすさびにて、人のありさまを數多見あはせんの好ならねど、偏に思ひ定むべきよるべとすばかりに、同じくは我力入りをし、なほしひき繕ふべき所なく、心に叶ふやうもやと選りそめつる人の、定りがたきなるべし。必ずしも我思ふに叶はねど、見始めつる契ばかりを捨てがたく〔思ひて、終生我妻と〕思ひ止る人は、ものまめやかなりと見え、さて〔離別せられず〕たもたるゝ女のためも、心にくゝ推量らるゝなり。されど

なにか、世の有様を見給へ集むるまゝに、心に及ばず、いとゆかしき事もなしや。君だちの上なき御えらびには、ましていかばかりの人かたぐひ給はん。ところせく思ひ給へぬだに。

大意 一家の主婦たるべきものの選定は、國家の宰相たる人物の選定よりもなほ難き由をいふ。

語釋 ○おほかたの世につけて見るには咎なきも。大體世上の物として一とほりに見るのには難なきも。○えなん思ひ定むまじかりける。これがよいと決定することはむづかしくあるわい。○おほやけに。朝廷に。○はかゞしき世の固。しつかりとした天下の鎮。世の固とは國家の柱石たる大臣などをいふ、この人朝に立つて政事を執る時は世の中能く治りて動きなき故にかくいふなり。○まことのうつわもの。國政を料理するに足るべき眞の大器、人物。○事ひろきに譲合ふらん。各自いろ〳〵の長所々々のある中で融通し合ふ事であらう。○足らはで悪しかるべき大事どもなんかたぐ〳〵多かる。不足してゐて悪るかるからう事などはあれやこれやと數多ある。○とあれ

ばかゝり、あふさきるさにて。古今集の俳諧歌に「そへにとてとすればかゝり、かくすればあないひ知らずあふさきるさにて」とあるを引いて、一事よいとがあれば一事あしくての意。あふさきるさは合ふにも離るにもといふ意、俗にあれやこれやなどゝいふにおなじ。○なのめにさてもありぬべき人。ゆがみなりにでもそのまゝで辛棒される程の人。○すきゞしき心のすさびにて。浮氣らしい心の慰で。○人のありさまを……好ならねど。女の有樣を數多見くらべて見ようとする物ずきからではないが。○偏に思ひ定むべきよるべとすばかりに。ひとへに本妻にもしようとする程に。○おなじくは……定りがたきなるべし。おなじなら自分の骨折をして矯正すべき點なくその儘で我が氣に入る女もあるかと思つて選り始めたが、さてそのやうな女はなくて決定しがたいのであらう。○もの、まめやか。眞實。○さてたもたるゝ女のためも。そして終生離別されずに相具せられる女にとつても。○心にくい。ゆかしく。○されどなにか。心にくゝおしはかられるとはいへども、さやうの種類の女も何かゆかしからう。○心に及ばず。意に滿たぬやうに思はれて。○君だちの上なき御えらびには……たぐひ給はん。貴君達の此上ない御選擇には、どれほどの人が御意に叶ふ人となられるであらうか。我等の選擇ですら如此なれば、まして貴君達のといひて、源氏や中將らの高貴なる身分の人の本妻たらん女の稀なるべきをいふ。○ところせく思ひ給へぬだに。我等の如く賤しき身にて萬事窮窟に思ひませぬものですら。此の句を上の句へかけて「まして」の上に置いて見るのである。

「容貌きたげなく若やかなる程の「女の」おのがじゝは、塵もつかじと身をもてなし、文を書けど、おほどかに言えりをし、墨つきほのかに、心もとなく思はせつゝ、又さやかにも見てしがなとすべなく「返事を」待たせ、「或は又」僅かなる聲聞くばかり「そば近く」言ひ寄れど、「聲を」息の下に引入れ、言葉少なるが、「わろき所を」いとよくもてかくすなりけり。「さる女を」なよびかに女しと見れば、あまり情に引込められて、とりなせばあだめく。これを初の難とすべし。ことが中に、斜なるまじき人の後見の方は、物のあはれ知りすぐ

し、はかなきついでのなさけあり〔て〕、をかしきに進める方〔は〕無くてもよかるべしと見えたるに、またまめ〳〵しきすぢを立てゝ、耳はさみがちに、美相なき家刀自の、偏にうちとけたるうしろみばかりをして、〔男が〕朝夕の出入につけても、おほやけわたくしの人のたゞずまひ、よきあしき事の目にも耳にも留る有様を、うとき人にわざとうちまねばんやは。近くて見ん人の〔よしゐしを〕き分き思ひ知るべからんに、語りも合はせばやとうちも笑まれ、涙もさしぐみ、もしはあやなきおほやけばらだゝしく、心ひとつに思ひ餘る事など多かるを、なにゝかは聞かせんと思へば、うちそむかれて、人知れぬ思ひ出で笑もせられ、あはれともうちひとりごたるゝに、〔女が〕何事ぞなど、あわつかにさし仰ぎ居たらんは、いかゞ口をしからぬ。たゞ一向にこめきて、やはらかならん人を、とかく引きつくろひてはなどか見ざらん。心もとなくとも、なほし所ある心地すべし。げにさし向ひて見ん程は、さてもらうたき方に罪許し見るべきを、立離れては、さるべき事をも言遣り、折節にしいでんわざの、あだ事にもまめ事にも〔女の〕わが心と思ひ得る事なく、深きいたりなからんは、いと口をしく、たのもしげなき咎や、なほ苦しからん。常は少しそば〳〵しく心づきなき人の、をりふしにつけて、いでばえするやうもありかしなど、隈なきものいひも決めかねて、いたくうちなげく。

大意 物やはらかに女らしいと思はれる女は、あまり情に引込められて兎角にあだめくので、女などゝいふものは風流などいふ事は心得ないでもよいかといふと、唯衣食の世話などするばかりで話相手にならぬ主婦も決して面白いものではない。そして處女らしい柔順な女がよいかといふと、何かに自分と氣のつく事のないので、平素に氣にくはんでも自分で氣のつく女がよいとも思はれるなど、いろ〳〵の女の上をいふ。

語釋 ○おのがじゝは。めい〳〵自分々々では。○塵もつかじと身をもてなし。

つかじはつけじの誤であらう。塵ひとつをも身につけまいと若い女の身を嗜むこと。○おほどかにこといりをし。おほやうに言葉の選擇を爲し。○心もとなく思はせつゝ。おぼつかなく思はせて。○見てしがな。見たいものよ。○僅かなる聲きくばかり。ちよいとした聲をも聞くほどに。○なよびかに女しと見れば。やさしく女らしいと見ると。○ことが中に斜なるまじき人の後見の方は。女の爲すべき事の多くある中で等閑になるまじい夫の後見の方の事は。○はかなきついで。ちよつとしたをりふし。○をかしきに進める方。風流に片寄つた方の事は。○まめ〳〵しきすぢを立てゝ。眞實なる節の事を主として。○耳はさみがちに。昔の女は皆垂髮で額髮として左右に耳より前へも垂れたものであるが、容貌をつくろはぬ女は耳より前へ垂れたのをうるさがりて耳の後になるやうに耳に挾みたるをいふ。○美相なき家刀自。美しい相のない主婦。○うちとけたるうしろみ。心やすだての後見にて、衣食などの世話をすること。○人のたゞずまひ。人のていたらく。○うとき人にわざとうちまねばんやは。うと〳〵しい他人にむかつてわざ〳〵打語らうか、語れはしない。○見ん人。我妻。○あやなきおほやけばら立しく。わけもないおほやけ腹立しくとは我身に關係せぬ他人の身の上の事を見聞するにつけて腹立しく思ふと。○心ひとつに思ひ餘る事など多かるを。自分の一料簡に餘る事などの多くあるを。○なにゝかは聞かせん。なんでまあ物の心をも知らぬ我妻に聞かせられう。○うちそむかれて。妻の方へ向くべき顏も自然他の方へむけられて。○人知れぬ思ひ出で笑も……ひとりごたるゝに。我妻のいふかひなきを人知れず思ひつゞけて只一人笑もせられ、嗚呼々々と歎息もせられるに。○あわつかに。あわたゞしげにざわ〳〵と。○いかゞは口をしからぬ。どうして殘念でなからうぞ。○こめきて。おぼこめいて。○なほし所ある心地すべし。なほし甲斐ある心持がするであらう。○げに。いかにも。○さてもらうたき方に。さありても可愛らしい方に。○罪許し見るべきを。缺點をも見許して我慢も出來ようが。○立離れては。引離れてゐる程は。○さるべき事。然るべき用事。○あだこと。ちよいとした事。○深きいたり無からんは。深い功者のなからう女は。○たのもしげなき咎やなほ苦しからん。賴みがひのないと思ふ難が矢張心苦しくあらう。○そば〳〵しく心づきなき人。

よそ〳〵しく氣にくはぬ女。○いでばえするやうもありかし。出來ばえするといふ事もあるものよ。○隈なきものいひ。世の中の女のさま〴〵の有様を殘りなく明らめてゐる論者。

「今は唯種姓にもよらじ、容貌をば更にもいはじ。いと口をしくねぢけがましきおぼえだになくば、たゞひとへにものまめやかに、靜かなる心の趣ならんよるべをぞ、つひのたのみ所には思ひおくべかりける。〔その上に〕あまりのゆゑよし心ばせうち添へたらんをば、よろこびに思ひ、すこし後れたらん方あらんをも、強ちに求め加へじ。うしろやすくのどけき所だに強くば、うはべの情は、おのづからもてつけつべきわざをや。

大意 此段品定の主眼とする所にて、物靜かに貞實なる人を終生の配偶者と定むるより外にすべき由無きことをいふ。

語釋 ○ねぢけがましきおぼえだになくば。ひねくれてゐると思はれる點でもなくば。○よるべ。よりどころ、我通ふ女。○つひのたのみ所。一生のたより所、本妻。○あまりのゆゑよし心ばせ。その餘の才能性質。○後れたらんをば。足らはぬ方のあらうのをば。○うしろやすく長閑けき所だに強くば。氣遣ひなく穩かな所でも確かならば。

「艶に物はぢして、うらみいふべき事をも見知らぬさまに忍びて、うへはつれなくみさをづくり、心ひとつに思ひ餘る時は、いはん方なくすごき言のは、あはれなる歌を詠みおき、しのばるべき形見を留めて、深き山里、世ばなれたる海づらなどに這ひ隱れぬかし。童に侍りし時、女房などの物語讀みしを聞きて、いとあはれに悲しく、心深き事かなと〔思ひて〕涙をさへなん落し侍りし。今思ふには、いと輕々しくことさらびたる事なり。〔我に〕志深からん男を措きて、見る眼の前につらき事ありとも、人の心を見知らぬやうににげ隱れて人を惑し、〔男の〕心をも見んとする程に、永き世の物思になる。いとあぢきなき事なり。心深しやなど、〔人に〕譽

めたてられて、あはれ進みぬれば、やがて尼になりぬかし。〔遁世を〕思ひたつ程は、いと心澄めるやうにて、世にかへり見すべくも思へらず、いであな悲し、かくはたおぼしなりにけるよなどやうに、相知れる人來訪ひ、ひたすらにうしとも思ひはなれぬ男聞きつけて、涙落せば〔女の〕使ふ人ふる御達など、君の御心はあはれなりけるものを、あたら御身を〔かく尼に成し給へる〕などいふに、自ら額髪をかき探りて、あへなく心ぼそければ、うちひそみぬかし。忍ぶれど涙こぼれぬれば、をり〳〵ごとにえねんじえず、悔しきことも多かゝめるに、佛もなか〳〵心ぎたなしと見給ひつべし。濁りにしめる程よりも、なまうかびにては、かへりて悪しき道にも漂ひぬべくぞ覺ゆる。〔たとひ又〕絶えぬ宿世淺からで、尼にもなさで尋ねとりたらんも、やがてその思ひで、うらめしきふしあらざらんや。あしくもよくも相副ひて、とあらんをりも、かゝらんきざ

みをも見過したらん中こそ、契深くあはれならめ、われも人もうしろめたく心、おかれじやは。又なのめに〔心の〕うつろふ方あらん人をうらみて、けしきばみ背かんはた、をこがましかりなん。心はうつろふ方ありとも、見そめし志〔を〕いとほしく思はゞ、さる方のよすがに思ひてもありぬべきに、さやうならんたぢろきに、絶えぬべきわざなり。

大意　内氣で物恥して、恨みいふべき事をもいひえないで居て、我心一つにあまる時は、おそろしい文句などを殘して山里などににげ隱れ、又は尼などになる女がある。一寸考へると同情すべきやうであるが、そのやうな女に限つて、男の心は左程でもなかつた、惜しい事をなさつたものだなどいはれると、えて後悔するものである。それだから少し位つらい事があつても辛棒してゐるにかざる。さうすると男の方でも然るべきたより所と思ふであらう。然るに尼になるといふやうな事があると、そんなどさくさが本で中が絶えてしまうであらう。

語釋　○艶に物恥して。心優しく人目を恥かしがつて。○うへはつれなくみさをづくり。表面をば平氣に何の變つた所ない樣子をし。○しのばるべき形見を留めて。男が後に見て戀しがるべき紀念の品を殘しおき。○世ばなれたる海づら。世間遠き海邊。○童に侍りし時。馬頭の童子であつた時をいふ。○女房。女中。○物語。小說。○ことさらびたること。わざとがましいこと。○人の心。我男の心。○永き世の物思。生涯の物思すなはち離緣となる事をいふ。○あはれ進みぬれば。情が進むと。○やがて。ぢきに。○世にかへり見すべくも思へらず。此世をば再びふりむいて見ようとも思つてゐない。○いで、あな悲し、かくはたおぼしなりにけるよ。相知れる人のいふ言葉で、やあこれはあゝ悲し、このやうにもまた御決心なされたことよ。○うしとも思ひ離れぬ男。厭なとも思ひきらぬ男。○ふる御達。年寄つた女房等。○君の。男の。○あたら御身をなど。惜しくも御身を尼に成された事よ。○あへなく、はり合なく。○うちひそみぬかし。顏を顰めて泣顏をするよ。○忍ぶれど涙こぼれぬれば……えねんじえず。男を捨てゝ尼に成つた悲みを耐へるけれど、涙がこぼれると、あはれなるをりふしごとに辛棒がしきれないで。○なかなかこゝろぎたなし。却つて氣がきたない。○濁にしめるほどよりも……漂ひぬべくぞおぼゆる。俗の身で此世に在つた時よりも、かく出家の後の心のなまざとりでは、却て惡道に迷ふであらうと思はれる。○絕えぬ宿世淺からで。中の絕えまじき前世の契深くて。○やがてその思出。すぐに家を出でた事の思ひ出しが。○われも人もうしろめたく心おかれじやは。男も女も氣づかはしく氣の置かれまいものか、互に遠慮されるであらう。○なのめにうつろふ方あらん人。いさゝか橫道へ氣の移るであらう男を。○けしきばみ背かんはたをこがましかりなん。面白からぬ氣持を見せて背かうことも亦馬鹿らしくあらう。○心はうつろふ方ありとも。男の心は橫道へ移るところはあつても。○見そめし志いとほしく思はい。最初女を見始めた時の心持から女を氣の毒に思ふならば。○さる方のよすがに思ひてもありぬべきに。それ相應のたより所に思つてをるであらうに。○さやうならんたぢろきに、絕えぬべきわざなり。そのやうなどさく騷に、お互の仲も絕えてしまうであらう事である。

「すべてよろづの事なだらかに、怨ずべき事をば見知れるさま

にほのめかし、うらむべからんふしをも憎からずかすめなさば、それにつけてあはれもまさりぬべし。多くは我心も見る人から治りもすべし。〔さればとて〕あまりむげに見はなちたるも心やすくらうたきやうなれど、おのづから輕き方にぞおぼえ侍るかし。繫がぬ舟の浮きたるためしも、げにあやなし。さは侍らぬか」といへば、中將うなづく。

大意　怨ずべき事をも怨せずに、婉曲に諷する位に止めておくと、男の浮氣でも自然に治ることもある。さればというて、繫がぬ舟の風のまに〳〵浮きて流れるといふ事もあるから、男の浮氣を全く放任して知らぬふりでゐるのもよろしくない。以上を第四段とす。

語釋　○なだらかに。穩かに。○憎からずかすめなさば。きゝにくからぬやう可愛らしう婉曲にほのめかすならば。○我心も見る人から治りぬべし。男の心も相見る女ゆゑになほりもするであらう。○むげにうちゆるべ見放ちたるも。一向に男のするまゝに任せて全く知らぬふりしておいたのも。○

いらうたき。かはゆらしい。○おのづから……おぼえ侍るかし。自然粗末なやうにも思はれるぞよ。○繫がぬ舟の浮きたるためしもげにあやなし。『白氏文集』の偶吟詩に「無情水任方圓器、不繫舟隨去住風」にある語句を引いて、男の心の定まらぬことを書いたもので、繫がぬ舟が風のまに〳〵浮いて流れるといふ例あるが、いかにも理のないことである。○さは侍らぬか。さうではござらぬか。

中將の詞に「さしあたりて、をかしともあはれとも心にいらん人の、たのもしげなき疑あらんこそ大事なるべけれ。我心あやまちなくて〔疑はしきをも〕見すぐさば、さしなほしてもなどか見ざらんと覺えたれど、それさしもあらじ。ともかくも違ふべきふしあらんを、のどやかに見忍ばんより外に、增すことあるまじかりけり」といひて、我妹の姫君はこのさだめに叶ひ給へりと思へば、君のうち眠りて語交ぜ給はぬを、さう〳〵しく心やましと思ふ。

馬頭ものさだめの博士になりて、ひゞらき居たり。中將はこのことわり聞きはてんと、心に入れてあへしらひ居給へり。

大意 中將が馬の頭に對する應答の辭にて、我が愛する女の頼もしげないやうに見えるのは大變の事であるとて、頼もしげない女の上をいふ。これを第五段とす。

語釋 ○さしあたりて……大事なるべけれ。時にとつて我心に面白いともかはいさうとも思つて氣に入てゐる女のあてにならぬやうな疑のあらうのは大變の事である。○我心あやまちなくて見すぐさば。男の心が横道へ移るといふやうな過失がなくて女の心の疑はしいのをも見ぬふりして居るならば。○さしなほしてもなどか見ざらん。男の心に恥ぢて、女もその心を改めて見ぬことがあらうか、必ず改めて見るであらう。○それさしもあらじ。それもさうはあるまい。それは上の我心あやまちなくて云々とあるをいふ。○ともかくも違ふべき……增すことあるまじかりけり。畢竟するに、男の心の違ひたる事のあらうのを腹立ち怨せずして心寬かに見て我慢するより上こす事はないわい。○このさだめ。ともかくも云々といへる決論をさしていふ。

○さうゞしく心やましと思ふ。さびしくおもしろからず思ふ。○ものさだめの博士。批判の博士。○ひゞらきゐたり。口を叩いて居た。○このことわり聞き果てん。女の品々ある道理を聞いてしまはう。○心に入れてあへしらひゐ給へり。熱心に會釋してゐられた。

〔馬頭のいふ〕「よろづの事によそへておぼせ。木のみちの工匠の萬の物を心にまかせて作り出すも、臨時の翫物の、そのものと跡も定まらぬは、そばつきざればみたるも、げにかうもしつべかりけりと、時につけつゝ樣をかへて、今めかしきに目移りて、をかしきもあり。大事として、眞にうるはしき人の調度の飾とする、定まれる樣ある物を、難なくしいづることなん、なほまことの物の上手は、さま殊に見えわかれ侍る。また繪所に上手多かれど、墨書に選ばれて〔書くに〕つぎ〳〵に更に劣り勝るけぢめ、ふとしも見え別れず。かゝれど、人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海の怒れる魚

の姿、唐國のはげしき獸の形、目に見えぬ鬼の顏などの、おどろ〳〵しくつくりたるものは、心に任せて、ひときは人の目を驚かして、實には似ざらめど、さてありぬべし。世の常の山のたゞずまひ、水のながれ、目に近き人の家居ありさま、げにと見え、なつかしくやはらびたる形などを、しづかに書きまぜて、すくよかならぬ山のけしき、木深く世離れて疊みなし、けぢかき籬の内をば、そのこころしらひおきてなどをなん、上手はいと勢殊に書くを、わろものは及ばぬ所多かめる。てを書きたるにも、深きことはなくて、こゝかしこの點長に走り書き、そこはかとなくけしきばめるは、うち見るに、かど〳〵しくけしきだちたれど、なほまことのすぢを細やかに書き得たるは、うはべの筆勢消えて見ゆれど、今ひとたびとりならべて見れば、なほ實になんよりける。はかなき事だにかくこそ侍れ。まして人の心の、時に當りてけしきばめらんみるめのなさけをば、えたのむまじく思ひ給へ侍り。」

大意 眞面目な女とあだつぽい女との差別を、木工繪師書家の巧拙に比して說明し、あだつぽい女の賴もしからぬ由を叙ぶ。

語釋 ○木のみちの工匠。大工、指物師の如き木工。○その物と跡も定まらぬは。その物はどんな形であると確にその跡形のきまつてゐぬものは。○そばつきされば、みたるも。外形のしやれてゐるのも。これはうはべの風流めいて實のない女に比へたのである。○時につけつゝさまをかへて。その時々の好に應じうすべき事であつた。○げにかうもしつべかりけり。いかにもかて形をかへて。○今めかしきに目移りて。當世風なるに目移りがして。○大事として……定まれるやうある物を。大切なる事としていかにも立派な人の持つ道具の飾とする一定の形式ある品物を。○なほまことの上手はさま殊に見えわかれ侍る。矢張り眞實上手の職人の作つた物は樣子が格別すぐれて區別される。○繪所。繪畫の事を司る役所、式乾門の内の東腋、書所の南にあつた。○墨がきに選ばれて。彩色する事に對へて只繪を書くことをいふ。昔は繪を書いて彩色をば別人にさせたのである。○けぢめふとしも見えわ

かれず。差別が一寸見分られぬ。○おどろ〳〵しく作りたるものは。仰山らしく作つたものは。○さてありぬべし。それですむであらう。○世の常の山のだいずまひ。世間普通の山の體裁。○すくよかなる山。峨々たる山。○こゝろしらひおきて。心持定れる方法。○わろものは及ばぬ所多かめる。へたなものは行き屆かぬ所が多いやうである。このあたり、人の目を驚かす方をあだなる女に比へ、世の常の以下を實なる女に比へたのである。○てを書きたるにも。書をかいたのでも。○そこはかとなくけしきばめるは。どことなく氣どりめかしたのは。○うち見るにかど〳〵しくけしきだちたれど。一寸見ると才氣がゝつて氣がきいてゐるけれど。○まことのすぢを。眞正の筆法を。○うはべの筆消えて見ゆれど。表面の筆勢はなきが如くに見えるけれど。○なほ實になんよりける。矢張眞實の法にかなつてゐる方に心がひきつけられる。○はかなき事だにかくこそ侍れ。些細の事ですらこの通りでございます。○人の心の……え頼むまじく思ひ給へ侍り。人の心のその時々に氣どつたらしい眼先のなさけをば當にする事は出來まじく思ひます。

「その初の事すき〳〵しくとも申し侍らん」とて近く居寄れば、君も目さまし給ふ。中將いみじく信じて、頰杖をつきてむかひゐ給へり。法の師の世のことわり說き聞かせん所の心地するも且はをかしけれど、かゝる序は、おの〳〵睦語も、え忍びとゞめずなんありける。

語釋 ○すき〳〵しくとも。好色がましくても。○君も。源氏の君も。○世のことわり。世間の道理。○かゝる席は……え忍びとゞめず。かやうな折節はめい〳〵內證の情話をかくしとゞめられない。これまでを第六段とす。

〔馬頭のいふ「はやうまだ下臈に侍りし時、あはれと思ふ人侍りき。きこえさせつるやうに容貌などいとまほにも侍らざりしかば、よるべとは思ひながら、さう〳〵しくて、とかく紛れありき侍りしを、ものゐんじをなんいたくし侍りしかば、心づきなく、いとからでおいらかならましかば〔よからまし〕と思ひつゝ、あまりいと

許しなく疑ひ侍るしもうるさくて、かく數ならぬ身を見も放たで、などかくしも思ふらんと、心ぐるしきをり〳〵も侍りて、自然に心をさめらるゝやうになん侍りし。この女のあるやう、もとより思ひ到らざりける事にも、いかで此人の爲にはと無き手を出し、後れたるすぢの心をも、なほ口をしくは見えじと思ひ勵みつゝ、とにかくにつけて、物まめやかにうしろ見、つゆにても〔男の〕心に違ふことは無くもがなと思へりし程に、進める方と思ひしかど、とかくに靡き來てなよびゆき、見にくき容貌をも、此人に見や疎まれんと、わりなく思ひつくろひ、疎き人に見えば〔男の〕おもてぶせにや思ほんと憚り耻ぢて、みさをにもてつけて、見馴るゝまゝに、心もけしうはあらず侍りしかど、只このにくき方ひとつなん、心をさめず侍りし。そのかみ思ひ侍りしやう、かう強ちに〔我に〕從ひ畏ぢたる人なめり。いかで懲るばかりのわざして、嚇

して、この方も少しよろしくもなり、さがなさも止めんと思ひて、まことにうしなども思ひて、絶えぬべきけしきならば、かばかり我に從ふ心ならば、思ひこりなんと思ひ給へて、殊更になさけなくつれなきさまを見せて、例の腹立ち怨ずる〔時〕に、『かくおそましくば、いみじき契深くとも、絶えてまた見じ。かぎりと思はゞ、かくわりなき物うたがひはせよ。行先き長く見えんと思はゞ、つらき事ありとも念じて、なのめに思ひなりて、かゝる心だに失せなば、いとあはれと思ふべき。人なみ〳〵にもなり、すこしおとなびんにそへて、またならぶ人なくなんあるべき』など、かしこく教へ立つるかなと思ひ給へて、われだけくいひそし侍るに、〔女〕すこし打笑ひて『よろづに見だてなく物げなき程を見すぐして、人かずなる世もや〔あらん〕と待つ方は、のどかに思ひなされて、心やましくもあらず、つらき心を忍びて、〔男の〕思ひ直らんをりを見つけん

と、年月を重ねんあいなだのみは、いとくるしくなんあるべければ迭に背きぬべき刻になんある』と、ねたげにいふ時に、〔我は〕腹だたしくなりて、にくげなる事どもをいひ勵まし侍るに、女もえをさめぬすぢにて、およびひとつを引きよせて、くひ侍りしを、おどろ〳〵しく嘆ちて、『かゝる疵さへつきぬれば、いよ〳〵〔世間の〕まじらひをすべきにもあらず。辱しめ給へる官位、いとゞしくなにつけてかは人めかん、世を背きぬべき身なめり』などいひおどして、『さらば今日こそは限りなめれ』と、この〔かまれし〕およびを屈めてまかでぬ。

大意 此段は馬の頭が身の上話を叙べたのである。馬の頭が下臈であつた時に契を結んだ一人の女、馬の頭の爲に嫌はれはすまいかと心配して、無い手を出してまでも忠實に男の世話などをばするけれど、とかく嫉妬が深くて、馬の頭の夜あるきなどをば更に許さぬので、ある日馬の頭が之を矯め直さうとした

のが因となつて、永い別れと成つたことを記す。

語釋 ○下臈。官位の卑いものをいふ。○あはれと思ふ人侍りき。かはゆいと思ふ女があつた。○きこえさせつるやうに。お話しなされたやうに。○まほ。十分、端麗。○とまり。本妻の意。○よるべ。たより所、通ひ住む所。○さうぐしくて。此女だけでは物たらぬ心もちがして。○とかく紛れありき侍りしを。あちらこちらと紛れて他の女の許に通ひあるいたのを。○心づきなく。氣にくはず。○いとかゝらでおいらかならましかば。かう嫉妬深くなくて至極尋常であらうならば。○などかくしも思ふらん。どうしてかう深く我を思ふのであらう。○心苦しきをり〳〵も侍りて。我身を心配してくれるのを氣の毒に思ふ場合もあつて。○自然に心をさめらるゝやうになん待りし。自然我が浮氣心も治められるやうであつた。○この女のあるやう。此女の平素の樣子。○もとより思ひ到らざりける事にも。元來我が心の及ばなかつた事にも。○無き手を出し。我が出來ぬ事をもしでかし○口をしくは見えじ。いひ甲斐なく殘念なさまには見られまい。○物まめやかに。忠實に。○心に違ふ事はなくもがな。男の心に反する事はなくあ

れ。○進める方。さし過ぎたる方。○とかくに靡き來てなよびゆき。どのみちにも馬の頭に靡き從つてだん〳〵に心和ぎ。○見や疎まれん。見疎まれるであらうか。○とかく思ひつくろひ。むしやうにたしなみ。○うときに見えばおもてぶせにや思はん。他人に醜い顏を見られては馬の頭が不面目に思ふであらう。○みさをにつけて。身嗜みにつけて。此句の下に脫文ありと思はる、文意つゞかず。○心もけしうはあらず侍りしかど。心もわろうはなかつたけれど。○只このにくき方ひとつ。只あのにくい嫉妬の點一箇條。○心をさめず。馬の頭の心に落居ない。○そのかみ。當時。○畏ぢたる人なめり。こはがつてゐる女であらう。○いかで懲るばかりのわざして。どうぞ懲りるほどの事をして。○このかた。この嫉妬の點。○さがなさ。口さがなさにて、口やかましい事。○まことにうしなども思ひて。心から女の嫉妬をばつらいと思つて。○絕えぬべきけしき。兩人の仲の絕えてしまう樣子。○かばかり我に從ふ心ならば。此程に自分に靡き從ふ心ならば。○殊更になさけなく。格別になさけなく。○例の腹だち怨ずるに。いつもの通り立腹して怨言をいふに。○かくおぞましくば。かう悍々しくば○いみじき契深くとも。立派な宿緣深くても。○かぎりと思はゞ。これぎりと思ふならば。○わりなき。らつちもない。○行先き長く見えん。將來長く相副はう。○念じて。辛棒して。○なのめに思ひなりて。大抵に考へて。○かゝる心だに失せなば。かくの如き嫉妬の心でも亡くなるならば。○おとなびんにそえて。官位のあがつて大人らしくなるにつけて。○またらぶ人なくなんあるべき。また御身に肩を比する程の可愛な女は外にはないであらう。○われだけくいひそし侍るに。えらい氣に成つて言ひ過ぐしますに。○よろづに見だてなく、ものげなき程を見すぐして。何かに見すぼらしく物々らしからぬ間を見許して。男の官位など卑く見るかげなき程を見忍ぶことをいふ。○人かずなる世もやと待つ方は。人がましい時節もあらうかと、其時節を待つといふ方の事は。人かずなるとは官位の進むことをいふ。○のどかに思ひ成されて。のんきに考へられ、さのみ切にも望まないで。○心やましくもあらず。心悶へることもない。○つらき心を忍びて。つらいと思ふ心を我慢して。男のつれなさを女がつらく感ずるのである。○年月を重ねんあいなだのみ。數多の年月を送る空だのみ。○迭に背きぬ

べき刻になんある。互に離るべき時節である。○えをさめぬすぢにて。こらえる事の出來ない筋の事で。嫉妬の腹立は忍び得ぬので。○およびひとつ。指一本。○おどろ〳〵しく嘆ちて。仰山らしくぐちをいうて。○いとどしく。一層。○世を背きぬべき身なめり。遁世すべき身であらう。

〔馬頭〕『手を折りてあひ見しことをかぞふれば、
これひとつやは君がうきふし。

えうらみじなどいひ侍れば、〔女も〕さすがにうち泣き、

〔女〕『うきふしを心ひとつにかぞへ來て、
こやや君が手を別るべきをり』。

などいひしろひ侍りしかど、まことには變るべき事とも思へ給へずながら、日ごろ經るまで消息も遣はさず、あくがれまかりありくに、臨時の祭の調樂に、夜更けていみじう霙降る夜、これかれまかりあがるゝ所にて、思ひめぐらせば、なほ〔我が〕家路と思はん方は、〔別に〕また無かりけり。內わたりの旅寐もすさまじかるべく、

氣色ばめるあたりはそゞろ寒くや〔あらん〕と思ひ給へられしかば、〔かの女が〕いかゞ思へると氣色も見がてら、雪をうち拂ひつゝまかりて、なほ人わろく爪くはるれど、さりともこよひ目ごろの恨は解けなんと思ひ給へしに、火ほのかに壁に背け、なえたる衣どもの厚肥えたる〔を〕大なる籠に打懸けて、ひきあぐべき物のかたびらなど打上げて、今夜ばかりや〔男の來ん〕と待ちける樣なり。さればよと心おごりするに、正身はなし。さるべき女房どもばかり留りて、『親の家に、この夜さりなん渡りぬる』と答へ侍り。艶なる歌も詠まず、氣色ばめる消息もせで、いとひたやごもりになさけなかりしかば、あへなき心地して、さがなくゆるしなかりしも、我を疎みねと思ふ方の心やありけんと、さしも見給へざりし事なれど、心やましきまゝに思ひ侍りしに、着るべき物常よりも心とゞめたる色合し、さまいとあらまほしくて、さすがに我が見捨てゝん

後をさへなん、思ひやり後見たりし。さりとも絶えて〔我を〕思ひ放つやうはあらじと思ひ給へて、とかくいひ侍りしを、背きもせず、尋ね惑さんとも隱れしのびず、かゞやかしからずいらへつゝ、『たゞありし心ながらは、えなん見すぐすまじき、〔御身の心を〕改めて、のどかに思ひならばなん相見るべき』などいひしを、さりとも思ひ離れじと思ひ給へしかば、しばし懲さんの心にて、しか改めんともいはず、いたく綱引きて見せし間に、〔女〕いといたく思ひなげきて、はかなくなり侍りにしかば、戯れにくゝなん覺え侍りし。ひとへにうち賴みたらん方は、さばかりにてありぬべくなん思ひ給へいでらるゝ。はかなきあだ事をも、まことの大事をも、いひ合せたるにかひなからず、龍田姫といはんにもつきなからず、棚機の手にも劣るまじく、その方も具してうるせくなん侍りし」とて、〔かの女を〕いとあはれと思ひ出でたり。

大意　馬の頭が女と別れて後、ある夜宮中よりの歸さに女の家を訪ねると、女は留守だが、今夜こそは男が來るであらうと待つ樣子が見えて、男の爲に着物を始めさまゞの設などをしてあつて、いかにも斷念せざる樣子であるから、馬の頭からいろ〳〵いうてやつたが、浮氣が直らんではというて應せない、かれこれするうちに女は思ひあまつて死んでしまつた。

語釋　○手を折りて……君がうきふし。指を折つて、あひ見た年月を數へて見るに、たゞこの嫉妬の一つが御身の上のおもしろからぬ點である。手を折るは上のおよび屈めてとあるに應じ、外には何も御身に缺點はない、なにもかもよく我に盡してくれたといふ意を餘情に含めて、次のえうらみじの本文につゞけて見るべきである。○さすがにうち泣きて。心强く互に別れるとはいうたものゝうち泣いて。さすがにはしかすがにの約にて、さうはいふものゝといふ意。○うきふしを……手を別るべきなり。このうきふしは上の歌に君がうきふしといへるにつきて、却て馬の頭が浮氣心のあるをうきふしと見なし、さてその浮氣心のうきふしをたゞ我心ひとつに一つ二つと數へて忍び來て、そしてこれが御身と手をきるべき時節となつたのであらう。心ひとつに

數へ來ては料簡一つにをさめて一つ二つと數へつゝ忍びこらへること。○いひしろひ。互にいひ合ひ。○まことには變るべき……ながら。馬の頭の心中では、あゝはいふものゝ實際は今までと變らうとも思ひませぬものゝ。○日ごろ經るまで消息も遣はさず。日數の經過するまでたよりもせないで。○あくがれまかりありくに。どこともなく惑ひあるくに。○臨時の祭の調樂。賀茂の臨時祭の調樂にて、十一月午の日宮中の北陣に假屋を設けて行うたもの。調樂は祭日に奏すべき音樂の下さらひをいふ。○まかりあがるゝ所。宮中より出で別れる所。○なほ家路と……無かりけり。なほ我が家路と思ふ方には、かの別れた女の家を措いては別に立寄るべき所もなかつた。○內わたりの旅寐もすさまじかるべく。宮中などのひとり寐もおもしろくなからうし。旅にては一人まろ寐するもの故に、ひとり寐を旅寐というたのである。○氣色ばめるあたりはそゞろ寒くや。氣どつてゐる女のあたりはうち解けないから何となく寒からう。○なま人わろく爪くはれれど。何となく人目(ひとめ)恥かしく爪くはれるが。○火ほのかに壁に背け。燈火をば薄明くして壁の方に片寄せ。○なえたる衣どもの厚肥えたる。柔なる著物などの綿を多く入れて厚く脹れてゐるのを。○大なる籠。籠は伏籠(ふせこ)にて衣服に香を薰ずる爲に香爐の上に伏せて衣服をかけおく籠。○ひきあぐべき物のかたびら。几帳の帷などの類。○されば、よと心おごりするに。我が思うた如くそれこそ我をば思ひすてぬことよと心中で誇(ほこり)かに感ずるに。○さうじみはなし。その本人は居ない。さうじみは正身の音。○この夜さりなんわたりぬる。今夜になつて參りました。○艶なる歌。風流な歌。○氣色ばめる消息もせで。氣持を見せるやうなたよりもせないで。○ひたやごもり。直屋隱にて何の仔細をも明かさず、只かくれにかくれること。○あへなき心地。張合(はりあひ)のない心持。○さがなく許なかりしも。いぢわろく我を大目(おほめ)に見のがさなかつたのも。○我を疎みねと思ふ方の心やありけん。疎んじろと我を思ふ心でもあつたのであらうか。我をば男をさしていふ。あだし男ある爲にわざ〳〵馬の頭に嫌はれるやうに口さがなかつたのかと、馬の頭が思ふのである。○さしも見給へざりし事なれど。さやうにあだし男などのあるとは見ませんでしたけれど。○心やましきまゝに。心おもしろからぬまんまに。○常よりも心とゞめたる色合し、さまいとあらまほしくて。平素よりも

氣をつけて美しき色合に染め、その仕立の樣子なども好ましくて。○わが見捨てゝん後をさへ。自分の見かぎつた後をまでも。わがは女自身のこと。○さりとも絶えて思ひ放つやうはあらじ。さうはあつても馬の頭を斷念することはあるまい。○とかくいひ侍りしを。再び相見んなどゝかれこれいひましたを。○かゞやかしからずいらへつゝ。耻をかゝせぬやうに答へつつ。○たゞありし心ながらは。只今までどほりの浮氣心のまゝでは。○改めてのどかに思ひならば。浮氣心を改めて靜かに落ちつくやうにならば。○さりとも思ひ離れじ。さうはいうても斷念はすまい。○しか改めん。そのとほり改心しよう。○綱引きて見せし間に。ひつ張り合ひて見せた程にといふ意で、强情を張合うて見せたこと。○はかなく成り侍りにしかば。死んでしまつたから。○戯れにくゝなん覺え侍りし。じやうだんもしにくゝ思ひました。○ひとへにうち頼みたらん方は。ひたすら頼らうとする女即ち本妻は。○さばかりにても、ありぬべく。あれほどで其以上を加へずともよからう。○龍田姫といはんにつきなからず。龍田姫といはうのも不似合でない。龍田姫は風の神にて本來物を染めるなどの事はなけれど、此の神祭を

れる龍田山が紅葉の名所なるより、紅を染出す神の如くに見なしたのである。○棚機の手にも劣るまじく。棚機姫神は別段機織を司る神にはあらず、只機といふ語に因みて機織の上手なるやうにいはれるのである。○うるせくなん侍りし。功者でありました。

中將「そのたなばたの裁縫ふ方をのどめて、長き契にぞあえまし。げにその龍田姫の錦には又しくものあらじ。はかなき花紅葉といふも、をりふしの色合つきなく、はかゞしからぬは、つゆのはえなく消えぬるわざなり。さるにより〔よき女は〕難き世ぞとは、定めかねたるぞや」といひはやし給ふ。

大意 馬の頭の物語に對する中將の挨拶の辭にて、よき女の世にありがたき事をいふ。以上を第七段とす。

語釋 ○そのたなばたの……あえまし。その棚機姫に劣らざる裁縫の方をばゆるめて似ないであつても、かの天地と共に變ることのない長い契にあやからう。○げにその龍田姫の錦には又しくものあらじ。お話の趣では、成程その

女に如くものはあるまい。女のよき事をほめて錦といはうが爲に、上文の龍田姫をかりて、その龍田姫の染出す紅葉の錦とつゞけ、又しくといふ緣語を用ひたのである。○はかなき花紅葉といふも。つまらない花や紅葉といふやうなものでも。○をりふしの色合つきなく……消えぬるわざなり。そのときぐの色合似合はしからず、ふたしかなるのは、すこしの見ばえなく色消えて興のないものである。まして本妻たるべきものは何事も足らはではあしき事であるといふ意を、花紅葉といふもといふ語句に含めて書いたのである。○さるにより難き世ぞ。さういふわけだによつて何事も不足のない女といふものはあることのむづかし世の中ぞ。

馬頭「さておなじ頃まかり通ひし所は、人もたちまさり、心ばせまことに故ありと見えぬべく、うちよみ、はしりがき、かいひく爪音、手つき口つき、みなたどしからず見きゝ渡り侍りき。見るめもことともなく侍りしかば、このさがなものを打解けたる方にて、ときぐかくろへ見侍りし程は、いとこよなく心とまり侍りき。この人失せてのちいかゞはせん、あはれながらも過ぎぬるはかひなくて、しばし〔後の女に〕まかり馴るゝまゝに、すこしまばゆく、艶に好ましき事は〔我が〕目につかぬ所あるに、うちたのむべくは見えず、かれぐにのみ見せ侍りし程に、忍びて心かよはせる人ぞありけらし。神無月のころほひ、月おもしろかりし夜、内よりまかで侍るに、あるうへ人來合ひて、この車にあひ乘りて侍れば、大納言の家にまかりとまらんとするに、この人のいふやう、『こよひ人待つらん宿なん怪しく心ぐるしき』とて、この女の家はたよきぬ道なりければ、荒れたる〔築地の〕くづれより、池の水、かげ見えて、月だに宿る住家を過ぎんもさすがにて〔車より〕おり侍りぬかし。もとよりさる心をかはせるにやありけん、この男いたくすゞろぎて、門ちかき廊の簀の子だつ物に尻かけて、とばかり月を見る。菊いとおもしろくうつろひわたりて、風にきほへ

る紅葉のみだれなど、あはれとげに見えたり。

大意　同じ頃自分は今一人の心やすい女があつた、人がらもよし、才藝などもあるので内々通つてゐたが、かの指くひ女の死んでからは、通ふことも度かさなつて見ると、どうも最初思つたほどでもない、自然訪ねることも稀になつた。この女には外に男があつたらしい。神無月のある夜、自分が宮中からある殿上人と同車して歸るに、この女の家のほとりを通ると、この男はかねて約束してあるものと見えて、車から下りて、廊下に腰をかけて月を見る。菊のおもしろく咲いて、風に散る紅葉の様子があはれである。

語釋　○心ばせ　まことに故ありと見えぬべく。性質もまことに故ある女と見えるであらうし。○うちよみ。詠歌。○たどたどしからず。覺束なくはない、通じてゐる。○みる目もこともなく。容貌も格別難もなく。○このさがなもの。あのさがなき女。○かくろへ。かくれ。○こよなく心とまり侍りき。格別に氣に入りました。○まばゆく。まぶしく、目に見てうるさく思ふこと。○艶に好ましき事は。風雅に好ましいと思ふ點は注意をひかないで。○うち頼むべくは見えず。たより所にしようとは見えない。○かれがれにのみ

見せ侍りし程に。たえだえにばかり顔を見せましたうちに。○内より。禁中から。○うへ人。殿上人。○この車に。我が車に、馬の頭の車に。○大納言の家。何人かわからない、或は馬の頭の父の家かといふ。○こよひ人待つらん宿なんあやしく心苦しき。今晩我を待つ女の家が怪しく氣の毒に思ふから、そなたへ行かう。○よきぬ道なりければ。よけられない道筋であつたから。この邊、脫文あるのか文意つゞかず。○月だに宿る住家を。月の如き情無きものですら宿る住家を、只過ぎようのも。○いたくすゞろきて。大層勇みはやつて。○とばかり。暫時。○うつろひて。移りての延音で、色のあせて赤くなる意。○風にきほへる紅葉。風につれて爭ひ散る紅葉。

ふところなりける笛とり出でゝ吹き鳴らし、「かげもよし」などつゞしりうたふ程に、よく鳴る和琴を調べとゝのへけるを、うるはしくかき合せたりし程、けしうはあらずかし。律のしらべは、女の物やはらかにかき鳴らして、簾の内より聞えたるも、いまめきたる物の聲なれば、清く澄める月にをりつきなからず。男い

たく感でゝ、簾のもとに歩み來て、『庭の紅葉こそげに踏分けたる跡もなけれ』など、妬ます。菊を折りて、

殿上人『ことの音も菊もえならぬ宿ながら
つれなき人をひきやとめける。

わろかめり』などいひて、『いま一聲聞きはやすべき人のある時に、手な遺い給ひそ』など、いたくあざれかゝれば、女、聲いたうつくろひて、

女『木枯に吹きあはすめる笛の音を
ひきとゞむべきことのはぞなき』

と、なまめきかはすに、〔馬頭が心に〕にくゝなるをも知らで、又箏のことを盤渉調にしらべて、いまめかしくひきたる爪音、かどなきにはあらねど、まばゆき心地なんし侍りし。たゞときゞ語らふ宮仕人などの、飽くまでざればみすきたるは、さても見るかぎりは、をかしくもありぬべし。時々にても、さる所にて、忘れぬよすがと思ひ給へんには、たのもしげなく、さし過いたりと心置かれて、その夜の事にことつけてこそまかり絶えにしか。

大意　男が笛をとり出して吹くと、女が簾の内から和琴をしらべ合せたのを、男がひどく感心して、簾のもと近く立寄つて、和歌をよみかはしなどして戯れ合ふ。之を見る馬の頭の心の中でにくゝなるのを知らで、女が更に箏の琴を奏べた其爪音、いかにも一藝あるものとは思はれるが、何となくうるさく、一時の慰としてはかゝる女もよいが、終生のたより所としては頼もしげない心地がして、その夜の事に託して、馬の頭は通はなくなつた。

語釋　○かげもよしなどつゞいりうたふに。催馬樂に「飛鳥井にやどりはすべし、かげもよし、みもひも寒し、みまくさもよし」とある歌を一口づゝ歌ふに。こゝにこの歌をうたふは宿りはすべしの意をほのめかし知らせたのである。○和琴をしらべといふのへたりけるを。和琴の調子をとゝのへてあつたのを。○いるはしいかき合せたりし程。調子よくひき合せたその時。○けしうはあ

らずかし。わろくはないよ。○律の調は……物の聲なれば。律の調をば女が物柔かに搔鳴らして、それが簾の内より聞えたのも、當世風のあだ〳〵しい聲であるから。○清く澄める月に、をりつきなからず。清く澄みきつた月に對して時節柄不似合ではない。○庭の紅葉こそ……跡もなけれ。庭の紅葉に踏分けた跡があつて人の來り通ふ樣子であるといふ事を、却て反對に、庭の紅葉には成程人の踏分けたる跡がないなというて、口惜しがらせるのである。○ことの音も……ひきやとめける。琴の音も菊の色も尋常ならず結構な宿でありながら、何の風情もない私のやうなものを引き留めたことであるわい。この歌から直ぐに次のわろかめりとある語句につゞけて、それが只一つ迷惑の事であらうといふ意である。○手な遺い給ひそ。奥の手をつくして搔鳴し給へ。○いたくあざれかゝれば。ひどく戯れかゝると。○木枯の……こといはぞなき。木を枯らすばかり烈しい風に吹き合せるやうな笛の音であるから、木の葉の如きはかない言葉ではひきとゞむべきすべがない。約めていふと、木枯にとゞむべき葉もないといふ語を下にして、この殿上人を引きとむべき詞もないといふ意を寓したので、ことのはに琴をかね、笛を殿上人に見

傲したのである。○なまめきかはすに。なまめかしい事をいひ合ふに。○箏のこと。今日普通にことといふものにて、十三絃の琴である。○盤渉調。調子の名目で、當世風な派手やかな調子。○かどなきにあらねど。一藝ないではないけれど。○飽くまでざれればみすきたるは。したゝかにしやれすきがましいのは。○さても見るかぎりは。それでも相見るだけの間は。○さる所にて。さる通ひ所にして。○忘れぬよすがと思ひ給へんに。終生忘れぬ頼りどころと思はうには。○頼もしげなくさし過いたりと心おかれて。あてにならぬやうで出すぎてゐると氣がおかれて。○ことつけて。かこつけて。

「このふたつの事を思ひ給へ合するに、若き時の心にだに、なほさやうにもて出でたることは、いと怪しく頼もしげなくおぼえ侍りき。今より後は、ましてさのみなん思ひ給へらるべき。御心のまゝに、折らば落ちぬべき萩の露、拾はゞ消えなんと見ゆる玉ざゝの上の霰などの、艶にあえかなるすきゞしさのみこそ、

をかしくおぼさるらめ。今さりとも、七年あまりのほどに、おぼし知り侍りなん。なにがしがいやしき諫にて、すきたわめらん女には心おかせ給へ。あやまちして、見ん人のためかたくなる名をも立てつべきものなり」と誡む。中將、例のうなづく。君すこし片笑みて、さる事とはおぼすべかめり。いづかたにつけても、人わろくはしたなかりける御物語かなとて、うちわらひおはさうず。

大意 若い時の心ですら、きし出でた事は頼もしげなく思はれる、今後はましてさう思はれるであらう。君も浮氣な女には御心をおかせ給へなどいうて誡む。中將は例の如くうなづく。源氏の君は尤な事と思はれるやうである。之を第八段とす。

語釋 ○なほさやうにもて出でたる事は……おぼえ侍りき。矢張りさやうにさし出でた事は、いと奇怪に、あてにならぬやうに思はれました。○御心のまゝに……をかしくおぼさるらめ。御心のまゝに靡き從ふやうなはかなげなる好色らしいものばかりを面白く思ふであらう。「折らば落ちぬべき……玉ざさの上の霰」は弱々しくはかなげなるものに比し、折らば云々は『古今集』の「をりて見ば落ちぞしぬべき秋萩の枝もとをゝにおける白露」とある歌によつた語句と見ゆ。あえかは弱々しくはかなげなる意。○今はさりとも。今はさやうにあつても。○なにがし。馬の頭自身のこと。○すきたわめたらん女には心おかせ給へ。浮氣で靡き易い女には心を置かせ給へ。○見ん人のため……立てつべきものなり。さやうな女に關係する男は頑愚なる噂をも立てるであらう。○片笑みて。少しほゝゑむこと。○さる事とはおぼすべかめり。尤な事と思はれるやうである。○人わろくはしたなかりける物語かな。ざまわろく不都合であつた物語であるわい。○おはさうず。おはします。

中將「なにがしは白癡の物語をせん」とて、「いと忍びて見そめたりし人の、さても見つべかりしけはひなりしかば、さてながらふべきものとしも思ひ給へざりしかど、馴れゆくまゝにあはれと覺えしかば、たえ〴〵〔ながら〕忘れぬものに思ひ給へしを、さばかり

になれば、〔女も我を〕うち頼める氣色も見えき。たのむにつけては〔女の心に〕うらめしと思ふ事もあらんと〔我が〕心ながらおぼゆるをり〳〵も侍りしを、〔女は〕見知らぬやうにて、久しきとだえをも、かうたまさかなる人とも思ひたらず、たゞ朝夕にもてつけたらんありさまに見えて、心苦しかりしかば、たのめ渡る事などもありきかし。親もなく、いと心細げにて、さらばこの人こそは〔我が頼むべき人なれ〕と、事に觸れて、思へる氣色もらうたげなりき。かうのどけきにおだしくて、久しくまからざりし頃、この見給ふるわたりより、なさけなくうたてある事をなん、さる便ありてかすめいはせたりける。〔その事は〕後にこそ聞き侍りしか。さるうき事やあらんとも知らず、心には忘れずながら、消息などもせで久しく侍りしに、むげに思ひしをれて、心細かりければ、幼きものなどもありしに、思ひ煩ひて、瞿麥の花を折りておこせたりし」とて涙ぐみたり。〔源氏の〕「さてそのふみの詞は〔「いかに〕と問ひ給へば、「いさや、異なる事もなかりきや。

〔女〕山がつのかきほ荒るともをり〳〵に
あはれはかけよなでしこの露。

思出でしまゝにまかりしかば、例のうらもなきものから、荒れたる家の露茂きをながめて、蟲の音に競へるけしき、昔物語めきて覺え侍りし。

〔中將〕咲きまじる花はいづれと分かねども
なほとこなつにしくものぞなき。

大和撫子をばさしおきて、まづ塵をだにとおやの心をとる。

〔女〕うち拂ふ袖も露けきとこなつに
あらし吹きそふ秋も來にけり。

とはかなげにいひなして、まめ〳〵しくうらみたるさまも見え

ず、涙を漏らし落しても、いと耻かしくつゝましげに紛らはし隠して、つらきをも思ひ知りけりと〔我に〕見えんは、わりなく苦しきものと思ひたりしかば、心安くて、またとだえ置き侍りし程に、跡もなくこそかき消ちて失せにしか。まだ世にあらば、はかなき世にぞさすらふらん。あはれと思ひし程に、煩はしげに思ひまつはすけしき見えましかば、かくもあくがらさざらまし。こよなきとだえ置かず、さるものにしなして、ながく見るやうも侍りなまし。かの撫子のらうたく侍りしかば、いかで尋ねんと思ひ給ふるを、今にえこそ聞きつけ侍らね。これこそ、のたまひつるはかなき〔女の〕ためしなめれ。つれなくてつらしと思ひけるをも知らで、あはれ絶えざりしも、益なき片思なりけり。今やう〳〵忘れゆくきはに、かれはたえしも〔我を〕思ひ離れず、をり〳〵人やりならず胸焦るゝ夕もあらんと覺え侍り。これなん〔男の〕えた

もつまじく、たのもしげなき方なりける。

大意 中將がいふには、「我は嘗て人知れず馴染を重ねた女があつた。我もいとしき者と思ひ、女も力とする樣子であつたが、我を賴るにつけては、女の心に我をうらめしいと思ふ事もあらうと思はれたが、何ひとつ怨ずる事もないから、我は安心して久しく訪ねもしなかつた間に、我が本妻から、女の許におそろしい事をいはせたので、女は心細さのあまりに、二人の間に子供のあつたにも拘らず、行方知れずなつてしまつた。平素女が我がとだえを恨みでもしたら、かやうにさまよはすやうな事はさせまいものを。今も世にあるならば、時々は人知れぬ胸を焦すことであらう。これが所謂賴もしげのない女であつたわい。

語釋 ○さても見つべかりしけはひなりしかば。そのまゝで見られる程の樣子であつたから。○さてながらふべきものとしも思ひ給へざりしかど。そのまゝに長く相見ようものとも思ひませんでしたが。○さばかりになれば。それほどになれば。○心ながら覺ゆるをり〳〵も侍りしを。我心ながら思はれる時々もあつたが。○久しきとだえをも。長らく通ふことの絶えたのをも。○かうたまさかなる人とも思ひたらず。かくたまさかに通ふ人とも

思つてゐない。○たゞ朝夕にもてつけたらん有様。心には恨めしく思ひながらも何時も〳〵つゝしんで其色をあらはさぬやうにと辛抱してゐるやうな様子。○心苦しかりしかば。氣の毒であつたから。○たのめ渡る事などもありきかし。たのめはたのませにて、女に行末を憑ましめる事などもあつた。○らうたげなりき。可愛らしげであつた。○かうのどけきにおだしくて。かく寛大なるに心安くて。○この見給ふるわたり。我が連れ添ふものの邊から。○うたてある事を。穩かならぬ事などを。○かすめいはせたりける。あらはにいはでそれと心得られるやうにした。○さるうき事やあらんとも知らず。さやうなつらき事のあらうとも知らず。○をさなきもの。幼兒、後に玉かづらと呼ぶ女。○いさや異なる事もなかりきや。いやもう、格別な事も無かつたよ。○山がつの……なでしこの露。山がつは山間に住する賤民にて、女自身卑下していへる語、なでしこは幼兒の上にたとふ。山がつの垣ほ荒るともは男の通はなくなるをいふ。一首の意は、我れには心淺くなられても、此子供にはあはれをかけ給へといふこと。○思出でしまゝにまかりたりしかば。此歌をよこしたので、女の事を思出して女の許に參りました

に。○例のうらもなきものから。例の如く心の奥底もなきものゝ。○蟲の音に競へるけしき。蟲の鳴く音に劣らず物思へる樣子。○咲きまじる花は……しく物ぞなき。この庭園に咲きまじつてゐる花はいづれも見事で、いづれが特に勝ると見分けられない程であるが、矢張りとこ夏に及ぶものはない。とこ夏は撫子の一名で、床にいひよせて女の上をさし、撫子も可愛らしいが矢張り其方に及ぶものはないといふ意。しくも床の緣語。○大和撫子をばさしおきて。子供の事をばうちおいて。大和撫子は野山などに自然に生ずるもの、子供の事にたとふ。○まづ塵をだにとおやの心をとる。『古今集』に、「ちりをだに据ゑじとぞ思ふ、さきしより妹とわがぬる床夏の花」とある歌によせて、塵をすら据ゑまいと、まづ第一に母親の機嫌をとる。○うち拂ふ袖も……秋も來にけり。中將のとだえなさるので、床をうち拂ふ袖も涙にぬれて露けき我が上に、更に物悲しい心を添へる秋が來たことであるわい。常夏の花を吹きしをれさする嵐の吹き加はるといふは、本妻からおそろしい事をいはせたのをさしていふ。○はかなげにいひなして。とりとめないやうにいひなして。○まめ〳〵しくうらみたるさまも見えず。眞實に恨んでゐる樣子も

見えない。○つらきをも思ひ知りけり。つれなさを思ひ知つてゐるわい。○かき消ちて失せにしか。姿を隱して行方知れずになつた。○まだ世にあらば……さすらふらん。まだ此世に生きながらへてゐるならば、見るかげもないつまらぬ世に落魄してゐるであらう。○あはれと思ひしほどに……あくがらさざらまし。かはゆいと思うたうちに、こむづかしげにいうて我を來纏はすやうにする樣子でも見えたならば、かやうにさまよはすことはさせまい。○さるものになして。相應な者になして。○今やうく忘れゆくきはに……胸焦るゝ夕もあらん。今そろく忘れかゝる時分に、女もまた我を忘れきれないで、時々は我心から胸の焦れて戀しく思はれる夕もあるであらう。○これなんえたもつまじく、頼もしげなき方なりける。これが長く副ひとげる事の出來ない、頼もしげのない方の女であるわい。

〔中將〕「さればかのさがなものも、思出である方に忘れがたけれど、さしあたりて見んには、煩はしく、よくせずば、飽きたき事もありなんや。琴の音の進めりけんかどくしさも、すきたる罪重かるべし。この心もとなきも、疑そふべければ、いづれと終に思ひ定めずなりぬるこそ世の中〔なれ〕や。たゞかくぞとりくに比べ苦しかるべき。このさまくのよきかぎりをとり具し、難ずべきくさはひ交ぜぬ人は、いづこにかはあらん。吉祥天女を思ひかけんとすれば、法氣づきくすしからんこそ、またわびしかりぬべけれ」とて、皆笑ひ給ひぬ。「式部が所にぞけしきある事はあらん、すこしづゝ語りまうせ」と責めらる。

大意 かの指にくひついた女も、煩はしい所があるし、琴の上手な女も好色らしいのが缺點であるし、この心もとなく姿を隱した女もあだし男でもあるかの疑があつて、いづれがよいとも決しかねる。善美の極をつくして、批難のない女は何處にあるだらうか。吉祥天女でも佛法くさい所があつて面白くなからう。それにしても、式部の處にこそ、一ふしある事があらう、すこし話しなさい。これを第九段とす。

語釋 ○かのさがなもの。あのさがなきもの、即ち指にくひついた女。○思出で

ある方に忘れがたけれど。眞實に夫の後見などをしてくれた事などが思出されて忘れがたいけれど。○煩はしい……ありなんや。ものむづかしく、わるくすると、嫌なと思はれる事もあらうよ。○琴の音の……かど〳〵しさも。琴の音が進んでをつたであらう、才氣まさつた女も。○すきたる罪重かるべし。好色なる缺點甚しくあらう。○この心もとなきも。今話した不安心な女も。おぼつかなきは恨みをいふべきをも言はないで姿を隱すやうな女は、心の程知りがたく不安心に思はれるをいふ。○疑そふべければ。或は他にあだし男でもあるかの疑もつきまとふであらうから。○とりぐ〳〵に比べぐるしかるべき。それ〴〵に長短があつて、比較しがたくあらう。○とりぐし。併有し。○難ずべきくさはひ。非難の種。○吉祥天女を想ひかけんとすれば。吉祥天女に懸想しようとすると。吉祥天女は帝釋天の女にて、端麗なる天女である。○法氣づきくすしからんこそ。佛法くさく神變奇怪であらうのが。○わびしかりぬべけれ。おもしくなからう。わぶは心に滿たぬ意。

〔式部詞〕「下が下の中には、なでふ事かきこしめし所は侍らん」と

いへど、頭の君まめやかに遲しと責め給へば、何事を執りまうさんと思ひめぐらすに、「やゝありて『まだ文章の生にて侍りし時、賢き女のためしをなん見給へし。かの馬頭の申し給へるやうに公事をもいひ合せ、私ざまの世に住ふべき心おきてを思ひめぐらさん方も、いたり深く、才のきは、なま〳〵の博士恥かしく、すべて口あかすべくなん侍らざりし。それは或博士の許に學問などし侍るとて、まかり通ひし程に、主人の息女ども多かりと聞き給へて、はかなき序にいひ寄りて侍りしを、親きゝつけて、盃をもて出て『我がふたつの道うたふをきけ』となん聞えごち侍りしかど、をさ〳〵うち解けてもまからず。かのおやの心を憚りて、さすがにかゝづらひ侍りし程に、女式部を」いとあはれに思ひうしろみ、寐覺のかたらひにも、身の才つき、朝廷に仕るべき道々しき事を教へて、いと清げに、消息文にも假字といふもの書きまぜず、うべ〳〵

しくいひまはし侍るに、おのづからえまかり絶えで、その者を師としてなん、僅かなる腰折れ文作る事など習ひ侍りしかば、今にその恩は忘れ侍らねど、なつかしき妻子と打憑まんに、無才の人なまわろなるふるまひなど見えんに、恥かしくなん見え侍りし。まいて君達の御爲には、はかゞしくしたゝかなる御後見は、何にかはせさせ給はん。はかなし口をしとかつ見つゝも、只我心につき、宿世のひく方侍るめれば。男子しもなん、仔細なきものは侍るめる」と申せば、殘りを言はせんとて、「頭中將」「さて〳〵を かしかりける女かな」とすかい給ふを、「すかし給ふと」心は得ながら、鼻のあたりをごめきて語りなす。

大意 式部がいふ、自分が文章生であつた時分に、師匠の息女と契を結んだ事があつたが、なか〳〵の學者で、なまなかの博士は氣恥かしい位であつて、公私につけて「道々しき事を教へてくれるので、その者を師として、腰をれ文を作ることなどをも習つたが、君達の爲にはかゝるしたゝかなる後見は必要はない、男でさへ學問がなくても仔細なきものもあるから、女はまして學問はなくても差支はないものである。

語釋 ○なに事を執りまうさん。なに事を申上げよう。執りは執達するの意。○馬頭が申し給へるやうに。前に、「朝夕の出入につけても公私の人のたゞすまひ、よきあしき事の目にも耳にも止まるありさまを、うとき人にわざとうちまねばんやは」とあるをさす。○いたり深く。深く通達し。○ざえのきは。學問の程度。○なま〳〵の博士。なまなかの博士。○口あかすべくなん侍らざりし。議論などをしても人に口をあいて物をいはせなかつた。○我が二つの途をうたふをきけ。『白氏文集』の「議婚」と題する詩に、「主人會良媒、置酒滿玉壺、四座且勿飲、聽我歌兩途、富家女易嫁、嫁早輕其夫、貧家女難嫁、嫁晚孝於姑、聞君欲娶婦、娶婦意如何」とあるを歌ふをいふ。これは博士の家貧なるによつて式部にいひきかせたのである。○聞えごち侍りし。いひきけました。ごちはごとしの約。○をさ〳〵。あんまり。○さすがにかゝづらひ。さうはいふものゝ關係し。○寢覺のかたらひにも。夫婦同衾して眼の覺めた時の話

草にも。○いと清げに。「消息文にも」の下において解すべき語脈、至極立派に○うべ〳〵しくいひまはし。尤もらしくいひまはし。○腰折れ文作る事など。○なまわろならんふるまひなど見えんに。なんとなく見苦しい擧動などを見られように。○まいて君達の御爲……せさせ給はん。我等の如きものですらなほかくの如くである、まして君達の貴き方にとつて、しかとした大層な御後見は何になさいましようぞ、真必要はありますまい。○はかなし、口をしいと……仔細なきものは侍る。愚かなる女を、いふ甲斐ないものだ、殘念なものだと一方では見ながらも、其姿貌などの只我意に叶ひ、緣にひかれて相副ふこともありますから、女の才學などは無くてもよいものである、男子でも學問がなくても何の差支がないものもあるやうであります。○鼻のあたりをごめきて語りなす。鼻の邊をひこつかせて語る。得意になつて語る體である。

〔式部〕「さていと久しくまからざりしに、ものゝたよりに〔女の家に〕立寄りて侍れば、常のうちとけ居る方には侍らで、心やましき物越しにてなん逢ひて侍りし。ふすぶるにやと、をこがましくも、またよき〔中絶の〕ふしなりと思ひ給ふるに、このさかし人はた輕輕しきものゝゑんじすべきにもあらず、世の道理を思ひとりて恨みざりけり。聲もはやりかにていふやう、『月ごろ風病重きに堪へかねて、極熱の草藥を服して、いと臭きによりてなん、えたいめんたまはらぬ。まの當りならずとも、さるべからん雜事等は承らん』と、いとあはれにうべ〳〵しくいひ侍り。いらへに何とかはいはれ侍らん。たゞ『うけたまはりぬ』とて立出で侍るに、〔女は〕さう〳〵しくやおぼえけん、『この香失せなん時に立寄り給へ』と高やかにいふを、聞きすぐさんもいとほし、〔さりとて〕しばし立ちやすらふべきにはた侍らねば、げにそのにほひさへ花やかに立添へるも術なくて、にげめをつかひて、

〔式部〕『さゝがにのふるまひしるきゆふぐれに、

ひるますぐせといふがあやなさ。

いかなることつけぞや』といひもはてず、走り出で侍りぬるに、追ひて、

〔女〕『あふことの夜をしへだてぬ中ならば、
ひまるもなにかまばゆからまし』。

さすがに口とくなどは侍りき』と靜々と申せば、君だちあさましと思ひて、そら言とて笑ひ給ふ。〔君だち〕「いづこのさる女かあるべき。おいらかに鬼とこそ向ひ居たらめ、むくつけき事」〔かな〕と爪はじきをして、いはん方なしと式部をあはめにくみて、〔いま〕「すこしよろしからん事をとり申せ」と責め給へど、〔式部は〕「これより珍らしき事はさぶらひなんや」とて下りぬ。

大意　式部が語をつゞけて「私が久しく女の許へ行かないで、事の序に立寄りますと、いつもとは違つて、女は物越しに逢つたはてすねたのか、手をきるのには好

機會であるぞと思ふと、この賢女なかく物怨じなどするやうなものではない。聲もはつきりと、月ごろ風病重きに堪へかねて、極熱の草藥を服して臭きによつて、對面する事が出來ない、然るべき雜事は此處で拜聽しようといふ。私は何と返事すべき辭もなく、只かしこまりましたというて立去らうとすると、女がこの香の失せなん時に立寄り給へと高らかにいふので、そのまゝにも立去りかねて、一首の歌をよみかけて、何といふかこつけごとかといふと、すぐ追つかけて返歌をした。實にすばやいものであつた」と語る。君だちは式部の話をうそだというて、何處にそんな女があらうぞ、そんな恐ろしい女につれそふよりも鬼とさし對つてゐる方がよい、もつと然るべき事を話せといふ。式部はこの外に珍らしい事はないというて退出した。以上を第十段とす。

語釋　○ものゝたよりに。事の序に。○心やましき物越しにて。おもしろくもない、物を隔てた處で。○ふすぶるにや。けぶたがらすのか。○よきふしなり。緣を斷つに好機會である。○聲もはやりかにて。聲もあざやかに。○極熱の草藥を服して。極熱の時に用ひる草藥を服用して。さてこゝに草藥とは蒜の事にて、『本草』に葫音胡、和名於保比流味辛溫除風者也と見ゆ。○まのあたりな

らずとも。直に御目にかゝらないでも。○うべ〳〵しくいひ侍り。尤らしくいひまする。○さうぐしくや覺えけん。物足らぬ事に思つたのであらうか。○聞きすぐさんもいとほし。聞き流して出でんのも氣の毒。○しばし立ちやすらふべきにはた侍らねば。さりとて躊躇すべきでも亦ないから。○げにその香さへ花やかに立添へるも術なくて。女のいふとほり、いかにも其香まで、花やかに鼻につくのもせんすべなくて。○にげめをつかひて。今の俗語ににげ腰をつかふといふと同じく、にげ支度をすること。○さゝがにの……いふがあやなさ。さゝがには本來蜘蛛の枕詞であるのを、直に蜘蛛の事にとり成し、『古今集』に「わが背子が來べきよひなり、さゝがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」とある古歌により、今夜は我が來べき晩であるから、かの蜘蛛のふるまひは夕暮から著しくあらうものを、その夕暮にひるま過ぐせといふのは譯の分らぬ事なりといふ意で、晝間に蒜の香の失せる間といふ意を兼ねさせたのである。○いかなることつけぞや。何といふかこつけ事であるか。○追ひて。あとを追ひてにて、すぐにといふ意。○逢ふことの……まばゆかまし。逢ふことが夜をへだてずして毎夜逢ふほどの中であるならば、晝

間の對面も何で恥かしからうされどそれ程に思はれぬ中であるから遠慮されるのである。晝間に蒜の香の失せる間をかねたことは前の歌におなじ。○そらごと。虚言。○いづこのさる女かあるべき。どこにさやうの女があらう。○おいらかに鬼とこそ對ひ居たらめ。さやうな女と副はうよりは、尋常に鬼とさし對ひて居る方が結構であらう。○むくつけき事と爪はじきをして。おそろしい事よと賤しみ嫌うて。○式部をあはめにくみて。式部をうとみにくんで。○おりぬ。源氏の御とのゐ所から式部が下りて歸つた。

〔馬頭〕「すべて男も女も、わろものは、僅に知れる方の事を、遺りなく〔人に〕見せ盡さんと思へるこそいとほしけれ。〔女などの〕三史五經の道々しき方を明かにさとりあかさんこそ、愛敬なからめ。などかは女といはんからに、世にある事の、おほやけわたくしにつけて、むげに知らずいたらずしもあらん。わざと習ひ學ばずとも、すこしもかどあらん人の、耳にも目にも留ること〔は〕自然に多かるべし。さるまゝには、眞字を走り書きて、さるまじき中の

女ぶみに、半過ぎて〔眞字を〕書きすくめたる、あなうたて、この方のたをやかならましかば〔よからまし〕と見ゆかし。〔書く人の〕心地にはさしも思はざらめど、おのづから剛々しき聲に讀み成されなどしつゝ、ことさらびたり。これは上臈の中にも多かる事ぞかし。歌よむと思へる人のやがて歌にまつはれ、をかしき故事をも初よりとりこみつゝ、すさまじきをり〳〵、〔人に〕よみかけたるこそ、ものしき事なれ。かへしせねば情なし、えせざらん人ははしたなからん。さるべき節會など、〔たとへば〕五月の節に急ぎ〔禁中に〕參る朝、なにのあやめも思ひしづめられぬに、えならぬねをひきかけ、九日の宴にまづ難き詩の心を思ひめぐらし、暇なきをりに菊の露をかこち寄せなどやうのつきなき營に合せ、さならでも、おのづからげに後に思へば、をかしくも、あはれにもあべかりけることの、そのをりにつきなく、目にも留らぬ〔こと〕などを、おし量ら

ず詠み出でたる、なか〳〵心おくれて見ゆ。よろづの事に、などかは、さても〔あれかし〕と覺ゆる折柄とき〴〵〔を〕思ひ分かぬばかりの心にては、よしばみなさけだゝざらなん、めやすかるべき。すべて心に知れらん事をも、知らずがほにもてなし、いはまほしからん事をも、一つ二つのふしは過ぐすべくなんあべかりける」。などいふにも、〔源氏の〕君は人ひとりの御有樣を心の中に思ひつゞけ給ふ。〔世に數ある女の中に〕これは足らず、またさし過ぎたる事なく、物し給ひけるかなと〔世に〕ありがたきにも、いとゞ胸ふたがる。いづ方によりはつともなくて、はて〳〵は怪しき事どもに成りて、〔夜を〕明かし給ひつ。

大意 馬の頭のいふのに、「男でも女でも、さし出るのはよろしくない。女だといふて、わざ〳〵學ばないでも、所謂耳學問目學問で、公私の事につけて自然修得する事も多くあらう。さればとて漢字などを走り書いたりするやうな事はよ

ろしくない。これは上蔵の中などにも多い事だが、又、歌を詠むと思つてゐる人が歌にとらはれて、人に詠みかくまじい時に詠みかけて人を困らせたりするものもあるが、時と場合を辨へぬやうでは、却て風流がらぬ方がよからう。人といふものは、言ひたいと思ふ事でも、一つ二つは言はずに過す方がよい」などゝ語る。かゝる中にも、源氏の君はかの藤壺一人の上を思ひつゞけてゐられる。かくていづれに決するともなくて、夜を明かされた。以上を第十一段とす。雨夜の品定こゝに終る。

語釋

○わろものは。賤しいものは。○三史五經。三史は史記、前漢書、後漢書、五經は毛詩、尚書、周易、禮記、春秋。○道々しき方。したゝかなる道理を。これは女の事をいへるにて、次に「などか女といはんからに」とあるより、しか解せられるのである。○などかは女といはんから。なんで女だというて。などかは下のいたらずしもあらんまでかゝる語脈。○むげに。一向に。○すこしかどあらん人。多少才のあらう人。○さるまゝには。さうあるに任せて。○さるまじき中の女ぶみに、……書きすくめたる。さうはすまじい女同志の文に過半漢字を交へて縮め書いたのは。假字ならばのびゝと書かれるを、漢字を多く交へ書いたので縮めというたのである。○あなうたて、この方のたをやかならましかばと見ゆかし。あゝいやだ、この點がおとなしやかならばよからうと見えるよ。○ことさらびたり。わざとがましい。○上蔵。上流の人。○やがて歌にまつはれ。すぐにその歌にまきつかれ、とらはれて。○すさまじきをり〳〵。似つかはしからぬ場合々々。○ものしき事なれ。いかゞはしい事である。○かへしせねば……はしたなからん。歌を詠みかけられたものが、返歌をしないと情を知らぬやうに見え、また返歌をし得ざるものは手持不沙汰に不都合であらう。○さるべき節會など。然るべき禁中の儀式など。○五月の節。五月五日の菖蒲の節會に。○なにのあやめも思ひしづめられぬに、……ひきかけ。急ぎ參内せんとするので心せかれて、何の分別もなく、じつと落付いて考へられぬ時に、ひとゝほりならぬ歌をよみかけ。あやめ、ねをひきかけは、共に五月の節會に緣のある菖蒲、菖蒲の根を引きかけの意をかねた語である。○九日の宴。九月九日の重陽の宴。○かたき詩の心を思ひめぐらし。むづかしい詩の想を工夫し。○菊の露をかこち寄せ。菊水などに託して歌を詠みかけ。○つきなき營に合せ。不似合なるてまど

りに合せ。○さならでも。さうなくても、必ず其日ならでも。○あべかりける事の。あるべかりけるにて、あつたであらう事の。○そのをりにつきなく。その場合に不似合に。○なか〳〵心おくれて見ゆ。却て心が劣つて見える。○などかはさてもと覺ゆる折柄とき〴〵。なんで歌をば詠みかける事をばしようぞ、詠みかけないであれかしと思はれる場合々々。○よしばみなさけだゝざらんなん。よしありげに風流めかさないであらう方が。○めやすかるべき。見苦しくあるまい、難があるまい。○心に知れらん事。心に知つて居らう事。○いはまほしからん事。言ひたからう事。○一つ二つのふしは過ぐすべくなんあべかりける。一二箇條は言はで過ぐすべきであるわい。○人ひとりの。藤壺一人の。○これは足らず……物し給ひけるかな。この藤壺は足らぬ所もなく、またさし出た事もなくあらせられるわい。○ありがたきにも。世に藤壺の如き女のあること難きにつけても。○いづ方にはつともなく。品定の論はどちらに歸着するともなく。

附言　雨夜の品定は、こゝで終つたのである。念の爲に、今一度つゞめていうて見ようか。世の中に女といふ女は澤山あるが、一生の妻をとなると、所謂帶には

短し襷には長しで、さてむづかしい。まさか妻さだめの標準が、氏素性がよければでもあるまい、容貌ばかりでは勿論ない。うはべのなさけ、例へば歌を詠むとか、繪を書くとか、至極結構だが、そればかりでは頼むに足らぬ。ねぢけがましい點なく、心信實に、もの靜かなといふことが、妻さだめの標準ではあるまいか。その上に風流などの嗜があれば尙よろしいが、まづ難い、强ひてつけ加へずもがなである。これが所論の歸着點らしい。馬頭が昔逢うた形態かまはぬ實體な女とあだ〳〵しい浮氣女の物語をして、共に難ある由をいひ、頭中將が氣の弱い當てにならぬ女の難をあげ、藤式部が才學だてする博士の女の難をいうたなどは、何れもその餘論とも見るべきものである。夫の歸りが遲いというては駄々をこねたり、胸づくしをとつたりする喜劇『女天下』の女主人公に見るような女は、そもく〳〵かの指にくひ付いたさがな女の類か。電車の中で、能く讀めもせぬ洋書をつゝみから取り出して、これ見よがしに拈りまはす女學生は、今日この頃そんじよそこらで折々見受けるようだが、これ等は博士の女に類して尙ほ及ばざるものか。自分の子供の養育すら乳母まかせ下女まかせにして家を殼に交際場裡に跳ねまはる細君や、物見遊山にうき身を

やつす令嬢たちは、紫式部に見せたならば何といふであらうか。

夕がほ

さらに「夕顔」と題する卷の中から、夕がほといはれる女に關する部分だけを選釋して見よう。この卷は源氏五十四帖の中でも比較的優れてゐる作で、夕がほといふ女の意志の弱い臆病なところも能く描かれてゐるし、源氏が女性といふものに對する態度なども更に能く現はれてゐる。夕がほに關する部分だけでは遺憾の點も尠くないが、紙數に際限があるから據ない。

さて、この卷は、源氏が六條の御息所の許へ通ふ途すがら、源氏が曾て孤兒となつた頃に自分を大事に育てゝくれた乳母の病氣にかゝつてゐるのを見舞に行つた事から書き出してゐる。これは年立によると源氏が十七歳の夏のことである。源氏は乳母の家を訪ねたが、生憎門が閉ぢてあるので、それを開けさせるうち、車を留めて、暫く往來を眺めて見た。乳母の家の隣に、ふるぼけた家があつて柱なども傾きかけてゐるが、庭の籬に夕顔の花の白く這ひまつはつてゐるのが少からず目

に立つ。よく見ると若い女どもが集つて此方を覗いてゐる。源氏はふつと氣紛れな心を起した。「雨夜の品定」に、下が下といふあたりにも思ひがけぬ堀出しものがあると聞いた事を思ひ出したからである。そこで、乳母の子で腹心の家來なる惟光といふに樣子を探らせる。

惟光日ごろありて參れり。「わづらひ侍る人なほ弱げに侍れば、とかく見給へあつかひてなん〔え參らざりし〕など聞えて、近く參り寄りて聞ゆ。「仰せられし後なん、となりの事知りて侍るものの呼びて、問はせ侍りしかど、はかゞしくも申し侍らず。いと忍びて、五月の頃より物し給ふ人なんあるべけれど、その人とは更に〔その〕家のうちの人にだに知らせずとなん申す。時々中垣のかいまみし侍るに、げに若き女どもの透影見え侍り。褶だつ物かごとばかりひきかけて、かしづく人侍るなゝめり。きのふ夕日の名殘りなくさし入りて侍りしに、〔見入れたれば〕文書くとて居て

侍りし人の、顔こそいとよく侍りしか。もの思へるけはひして、ある人々も忍びて打泣くさまなどなん、しるく見え侍る」ときこゆ。〔源氏〕君うちゑみ給ひて、知らばやとおもほしたり。〔惟光心に〕おぼえこそ重かるべき御身の程なれど、御齢の程、人の靡き愛で聞えたるさまなど思ふには、好き給はざらんも、情なくさうぐしかるべし。人のうけひかぬ程にてだに、なほさりぬべきあたりの事は、好ましう覺ゆるものをと思ひ居り。〔惟光〕「もし見給へ得ることもや侍ると、はかなき序を作り出て、消息など遣はしたりき。書き馴れたる手して、口疾く返事などし侍りき。いと口惜しうはあらぬ若人ども侍るめる」と聞ゆれば、〔源氏〕「なほいひ寄れ。尋ね知らではさうぐしかりなん」とのたまふ。かの下が下と人の思ひおとしゝ住居なれど、その中にも、思ひの外に口惜しからぬを見つけたらんは〔いかゞをかしからざらん〕と珍らしうおも

ほすなりけり。

語釋 ○わづらひ侍る人。乳母の尼君。○はかぐしくも申し侍らず。しつかりとも申しません。○物し給ふ人なんあるべけれど。來て居る人があるやうだけれど。○その人とは。如何なる人であるとは。○褶だつ物かごとばかりひきかけて。上裳のやうな物をいひ譯ばかりひきかけて。○ある人々。女房たちをいふ。○しるく見え侍る。著く見えます。但し、こゝでは昨日の出來事を語るのであるから、著く見え侍りしとあるべきを誤りたるものと思はる。○おぼえこそ……情なくさうぐしかるべし。世間の思ひなしこそ重々しくあるべき御身分であるが、御年ごろとか、又は人の靡き愛する樣子などを思ふ時は、好色でなからうのも、情なく物さびしくあるであらう。○人のうけひかぬ程にてだに……と思ひ居り。世の人の許さぬ程のつまらぬものですら、矢張りさうもありさうな筋の事は、好ましう思はれるものを、まして源氏のやうな方では、さうあるべき事であると思つて居る。○はかなき序作り出て消息など遣はしたりき。ちよつとした機會をこしらへて、手紙などを遣りました。○いと口惜しうはあらぬ若人どもなん侍るめる。ひどうわろく

はない若い女どもが居るやうである。○かの下が下と。かのとは品定の時に、馬頭がいうた事をさしていふのである。

惟光はその後よく女の家の樣子を探つて見ると、なんでも頭中將が通つて子までなした女らしい。源氏は到頭その女の許へ通ふやうになつた。女が如何なるものであるか明かにはわからない、最早や強ひて知らうとも、しないが、源氏自身も身分を知られまいとして覆面して通ふ。いはゞ二人は何處の馬の骨ともわからぬ中で情交を通じてゐるのである。今も源氏は女の許に來て居る。時は、

八月十五夜くまなき月かげ、ひま多かる板屋殘りなく漏り來て、見ならひ給はぬ住所のさまも珍らしきに、曉近くなりにける なるべし。となりの家々怪しき賤の男の聲に目醒して、〔賤の男〕「あはれ、いと寒しや。今年こそ生業にたのむところ少く、田舍の通ひも思ひかけねば、いと心ぼそけれ。北殿こそ聞き給へや」などいひかはすも聞ゆ。いとあはれなるおのがじゝのい、となみに、起き出てそゝめき騷ぐも程なきを、女いと恥かしく思ひたり。艶だち氣色ばまん人は、消えも入りぬべき住所のさまなめりかし。されど〔夕がほは〕のどかに、つらきも憂きもかたはら痛きことも、思ひ入れたるさまならで、わがもてなしありさまは、いとあてはかにこめかしくて、またなくらうがはしき隣のよういなさを、いかなる事とも聞き知りたるさまならねば、なか〳〵恥ぢかゞやかんよりは、罪許されてぞ見えける。ごほ〳〵と、鳴神よりはおどろ〳〵しく、踏みとゞろかすからうすの音も、枕がみと聞ゆ。あな耳喧ましと、これにぞ〔源氏は〕おぼさるゝ。〔されど〕なにの響とも聞き入れ給はず、いと怪しうめざましきおとなひとのみ聞き給ふ。くだ〳〵しき事のみ多かり。白栲の衣打つ砧の音も、かすかに此方彼方ききわたされ、空飛ぶ雁の聲、とりあつめて〔あはれの〕忍びがたき事多かり。端近の御座所なりければ、遣戸をひきあけ

給ひて、〔夕顔と〕諸共に見出し給ふ。程なき庭に、されたる吳竹、前栽の露は、なほかゝる所も同じ如きらめきたり。蟲の聲々みだりがはしく、壁の中の蟋蟀だに間遠に聞きならひ給へる御耳に、さしあてたるやうに鳴きみだるゝを、なか〳〵さまかへておぼさるゝも、御志ひとつの〔夕顔に〕淺からぬに〔よりて〕、よろづの罪ゆるさるるなめりかし。しろき袷、薄色のなよゝかなるを重ねて花やかならぬ姿、いとらうたげにあえかなる心地して、そこととり立てすぐれたる事もなけれど、細やかにたを〳〵として、物うちいひたるけはひ、あな心苦しと、たゞいとらうたく見ゆ。こゝろばみたる方を少し添へたらば〔よからん〕と見給ひながら、なほうちとけて見まほしく思さるれば、〔源氏〕「いざ、たゞ此わたり近き所に、心安くて〔夜を〕明さん。かくてのみはいと苦しかりけり」との給へば、〔夕顔〕「いかでか俄ならん」と、いとおいらかにいひて居たり

語釋 ○見ならひ給はぬ。見馴れなさらぬ。○田舍のかよひも。田舍へ通うて商賣する事も。○北殿こそ。北隣の某さんこそといふ程の意。こゝは北隣の人と壁越しに物語するさまをいふのである。○あはれなるおのがじゝのいとなみに。いたいたしい各自の世渡りに。○そゝめき騷ぐも程なきに。ざわつき騷ぐのも程近いのに。○艶だちけしきばまん人……さまなめりかし。やさしがり氣どらう人は消え入つても仕舞うであらうやうな住所の有樣であると見えるよ。○のどかに。暢氣に。○かたはらいたきことも。そばはづかしい事も。○思ひいれたるさまならで。思ひ知つてゐる樣子ではなくて。○わがもてなしありさまは。自分の擧動樣子は。○あてはかにこめかしくて。上品に無邪氣で。○またなくらうがはしき隣のよういなさを。この上なく亂りがはしい隣家の不用意を。○なか〳〵恥ぢかゝやかんより は、罪ゆるされて。隣家の物音を恥ぢて面目なく思はうよりは却て難がなく。○ごほ〳〵と鳴る神よりもおどろ〳〵しく。轟々と鳴る雷よりも仰山に。○枕がみ。枕上、まくらもと。○なにの響とも……のみ聞き給ふ。源氏は何の響とも聞きわけず、いと變な面白からぬ音であるとばかりおきゝなさる。

○くだ〳〵しきことのみ多かり。ごた〳〵した事ばかり多い。○とりあつめて忍びかたき事多かり。いろ〳〵と物哀れの堪へがたい事が多い。○程もなき庭にざれたる呉竹。狹い庭に風流な呉竹。○前栽。前庭。○間遠に聞きならひ給へる御耳に、さしあてたるやう鳴きみだるゝ。程遠くに聞き馴れた御耳に、直ぐ耳のはたへ當てがつたやうに鳴き亂れる。○なか〳〵さまかへて思さる。却て趣がかはつて珍らしく思はれる。○御志ひとつの……なめりかし。夕顔に對する御志一つの尋常ならぬので、さま〴〵の缺點も見のがされるのであらうよ。○薄色のなよゝかなる重ねて花やかならぬ姿。薄紫色の柔かなるのを重ねて派手ならぬ姿。○らうたげにあえかなる心地して。愛らしげに弱々しげな心持がして。○あな心苦しと。あゝいたいけなと。○心ばみたる方。氣の張つたやうな點。○かくてのみはいと苦しかりけり。かうしてばかりではいと窮屈であるわい。○おいらかにいひて。尋常にいうて。

この世のみならぬ契などまでたのめ給ふに、〔夕顔の〕うち解くる心ばへなど、怪しく樣かはりて、世馴れたる人ともおぼえねば、

人の思はん所もえはゞかり給はで、右近を召し出て、隨身を召させ給ひて、御車引き入れさせ給ふ。このある人々も、かゝる御志のおろかならぬを見知れば、おぼめかしながらにたのみをかけ聞えたり。明方も近うなりにけり。鷄の聲などは聞えて御嶽精進にやあらん、たゞおきなびたる聲にぬかづくぞ聞ゆる。起居のけはひ堪へがたげに行ふ。いとあはれに、朝の露に異ならぬ〔はかなき〕世を、何を貪る身のいのりにかと聞き給ふに、南無當來の導師とぞ拜むなる。〔源氏〕「かれ聞き給へ。この世とのみは思はざりけり」とあはれがり給ひて、

〔源氏〕「うばそくが行ふ道をしるべにて
來ん世も深きちぎりたがふな。」

長生殿のふるき例は忌々しくて、翼を交さんとは引きかへて、彌勒の世をぞかね給ふ。行先の御ためいとこちたし。

〔夕顔〕「さきの世の契知らるゝ身の憂さに
ゆくすゑかねてたのみがたさよ。」

かやうの筋なども、さるは心もとなかめり。いざよふ月にゆくりなくあくがれん事を、女も思ひやすらひ、とかくの給ふほどに、俄に〔月は〕雲がくれて、明けゆく空いとをかし。

語釋 ○この世のみならぬ契などまでたのめ給ふに。この世のみならず未來までを契りて夕顔にたのませなさるに。○怪しく樣かはりて。奇態に普通の女とは樣子がかはつて。○世なれたる人。男馴れた人。○人の思はん所もえはゞかり給はで。人のおもはくをも遠なさらないで。○このある人々。この家にある女房たち。○御志のおろかならぬ。御志の疎ならぬ。○おぼめかしながら。覺束なく思ひながら。○御嶽精進。御嶽は大和の金峰山のことで、金峰山に千日精進して參詣すること。○おきなびたる聲にぬかづく。年寄りじみた聲で禮拜する。○南無當來の導師。南無は梵語にて歸命頂禮と譯す。當來の導師は彌勒菩薩のこと○うばそく。優婆塞と書き、在俗のまで佛門に歸依してゐる男こゝには行法する翁をいふ。○長生殿のふるき例は忌々しくて。白樂天の「長恨歌」に、七月七日長生殿夜半無人私語時在天願作比翼鳥在地願爲連理枝とあり、唐の玄宗皇帝と楊貴妃の契は末が遂げなかつた故に忌々しくといふのである。○彌勒の世をぞかねぬ給ふ。彌勒出世の遠き未來までも變るまいと末かけて契りなされる。○御たのめいとこちたし。御たのませ甚だ仰山らしい。○さきの世の……たのみがたさよ。前世の宿緣の惡いことが知られる身のつらさに、未來の契も豫め賴みにしがたいことであるよ。○かやうの……心もとなかめり。かやうな歌をよむ方面の事も覺束ないやうである。○ゆくりなくあくがれん事を。不意に浮かれ出でん事を。

はしたなき程にならぬさきにと、例の急ぎ出で給ひて、輕らかに打載せ給へれば、右近ぞ乘りける。そのわたり近き某の院におはしましつきて、あづかり召し出づる程、荒れたる門の垣草茂りて、見あげられたる、たとしへなく木ぐらし。霧も深く、露け

きに、〔車の〕簾をさへ上げ給へれば、御袖もいたう濡れにけり。〔源氏〕

「まだかやうなることをならはざりつるを、心づくしなる事にもありけるかな。

いにしへもかくやは人の惑ひけん
わがまだ知らぬ東雲の道。

〔そこには〕ならひ給へりや」との給ふ。女恥ぢらひて、

「山の端のこゝろも知らでゆく月は
うはの空にてかげや絶えなん。

心細く〔あれ〕とて、もの恐ろしう凄げに思ひたれば、かのさしつどへる住所の心ならひならんと、をかしうおぼす。

語釋 ○はしたなき程にならぬさきに。不都合にならぬ先に、即ち夜が明け放れて人顔のわかるやうになつては不都合であるから、さうならぬ先にといふ義。○例の急ぎ。いつもの如く急ぎ。○輕らかに打載せ給へれば。源氏自身夕

顔を抱いて車に載せなさつたれば。○右近ぞ乘りける。女房の右近が御供にと相乘りした。○あづかり召し出つる程。留守預のものを呼び出す間。○心づくしなる事。辛氣な事。○いにしへも……東雲の道。昔の人も戀の道にはかくの如くに惑ひ歩いたことであらうか、自分はかゝる東雲ごろの道はまだ知らないことであるといふ意、この歌からつゞけて御身は習ひ給へるかどうかと尋ねるのである。自分の事は棚へあげて先づ女の様子を試して見る、源氏は元來づるい男である。○山の端の……かげや絶えなん。行末の心も知らでかやうに隨ひ行く我が身は、心も身に副はず夢中に生涯を終はることであらうか。女自身を山の端に入る月に喩へ、その身がうはの空にて命絶えることを月の大空にて影絶えることに比べたので、うはの空は心が身に副はで一切夢中なること。この歌はやがて夕顔のこの院にて死ぬことをほのめかしたのである。○かのさしつどへる住所の心ならひならん。かの狹い宿所に多人數集りゐた習慣であらう。

御車いれさせて、西の對に御座など粧ふ程、勾欄に御車ひきかけて立て給へり。右近艶なる心地して、來し方の事なども、人知

れず思ひ出でけり。あづかりいみじく經營して歩くけしきに、この御有様知りはてぬ。ほのぐと物見ゆる程に、〔車より〕下り給ひぬめり。假初なれど、清げに〔御座を〕しつらひたり。〔留守預の〕『御供に人も侍はざりけり。不便なるわざかな』とて、睦まじき下家司にて、殿にも仕うまつるものなりければ、〔御座所へ〕參りよりて、さるべき人召すべきにやなどまうさすれど、〔源氏〕『殊更に人來まじき隱家求めたるなり。更に〔其方が〕心より外に漏らすな』と口がためせさせ給ふ。御粥など急ぎ參らせたれど、とり次ぐ御まかなひ〔人〕うちあはず、まだ知らぬことなる御旅寢に『おきなが川』と契り給ふより外のことなし。日たくる程に起き給ひて、格子手づから上げ給ふ。いといたく荒れて、人めもなく、はるぐと見渡されて、木立いと疎ましう物ふりたり。けぢかき草木などは殊に見所なく、みな秋の野らにて、池も水草に埋れたれば、いと氣疎げなり。別納の方にぞ、曹司などして、人住むべかめれどこなたは離れたり。〔源氏〕『氣疎くもなりにける處かな。さりとも鬼などもわれをば見ゆるしてん』との給ふ。顔はなほ隱し給へれど、女のいとつらしと思へれば、げにかばかりには隔あらんも、事のさまに違ひたりとおぼして、

〔源氏〕『ゆふ露にひもとく花は玉ほこの
たよりに見えし縁こそありけれ。

露の光や如何に』との給へば、〔夕顔〕しりめに見おこせて、

〔夕顔〕『光ありと見し夕がほのうは露は
たそがれ時のそらめなりけり。』

とほのかにいふ。をかしとおぼしなす。げに打解け給へるさま世になく、所がらまいて忌々しきまで見え給ふ。〔源氏〕『つきせず隔て給へるつらさに、あらはさじと思ひつるものを、今だに名

のり給へ。〔名のらでは〕いとむくつけし」との給へど、あまの子なればとて、さすがにうち解けぬさま、いとあいだれたり。〔源氏〕「よしこれも我からなりなり」と恨み且は語らひ暮らし給ふ。

語釋　○西の對に御座所などよそふ程。西方の對の屋に御座所を設けるうち。西の對とは、昔は寢殿作りとて中央正面に正殿あり、其の東西に相對して稍小なる御殿のあるを、東の對及び西の對と呼んだのである。○勾欄に御車ひきかけて立ち給へり。欄干に車の轅をひきかけて立つてゐられる。○右近艶なる心地して……思ひ出でけり。右近は御樣子の風雅であるのを見て、以前頭中將の通つた時の事などを心密かに思ひ出した。○あづかり……御有樣知りはてぬ。留守居のものがひどく支度して歩くので、この御有樣を何人であるか即ち源氏君であると合點した。○御供に人も侍はざりけり。不便なるわざかな。御供のものも附いていられなかつた。不都合の事であるわい。○下家司。下位の家司といふことで、家司は今の家令の如く家事一切の取扱をなすものゝこゝでは此の院の留守を預る人をさしていふ。○殿にも。左大

臣殿のことで、源氏の舅をいふ。○更に心より外に漏らすな。其方の心一つにをさめて決して餘所外に漏らすな。○とりつぐ御まかないうち合はず。とりつぐべき給仕などが間に合はない。○おきなが川と契り給ふより外のことなし。おきなが川は近江國坂田郡にある川で、『萬葉集』の歌に「にほ鳥のおきなが川は絶えぬとも君に語らふことつきめやも」の如く、息長川はよしや絶えることはあつても、二人の語ひは盡きることはないと、末かけて約束せられるより外の事はない。○木立いと疎しう物ふりたり。庭前の立木は人氣遠く舊びてゐる。○秋の野らにて。秋の野の如く甚しく荒れたるさまを直ちに秋の野らにてと書いたのである。○池も水草に埋れたれば。池も水草に掩はれてゐるから。○別納の方。離れ家の方。○曹司。部屋。○さりともあらうと仰せられる。源氏が自惚の強さ、この一語に能く現はれてゐる。こは世間の坊樣育ちの貴公子にありさうな事也。○げにかくばかりにて隔あらんも。いかにもこれほど相馴れて隔心のあらうのも。○事のさま違ひたり。事が矛盾してゐる。覆面してゐる事が馴れ親んでゐる事情と相反して